

---

# 伊那自由大学の設立とその展開

山野 晴雄

---

## はじめに

長野県下伊那地域で約6年間にわたる学習運動を展開した伊那自由大学(創設当初は信南自由大学)については、宮坂広作が「各地にできた自由大学の中でも、最も実践的な性格をもっていた」と評価し(宮坂 1968)、筆者が史料発掘とともに伊那自由大学の全体像を明らかにして以降(山野 1973; 山野1975)、下伊那地域の社会主義青年運動と伊那自由大学との関係をめぐって、また、佐々木忠綱、福元多世、胡桃澤盛、楯操らの聴講者が自由大学とどのように関わり、その後どのような影響を与えたかについて検討が進み、さらに千代村支部の再評価など、上田自由大学に次いで多くの研究が蓄積されてきた<sup>(1)</sup>。

伊那自由大学の歴史は、大きく3つの時期に分けられる。第1期は、下伊那自由青年連盟や下伊那郡青年会と一定の関係をもちつつ1923年12月に設立され、24年3月にLYL検挙事件が起きるまでの創設期で、第2期は、LYL検挙事件後、パンフレット『伊那自由大学とは何か』を刊行してLYLや自由青年連盟から自立した教育機関であることを表明しつつも、社会主義青年運動と一定の関係を持ちつつ飯田で講座を開講した時期、そして第3期は、1927年以降支部組織に変更され、とくに千代村支部では補習学校や図書館の理想的改革、また研究会を組織して地域の改革を進める構想など新しい動きが見られつつも、30年に消滅するまでの時期である。

本稿では、このように分けられる伊那自由大学の歴史について、近年の研究成果を取り入れつつ、その全体像を明らかにしてみたい。

## 1. 下伊那地域の青年たち

### (1) 大正自由教育の実践

長野県の養蚕業は、第一次世界大戦中の好景気とともに大きく発展したが、下伊那地域は、長野県の中でも養蚕業の最も盛んな地域の1つであった<sup>(2)</sup>。1917年には桑園面積が稲作面積を上回り、収繭量は31年まで上昇を続けた(田中 2012: 14)。下伊那地域の青年たちは、この養蚕業の好景気を背景に、自由主義や人道主義、あるいは民本主義などの大正デモクラシーの思潮を受け入れていった。

下伊那の青年教員を中心に画一主義への批判が高まり、個性の尊重や形式打破を唱えるいわゆる大正自由教育とよばれる教育実践をするだけでなく、実業補習学校で青年たちと交流し、青年たちに影響を与えていった。

飯田小学校には、白樺派教師だけでなく、同じく教育の刷新をめざす東西南北会の教員もおり、ま

た、下伊那地域ではそのような改革派の教員がつくった「風越会」というグループもあった。この風越会に集まる教員たちが下伊那教育会の体制改革に取り組んだのが教育会の自主化であった。1918年12月に開かれた第44回下伊那教育会総集会において、「これまでの常議員制を廃して幹事とし、総会にて選挙で選出する」という建議を提出し、議決されると、翌日の選挙では、幹事10人のうち改革派が7人を占め、元老派とされる大物校長等はほとんど落選する事態となった。そして19年、20年と2回の総集会で、教育会の会長・副会長に郡長や郡視学が就任する慣例が見直され、選挙で会員より選出するという規則改正が行われた（下伊那教育会史編集委員会編 1987：233-249）。この教育会の自主化を主導した改革派教員の一人であった飯田小学校の三石直人は、19年2月、年度途中で千代小学校に転出させられている。

その千代小学校では、吉田一郎校長が「教育方針ハ個性尊重主義教育ト精神教育トヲ重ジ又体育ニハ格段ノ注意ヲ払ヒタリ又創造力思考力ヲ涵養セン為メニ理科教授ニ力ヲ注ギタリ」との教育方針<sup>(3)</sup>を示していたように、自由教育を実践していた（『村会事件 大正八年度』旧千代村役場文書、大串 1978：85、栗谷 2019：59-60）。この教育方針は、1919年2月の村会で問題とされ、個性尊重主義は教育勅語に基づくのか、自学補導は気分教育主義ではないか、と追求されたが、吉田校長は、「教育ハ凡テ教育勅語ニ基クハ勿論」であるとし、その「個性尊重主義」は「人ト云ウ共通ノ上ニ個性ヲ有ス故ニ人間ノ天分ヲ見出シテ向フベキ方向ヲ見出シテハ教育スル方針ナリ」と答え、「自学補導」については「日本ノ教育方針ナリ」とし、この「方法ハ成ルベク多ク生徒ニ考ヘセシムルモノ」で、「自カラ進デ習フ考ヘテハマタ習フモノ」であると答えている。また、修身については、修身ノ教科書ハ欠点ガ多キト云フ故重キヲ置カズ伝記等ヲ附ケ加エテ教授スルモノナリ」と述べている（『村会事件 大正八年度』旧千代村役場文書、大串 1978：101-103）。翌1920年度の教育方針は「人格主義ノ教育ト精神主義トヲ重ジ又体育ニハ格段ノ注意ヲ払ヘリ」と、「個性尊重主義」から「人格主義」に変えられているが（栗谷 2019：60-61）、基本的姿勢は変わっておらず、高等科2年の担任となった三石の「自学補導」の授業について、当時授業を受けていた楯操は、「授業の時間に教えるというようなことはしないで、全部ゼミといおうか自分等で自習をして疑問点は先生に聞く、そして生徒に自習させておいて先生は自分の好きな本を読むという状態だった」とし、「時には一緒に社会問題とか有名な論文について話をされその話を拳をにぎって聞いた覚えがあります」と、回想している（楯操の証言、座談会 1979：25-26）。楯は、この三石から学問・思想を学ぶ大きな感化を受けた一人であった。

竜丘小学校の自由教育は、自由画教育、綴り方教育、童謡教育の3つの柱からなっていた。教員たちは1915年から自由教育の研究を始め、自由画教育は木下茂男（紫水）、綴り方は橋爪福弥、童謡教育は小林八十吉が中心となり、全教員の協力によって行われていた。最もよく知られている自由画教育は、1917年から始めており、木下が本格的に実践を行うため、18年には尋常1年を担任し、卒業までそのクラスを担当する了解を取りつけている。山本鼎が神川小学校で第1回児童自由画展覧会を開催する1年前のことであった。木下は、小学校4年までは写生を中心にし、色鉛筆やクレヨンで描かせ、5、6年頃にデッサンを取り入れた授業を行っていた（大串 1980a：46-48）。当時、小学生であった北澤小太郎は、木下の授業について、「自分で自然を見つめ、自分の感覚で描く事を徹底的説き、「生徒の絵のいろいろな個性、特徴、ひとりひとりのどこか長所を賞めて励まし」、「西洋の絵、特にミレー、ミケランデエロ、ゴッホ等の写真や複製を見せてくれて話をしてくれた」と、回想している（北沢 1980：45）。木下は、「子供の生命の奥にはどれ程大きい力が潜んでゐるか実に驚くはではありませんか、私達の先輩の多くは此の点について余りに平気であつた、平気であるのみか子供は大人の未成品である、模写である、縮図であると観考して居たものが頗る多かつた、だから平気で子供の自由を蹂躪した、浸害した、<sup>ママ</sup>と、書いていたよう、大人とはちがう子どもの独自性を認め、

その子どもの独自性を発揮するためには自由が必要であり、そのことによって創造が生まれると考え、「自由こそ実に創造の母である」と、主張していた（木下 1921：37-38）。そして、1919年9月には竜丘小学校を会場に第2回児童自由画展覧会が開催されている(4)。

## (2) 補習学校の自主化

こうした自由教育を支持する青年教師と、小学校を卒業しても家の都合で中学校に進学することのできない青年たちとの交流の場となったのが補習学校であった。羽生三七・代田茂・関口光男らが学んでいた鼎村の補習学校では、青年教師松沢茂三がいた。松沢は、白樺派の運動に関心を持ち、アララギ調の短歌を学び、補習学校では、愛読書を謄写版で刷ってテキストにしたり、作歌の指導をしたりし、授業が済んでからも教室の火鉢を囲んで討論に花を咲かせ、夜の更けるのも忘れることが多かったという（長野県下伊那郡青年団史編纂委員会編 1960：34）。

青年教育の場であった補習学校は、1920年12月に「実業補習学校規程」が改定され、職業教育と公民教育が中核的目的であることが明示され、その制度的統一化がはかられたが（斉藤 2019：82-83）、下伊那地域では伊賀良村を中心に青年たちの手で補習学校の自主化が進められた。伊賀良では、伊藤操を専任教員として迎えたのを機に高等小学校卒業後2か年間の昼学制とし、片山卓も伊藤を助けて教壇に立ち、10数名の青年たちが熱心に勉強した。青年会長の代田保雄は、機関誌『とも』に補習学校自主化の経緯を次のように書いている（代田 1923：2-3）。

「一昨年来、青年会に実際青年会員の内から青年会の真の生命として叫び、此時期が人間的教育完成の最も好時期に望んでゐる事が明瞭となって今日漸く教育機関なる事が社会からも認められて来、其の目的に依って事業を進める事が出来た。それに依り青年会の第一の重要機関として補習学校を先づ修養機関として此れに力を注ぎ、次に図書編集、研究、体育の勸業と云ふ様に内部の各事業機関が活動する事になって居るのだ。（中略）

教育部の方にては補習学校問題で一昨年来奮闘の歴史がある。一昨年十二月補習学校に就いて青年会と当時の補習学校との協議会が開かれた。其際当補習学校は青年会の一つの修養機関である。そして補習学校独立を叫び、補習学校をして真に意義あるものとして徹底した公民的な修養機関として今日の様な社会下に於ける教育機関は中等学校でさへ有産階級の者のみで一般民衆のものではない。其等の矛盾から宜しく補習学校の独立によつて救はうとしたのであった。かくして一昨年十、十一年度の補習学校の開校に及び其の組織の改造が行はれ、其の組織案が生徒間から出た如きであった。尚真に補習学校を独立せしめ一般民衆のものとしせん為め専任教諭を置いて昼間補習を実施すべく運動を開始した。十一年度の補習学校の開校はかくした種々な希望を新組織によつて生れたのだ。その運動、組織共に効果が空しからず、今日の様な独立したのが実施された。是等は時代の要求として必然の結果であると思ふ。」

1922年1月には、下伊那郡青、南信壮年団の共催で、各村青年会長や小学校長が参加する郡下補習学校懇談会が大久保小学校で開催されている。これは、郡下各村の補習学校が連絡をとり相互に知識を広め、同じ目的をもって進むためにとの伊賀良補習学校の発意で開かれたものであった。その後も代表者が集まり協議を重ねたが、郡としてまとまった方針を打ち出すまでにはいたらなかった。

青年教師たちは、補習学校で青年たちと交わりながら、自然主義、自由主義の思想を語り、雑誌や文学書を自主的に読みあった。のちに青年たちが下伊那地域で青年団自主化運動や社会主義青年運動を展開する素地は、補習学校時代のこれら進歩的な教師たちの影響によって培われたともいえる（長野県下伊那郡青年団史編纂委員会編 1960：36）。

### (3) 青年団の自主化

1920年になると、町村青年会レベルで自主化運動がひろがった。当時の青年会は、「青年修養ノ機関」として位置づけられ（内務・文部両省訓令「青年団体ノ指導発達ニ関スル件」、1914年3月7日）、会長や役員には町村長や小学校長などがなるいわゆる官製青年団であった。自主化運動はまず、青年会の役員を青年の中から選出し、青年たちの手で青年会を運営することから始まった。

青年団の自主化にきっかけを与えたのは、1920年1月の内務・文部両省の青年団に関する第3次訓令「青年団体ノ内容整理並実質改善方」（1920年1月16日）で、「自主自立以テ大ニ其ノ力ヲ展ヘシムルハ団体ノ本旨ニ顧ミテ頗ル緊要ノ事ニ属ス、随テ其ノ組織ハ之ヲ自治的ナラシムルニ努メ、団体ノ事ヲ統フル者ハ之ヲ団体員ノ中ヨリ推挙セシムルヲ本則トス」として、青年団の「自主化」方針を打ち出したのである。この訓令は、青年団の青年による「自治」を認めることにより青年の自発性を引き出すことで国家的統制に組みこもうとしたものであった。

千代村青年会では、第3次訓令が出される前の1918年春季総会で、青年会を自主的青年会にするために規約を改正して副会長を会員中から選出することを決め、実施したことがきっかけとなり、会員の年齢問題が論議され、秋季総会では25歳までの年齢短縮が提唱された。そして翌19年春季総会では、「普通選挙法により、正副会長、幹事、代議員を選出し任期二ヶ年とす」る規約改正を行い、役員の全部を会員中から選出して青年会から村長や校長を除外した青年会を組織して自主化を達成した（清水編 1934：28-31）。

1920年にはいと、伊賀良・喬木・鼎・竜丘・下久堅など天竜川に沿う村々の青年会の自主化が進んだ。5月の衆議院総選挙では多くの青年たちは普選派の樋口秀雄を支援して運動し、また早稲田大学下伊那会が大山郁夫を招いて講演会を開いて民本主義思想の普及に努めた。こうした中、21年になると、下伊那郡青年会でも自主化の動きが活発となり、1月28日の郡青代議員会では、竜丘村青から年齢統一と会長・幹事の公選が提案されたが、採決にいたらなかった。しかし、鈴木卯吉郡長が会長辞任を申し出たため、2月5日に臨時代議員会が開かれ、「正副会長は代議員会において会員より選出す」と会則が修正され、会長に斉藤誠逸郎（飯田）、副会長に林英（松尾）が選出され、郡青自主化の第一歩となった。ところが、顧問に郡長や在郷軍人会分会長、校長など官製青年団時代の役員がなっていたため、徹底的な自主化を主張する竜丘など竜峡地区青年会は、2月20日に竜峡6ヵ村ブロック青年会大会を開き、「郡青会員の年齢二五歳までに制限す」の年齢低下案を決議し、他ブロックにも呼びかけ、22日には郡青緊急総会を飯田町曙座で開催させた。緊急総会では、竜丘の下平周一提案の年齢25歳制限案が満場の会員に了承され15名の委員に付託された。そのため斉藤会長以下全役員の総辞職となった。その後、各村で代議員の改選を行い、26日に新代議員会が開催され、会長に沢柳紀作（教員）、副会長に伊藤高一郎（伊賀良）が選出され、下伊那郡青の自主化が達成された。ただこのときの代議員の半数以上は26歳以上であったが、これは21年度に限り年齢オーバーを認める暫定措置がとられたからである。そして郡青自主化2年目の22年には、年齢制限25歳が完全に実施され、会長に平沢桂二（神稲）、副会長に須山賢逸（鼎）が選出されている（長野県下伊那郡青年団史編纂委員会編 1960：41-44）。

### (4) 青年の文化活動

さまざまなデモクラシーの思想が青年たちをとらえ、新聞や総合雑誌、哲学書や文芸誌を講読するものも多くなり、また、短歌を詠んで『潮音』『アララギ』などの雑誌に投稿したり、同人雑誌を発行したりして、文化活動が活発に行われるようになった。とくに下伊那地域では青年たちの間に短歌が盛んになったのは、1919年4月に北原白秋とともに信州出身の歌人で『潮音』を主宰する太田水

穂が飯田に講演に来たのがきっかけであった。風越館で開かれた短歌会には約60名が参集した。

今村（山田）邦夫は、1919年春、伊那短歌会で知り合った青年たちを誘って歌と詩の回覧雑誌『物の生命』を出したが、その頃を前後して竜丘小学校の『ポプラ』、関谷桑之助の『東雲』、熊谷寛の『失名』、原清の『つどい』などの回覧雑誌が続々と刊行された。今村は、20年11月、岡村二一（笛人）、桑原郡治（群二）、羽生三七らと活字印刷の雑誌にしたいとはかったところ賛同が得られ、翌21年1月には短歌雑誌『夕樺』創刊号が発刊された。『夕樺』は「夕陽を浴びた白樺の風景」を象徴する造語であった。その題名からみて『白樺』を意識していたと考えられるが、今村、羽生、岡村らは『潮音』の社友であり、太田水穂の『潮音』の影響が強かった。夕樺社の主催で21年5月に太田水穂を招いて飯田風越館で開かれた短歌会・講演会には55名が参集したが、窪田空穂の『国民文学』の横田憲治やアララギ派の2、3人を除くと大半が『潮音』社友であり、太田水穂も感激したといわれる（山田 1974：6-8）。

岡村二一は、『夕樺』創刊号（1921年1月）の巻頭言「雪解くる夜に」の中で、「寂しい寂しい人生の旅にあつて、私達にわずかに生命の微笑をもたらし呉れるものは、まことにこの歌だけである」と述べ、歌を詠むことが人生の目的であるとし、そしてより高いより遠い最後の一首を詠むために、「苦しくとも悩ましくとも、お互いに心の手を取り合つて」「歌の巡礼」を続けていく決意をあらわした。また、中田美穂は、「寂寥に居て」（『夕樺』第1巻第2号、1921年2月）の中で、自然が悠久であることと生命のはかなさを対比して、「生命の寂しさ」といい、その「生命の寂しさ」を歌に表現することに人生の意義をみつけようとした。岡村や中田にとっては、生活＝芸術ないし歌ととらえており、歌を詠むことが生活を創造することと考えていたことが知られるが、これに対して羽生三七は、生命の充実はより人間的な生活をするためにあるとし、生活の孤立をはかることには批判的であった（大串 1980b：102-104）。羽生は、「生活の意義」（『夕樺』第1巻第4号、1921年4月）の中で、「各自が各自の生活を、より人間的な生活に近づけやうとする為に、生活の充実をはかるべくつとめてゐる。（中略）みたされたる生命を持つた人が、生の幸福を感じてゐる人が、おのれ自身のみ生の幸福を抱いて、社会から孤立した生活を為てゐたとする。その場合それが真正な生活であるだらうか？ 苦しい人生を体験し、而して今はみたされたる生命を持つた人々が余りに社会から孤立し、其処におのれ一人の生活を建設してゐることが私達にとつて余りに寂しい。みたされた生命を持つた人々が、何等かの方法に依つて、その思想を社会に表現することは、決して其人の思想を減すことでもない。其表現が時には芸術となつて現はれ、時には大きい団体の上に事業となつては現はれる。其場合其人が生活の孤立をはかつてゐることは決して、真正なる生活とは思はれない」と述べている。大串隆吉が指摘するように、自己表現が個の内面に向かうだけでなく、社会との結びつきを求めようとするところに羽生の特徴があり、のちに『夕樺』から離れ、自由青年連盟を結成していく指向につながっていた（大串 1980b：104）。

この当時、中田、岡村、今村、羽生らは盛んに『潮音』に投稿していた。その中で最も高く評価されていたのが中田であったが、自己の生活の実態をとりあげた羽生の歌は、『潮音』の受け入れるものではなかった。羽生が投稿した短歌に、次のようなものがあつた（羽生 1920：33）。

「貧しかる家を思へば現身に来湧く悩みも堪へねばならず  
父と二人向ひてみたり売れゆきの少なきことを言ふを恐れて  
火をかこみ言葉少なに語りけり安からぬわが家のくらしを  
水車場の夕闇ぬちに玄米を白に入れ居つゝあきらめにけり」

評者の青山榛三郎は、この羽生の歌を「一首一首涙をそそる歌であつた。その悲しき境遇にちつと心棒して専心自分の歌に励んで貰いたい」と批評している。青山は、作歌について「自分の本当の心に立ち帰つて山静かに住み得たそれは功德であらねばならぬ。この心を忘れてはいけない。」「自然

の中に自分を見、自分の中に自然を見出す。これが作詩の原則だ」と述べている（青山 1921：115、111、113）。生活の実態から表現していこうとしている羽生に対して、生活の課題を問題とすることはなく、自然との交流を内面にとらえかえして抒情的に表現すべきだとする青山＝『潮音』とは、作風はもとより、生活と向きあう姿勢にもすれ違いが見られた。

ロシア文学などを読んでいて芸術至上主義の『夕樺』に不満を抱くようになっていた羽生三七は、創刊の年の5月には原稿を綴じただけの回覧雑誌『地を歩む者』を発刊して『夕樺』から離れていった<sup>(5)</sup>。羽生に続いて22年3月には代田茂が脱会し、8月に桑原郡治が続き、9月には今村邦夫も『夕樺』から去っていった。全盛期には300名を超す同人を擁した『夕樺』も1923年には経済的困難に陥り、第3巻第2号をもって廃刊に追い込まれた。芸術至上主義を貫き青年たちの求める新しい道を切り拓くことができず、青年たちの作歌活動から青年運動への傾斜を止められなかったことが廃刊の大きな要因であった（清水 2019：33-34）。また、『夕樺』を発行したことが太田水穂の逆鱗にふれ、編集発行人の岡村二一を『潮音』から除名するという噂が流れたことから、『潮音』を脱会する者もいて、青年運動の発展とともに潮音社友も激減していった（山田 1974：7）。

#### （5）社会主義青年運動

羽生三七・代田茂・関口光男らは、『夕樺』を離れたあと、1922年3月に早稲田大学の早大文化会主催の社会問題講習会に参加したのをきっかけに、山川均・田所輝明・荒井邦之介・西雅雄らと知り合うとともに、社会主義の学習を本格的に始めた。そして、羽生・代田は、社会問題講習会に参加した関口光男・矢沢基司・牧野英男や、『信濃時事』記者の山田亮一（阿水）、上郷村の素封家の長男である横田憲治<sup>(6)</sup>・北原亀二らに働きかけ、田所・荒井・西を招き、22年5月6日、飯田町の風越館に集まり、社会主義理論の手ほどきを受け、「下伊那文化会」を組織した。それは、羽生によれば、社会主義を信奉する「非合法の組織」であった（羽生 1977：164）。しかし、10数名の小集団では、社会主義運動を大きくしていくことはできないとして、青年を中心とする合法的な大衆団体を組織することになり、「下伊那自由青年連盟」の結成が決められた。

8月20日、『信濃時事新聞』には、次のような自由青年連盟の「宣言」が掲載され、入会が呼びかけられた。

「全世界の過渡的混乱の反映をうけた吾国の思想は、総てに病的兆候を呈してゐる、此の病状を最も明白に現はしてゐるものは現青年の頹廢的官能的思想である、或は哲学的逃避となり或は宗教的退嬰となつて、全社会に瀰漫してゐる、我々は既成青年会に此の傾向を觀取する事が出来る、此の唯心的消極的傾向に反抗して飽迄も實際的に現實的に歴史の必然を信じて積極的行動に出でんとするものである

後者の立場に立脚して、新文化の建設に努力すべく猛然として蹶起した、我々青年有志は茲に自由青年連盟を組織せんとす、然して我々の標榜する所は政治上、經濟上、社会上の諸問題に対し、徹底せる批判と行動とに出でんとす年齢を問はず熱烈なる新社会の建設者は来れ」

発起人には、池田愛泥、桑原郡治、代田茂、羽生三七、今村邦夫、林武雄、関谷桑之助、北原亀二、横田憲治、山田阿水の10名が名をつらねた。発起人のメンバーは、この地域の青年たちからみれば、信頼できる顔ぶれであった。9月15日の入会申込締め切りまでに100名前後の申込があった。

9月24日には、飯田町姫城ホテルで自由青年連盟の発会式が行われ、入会申込者60～70人のほか傍聴者が多数参加した。ここで採択された綱領は、羽生の起草によるもので、3章からなっていたが、第1章で「本連盟は新興階級の歴史的使命の遂行を期す」との目的を掲げ、第2章では、当面の問題として、既成の官製青年会の改革と青年会員の意識変革に取り組むことを明らかにし、第3章では、当面の問題を実行するために「常に一致団結し協力事に当る」ことを明らかにしている（佐々木 19

78：50-55；石川 1982：69-70)。

自由青年連盟が関わった最初の社会問題は、上郷村の電灯問題であった。村当局と村民は1916年から村営の電灯会社の認可申請を郡役所に出していたが、伊那谷の鉄道と電力を一手に握ろうとしていた伊那電気鉄道の思惑に対立することから、郡役所も認可しなかった。22年になって、会社が村内の一部地区で配電の工事を始めたのがきっかけとなり、村営電気の認可を求める動きが活発となり、6月には2000人の村民が郡役所に押しかけて認可を要求、警官隊が出動する騒ぎとなった<sup>(7)</sup>。下伊那文化会は、郡青に働きかけ、郡青主催、自由青年連盟後援の上郷村電問題演説会が22年10月に若松座で開かれた。

1922年の暮れ近く、下伊那文化会は新たに平沢桂二（郡青会長、神稲）、水野正勝（鼎）、今井敏造（大鹿）の3人をメンバーに迎えた。自由青年連盟の中核として活動の質量ともに大きくなったが、規約らしい規約もなく、任務分担もはっきりしていなかった。23年1月13日、荒井邦之介を迎えて、飯田町三宜亭に18人が集まり、文化会の強化について話し合い、その結果、文化会をLYL（Liberal Youngmen's League）に改組し、「社会革命の遂行を期す」との目的や「会員は絶対秘密を恪守する」との規律、「執行委員三名を置き、任期は一年とする」「会計係一名を置き、調査、研究、出版、宣伝の各部を設ける」などの組織・任務分担を決めた規約を口頭で確認した。執行委員には羽生三七・今村邦夫・山田亮一が選ばれた（石川 1982：92-94；羽生 1977：166；佐々木 1978：60-63）。そして、翌日の自由青年連盟第3回総会のあと、羽生と荒井は、運動を全国に広げるため新潟、秋田、青森、岩手等の青年グループを訪問する旅に出た。最初に県内の上田に行き、信濃黎明会の宣伝部長であり、信濃自由大学の事務責任者でもあった猪坂直一を訪問したが、物別れに終わっている<sup>(8)</sup>。

日本労働総同盟を中心とした「過激社会運動取締法案」に反対する全国統一行動が23年2月11日に行われたが、羽生らは郡青、南信壮年団に働きかけ、普通選挙即行要求も組み合わせて行われることになり、約2000人が飯田の町をデモ行進し、演説会場の姫城ホテルには約4000人の聴衆が集まったこの伊那谷での最初の大規模な示威運動が成功した要因には、羽生らの自由青年連盟の幹部が、三悪法反対だけでなく、普選運動に熱心な憲政会系の南信壮年団や郡青の協力を得るという柔軟な姿勢をとったことが大きかった（石川 1982：99-104；佐々木 1978：66-70）。

こうして下伊那地域では、自由青年連盟を中心とする社会主義青年運動が、青年たちの間に一定の影響をもつようになっていったのである。

## 2. 信南自由大学の成立

### (1) 横田憲治・平沢桂二のLYL・自由青年連盟脱退

下伊那地域では、青年会の自主化が進められた頃から、下伊那郡青年会や自由青年連盟などに関わる青年たちは中央の学者、思想家、作家、社会主義運動の活動家などを招き、自由主義や民本主義、さらには社会主義の思想を摂取することに熱心であった。清水迪夫によれば、1919年から27年にかけて下伊那の青年たちが招いた講師は72名にのぼる。信南自由大学が設立される前の19年から23年までの時期に限っても、三宅雪嶺、大山郁夫、田川大吉郎、長谷川如是閑、田所輝明、西雅雄、荒井邦之介、平林初之輔、鈴木文治、和辻哲郎、猪俣津南雄、鈴木茂三郎らが来伊している（清水 2012b、2013a、2013b）。

1922年は、下伊那郡青年会が自主化を達成し、会長平沢桂二、副会長須山賢逸が選挙によって最初に選ばれた年であり、また、5月には下伊那文化会が結成され、9月には、これを中核として自由

青年連盟が結成され、社会主義青年運動が始まった年でもあった。その年8月14日から16日まで3日間、土田杏村は郡青の巡回講演会に招かれ、飯田をはじめ近傍の諸村で講演をしている(9)。このとき土田は、郡青会長・副会長の平沢桂二、須山賢逸や、平沢の妹千世の夫である横田憲治と知り合い、信濃自由大学の設立の経緯や理念を話したと思われ、その結びつきの中から信南自由大学が設立されることになる(上木 1969: 91-93)。

1923年2月の「普選即行、過激社会運動取締法案反対」の大デモは、この地域の有力者、保守派の危機感を一気に募らせる出来事となったと思われ、羽生三七が「水上広吉」のペンネームで『信濃時事』に寄稿した「反動的勢力押寄す 青年は奮起せよ」(石川 1982: 113-114所引)には、「自由青年連盟、南信壮年団、郡青年会等の活動が、社会的方面に実行的方面にその進路を求めつゝある時、否、その勢力を増大しつゝある時、其処に微かな傾向として現はれたのが、竜丘青年会の脱退であり、老人閥の避難であり、下伊那軍人分会の『赤化防止の為に努力しやう』である。(中略)反動勢力は如上の事実となつて下伊那に現れやうとしてゐる。老人閥の軍人閥の保守的青年の反動勢力を、此の危険思想を、新しき歴史的使命を覚り、創造の焰に燃ゆる青年の力をもつて粉碎せよ！ 撃破せよ！」と書かれている。

ここに書かれている「老人閥」の圧迫は、かなり深刻な組織的動揺を羽生たちに与え、それは翌年3月のLYLの検挙につながっていくことになる。

「老人閥」の中心の一人が上郷村長の北原阿智之助であった。阿智之助は上郷村電問題以来、左翼青年たちの動きに注目しており、上郷村の北原亀二、横田憲治、神稲村の平沢桂二ら素封家の子弟の行動の調査を開始した。まず阿智之助の遠縁にも当たる北原亀二の調査からはじめ、亀二が自由青年連盟に加盟していることがわかり、亀二は「改心」を誓い、また、飯田署の多田警部補の執拗な尋問を受け、自由青年連盟の背後にあるLYLの存在と主要メンバーの名前を自白した。阿智之助がその全容を知ったのが23年2月18日頃だったという。このあと阿智之助は、神稲小学校長の堀尾陸郎と手分けして、LYLメンバーの中の飯田中学校卒業生で素封家の息子たちの説得に当たることにした。説得は、地域の有力者を使って、先ず親に対して家計や財産に傷がつくなどのかたちで親を説得し、親から子を口説かせた。堀尾は、2月25日頃、平沢桂二に自由青年連盟とLYLを辞めるように勧告したところ、堀尾によれば、平沢は「自分ハ罷免メテモ宜イカ今深入リシテ居ルカラ罷メルニ就テハ友達カナケレハ困ル」というので、平沢の妹の夫である横田の所に平沢と一緒に行って横田の父に話し、3人で横田を説得した(「証人訊問調書 証人堀尾陸郎」1924年6月16日、『治安警察法違反事件刑事記録』第4冊)。その結果、横田は2月26日付で羽生に自由青年連盟とLYLの両方の脱会届を送った(10)。平沢と北原理一は届けは出さなかったが、脱会を誓い、活動から手を引いた(11)。このほか、関谷桑之助と棚田正志は同じ頃上京して運動から離れた。また、山田亮一(阿水)も信濃時事新聞社の株主や主筆松江二水からの圧力でLYLの会合にほとんど顔を出さなくなった。

こうして大デモ成功直後の2月中旬から3月にかけて、LYLのメンバー19人中7人が離脱することになった。羽生たちは会合を重ね対応策を協議したが、結局、北原亀二は除名、横田の脱会届は受理、平沢と北原理一は自然退会というかたちで落ち着いた(佐々木 1978: 74-77; 石川 1982: 114-115)。

## (2) 信南自由大学の設立へ

LYL・自由青年連盟を脱退した横田憲治と平沢桂二は、事態が落ち着いたのち、下伊那郡青年会長の須山賢逸と3人で自由大学の設立について話し合い、準備を進めていった。

横田憲治が自由大学の設立を計画したのは、LYLと自由青年連盟を脱退したのちも何らかのかたちで地域の運動に関わることを考えたからで、伊那谷という都会から離れた地域で教育の機会に恵まれない青年たちが、自分たちで費用を負担しあい、働きながら学問を学ぶ民衆的な学校をつくりたいと

いう思いがあったことから前年、土田杏村から聞いた上田の自由大学を伊那でもつくることを計画したのではないかと考えられる。横田は、山本宣治に宛てた手紙の中で、自由大学を計画したことを次のように書いている（山本宣治宛横田憲治の手紙、1923年11月28日、佐々木・小田切編 1979：192）。

「私達の様に遠く都会を離れ田舎に生活してゐる者にとっては、教育の機会をもつことは容易ではありません。単に教育機関から遠ざかつてゐるといふのではなく、現在の教育が、それを受けるのに多大の計費を必要とするので、労働しつつ教育の希望を達することは出来がたいことです。教育が非民主的であることは、或る階級の人々にとっては好都合でせうが、これは一般民衆から見れば余りに不合理です。

とにかく私達は、教育の希望を達するために、従来の様な温情的な教育施設に満足することなく飽くまで勉強し度い要求をもつた者のみ集り、一切の経費は自ら負担しつつ、自ら経営して行く、最も民衆的な学校がほしいと思ひ、此度自由大学を計画しました。」

山田（今村）邦夫によれば、横田と平沢は、LYLと自由青年連盟を脱退したとはいえ良心があつて、彼らに協力できる仕事をしないとイケないと考え、須山と3人で話し合い、横田からの「土田杏村が作った上田の自由大学の運動を伊那で起こしたらどうか」との提案で相談がまとまったもので、自由大学を始める直前には今村のところにも話に来たという（座談会 1979：18-19）。

横田、平沢、須山の3人は、自由大学を設立する直前の11月初旬に、上田の猪坂直一や山越脩蔵を訪れ、自由大学の趣旨と経験を聞いている。

猪坂によると、須山らから手紙があり、自由大学について話を聞きたいと言ってきた。いつでもおでかけくださいと返事をすると、横田、平沢、須山が訪れてきた。猪坂は、自由大学の趣旨や経験を語り、別所温泉に住んでいたタカクラ・テルの所に案内し、タカクラからも話してもらった。当時タカクラは、自由大学を土田杏村を主体として考えていたが、3人に対しては、その土地その土地の人々の気持ちに応じた自由大学の創設を説き、積極的にすすめ、講師としては新明正道を紹介したという（佐々木 1978：134）<sup>(12)</sup>。

横田に宛てた山越の手紙には、次のように書かれている（横田憲治宛山越脩蔵の手紙、1923年11月9日、山野編 1973：1）。

「先日は、私こそ失礼致しました。御見得になった当時少々仕事の過労の為め休養を必要と致しましたので、悠っくり出来なかった為め御心に添ふ程御話し出来なかったのを遺憾に存じます。然し高倉氏や他の諸兄から充分御きゝとり下さったのをせめてもの満足と致します。

今後は御たがひに意見の交換を充分にして、自重しながら自他ともに進みませう。（中略）

此の自由大学の事業は、永劫を生活しやうの願からでありますから、随分と御骨折りも多いことゝ存じますが、気ながに経営することが必要と存じます。そしてこれには成功と否とは問題外でありますから。

まだ三年しかやって見ないで先輩振ったことを申し上げて笑止です。こちらもこれから、多くの問題を生むことゝ存じます。

互ひに力になり合ひませう。」

1923年11月、横田憲治・平沢桂二・須山賢逸の3人は、『信南自由大学趣旨書』を郡下の青年たちに配布し、また『南信新聞』（1923年11月23日）にも土田杏村の「信南自由大学趣旨書」が掲載され、自由大学への参加をよびかけた。

『信南自由大学趣旨書』は、土田杏村執筆の「設立の趣旨」のほかに「組織及内容」「講師及担任講座」「開講及申込の時期」を収めた全6ページのパンフレットである。

「組織及内容」では、信濃自由大学と同様に、講座の種類は哲学、文学概論、社会学、経済学など12科目をあげ、「講座はこれを総合的とし、聴講生は之を完全に聴講することによつて、統一的に文

化科学的研究をなし得るやうに致します。然し場合によつては講座を選んで、聴講することも出来ます」とし、開講の時期は「当地方の産業事情を顧慮」して毎年10月から翌年4月までを1学期とし、1講座の開講期間を5日ないし7日間、1日の講義時間を夜3時間位とする、聴講生については、「聴講生の資格に一切の制限を置きません、男女を問はず申し込みを以て聴講生の資格を得ます」とし、経費は「一切聴講料を以て支弁いたします」としている。「講師及担任講座」では、講師として快諾を得たもしくは交渉中の人として、中田邦造（哲学概論）、タカクラ・テル（文学論）、新明正道（社会学）、波多野鼎（社会思想）、山口正太郎（経済原論）、山本宣治（生物学一般）の6人の名前があげられている。「開講及申込の時期」では、最初の開講は大正13年1月初旬を予定しているとし、聴講の申込は12月10日までと記載している。

土田杏村の「設立の趣旨」は、次のようなものであった。

「現在の教育制度によれば、学習の能力さへあるものならば、小学から中学、高等学校、大学と、何処までも高い教育を受ける事が出来る様になつて居る。此の学校系統は、早く既に十七世紀に於て、コメニウスの創見したものであつたが、彼の創建の趣旨とするところは、個人の稟賦を何処までも完全に伸張し、我々の持つたたゞ一つの要求も其儘に萎縮させられてはならないといふ事であつた、然るに其後各国の制定した学校系統は、此の肝要なる趣旨を忘れ、其の創見した学校系統の型式だけを無批判的に踏襲する傾向を示した。いかにも此の制度の形式は、すべての民衆に教育機会を与へ、最高学府としての大学は其の門戸を何人にも開放して居るではあろう、併し其の教育を受ける為めには、人は莫大の経済的資力を必要とする、其の莫大なる教育費をもたないものは永遠に高い教育を受ける機会を持たず、結局高い教育は有資産者のみの持つ特権となるのである。

今や各国の教育は、コメニウスの学校に帰らねばならぬ必要を痛感しはじめた、其の結果として、理論的には社会的教育の思潮が盛んとなつて来るし、事実的には成人教育の運動が前世紀に比類の無い発達を示した。そしてコメニウスの学校の本義から言へば、民衆が労働しつつ生涯学ぶ民衆大学、即ち我々の自由大学こそは教育の本流だと見られなければならぬことが、強く主張せられるに至つた。

教育は僅かに二十年や三十年の年限内に済むものでは無い。我々の生産的労働が生涯に亘つて為さねばならぬと同じ理を以て、教育は我々の生涯に亘つて為される大事業である。教育により自己が無限に生長しつつある事を除いて、生活の意義は無い、随つて教育の期間が、人生の中の或る特定の時代のみ限られ、其の教育期間には、人はすべて農圃と工場とより離籍することは不自然であると思ふ。我々は労働と教育との結合を第一に重要なものと考へる。マルクスは、幼年者の労働には必ずしも反対せず、其れにより労働と教育とが結び付けられ得るならば、却て悦ぶ可きことであるとさへした、我々は労働しつつ学ぶ自由大学こそ、学校としての本義を発揮しつつあるものと考へる。自由大学は補習教育や大学拡張教育では無い。

我々の自由大学は、最も自由なる態度を以て思想の全体を研究して行きたい。講師の主張には種々の特色があらう。併し教育は宣伝では無いから、我々の大学教育は、団体として特に資本主義的でも無ければ社会主義的でも無い。其等の批判を、自分自身で決定し得る精神能力と教養とを得ることが、我々の教育の眼目である。我々は飽くまでも其の自由を保留し得る為めに、すべての外的関係とは没交渉に進んで行きたい。我々の自由大学こそは、我々自身が、我々自身の力を以て、我々自身の中に建設した、最も自由なる最も堅固なる一の教育機関である。」

土田は、近代の学校の源流としてコメニウスを取りあげ、コメニウスの創見した学校系統の形式だけを無批判的に踏襲している現状を批判し、教育「制度の形式は、すべての民衆に教育の機会を与へ、最高学府としての大学は其の門戸を何人にも開放して居るではあろう、併し其の教育を受ける為めには、人は莫大の経済的資力を必要とする。其の莫大なる教育費をもたないものは永遠に高い教育を受

ける機会を持たず、結局高い教育は有資産者のみの持つ特権となるのである」と述べ、教育機会の不平等な現状を批判した。そして土田は、「コメニウスの学校の本義から言へば、民衆が労働しつつ生涯学ぶ民衆大学、即ち我々の自由大学こそは教育の本流だと見られなければならぬ」と述べ、自由大学をコメニウスの学校の流れをくむものとして位置づけている(13)。

続いて土田は、自由大学の教育の目的は「自分自身で決定し得る精神能力と教養」と獲得させることにあるとし、「教育」活動と「宣伝」活動とを峻別し、「我々の自由大学は、最も自由なる態度を以て思想の全体を研究して行きたい。講師の主張には種々の特色があらう。併し教育は宣伝では無いから、我々の大学教育は、団体として特に資本主義的でも無ければ社会主義的でも無い。其等の批判を、自分自身で決定し得る精神能力と教養とを得ることが、我々の教育の眼目である」と説いたのである。

ただ注意しなければならないのは、土田杏村が執筆した原稿と『信南自由大学趣旨書』所収の「設立の趣旨」とでは、文言にいくつか相違がみられることである。土田は、これについて、「大変多くの誤植がある」と指摘しているが(横田憲治宛土田杏村の手紙、1924年7月5日、山野編 1973:16-17)、これは誤植というより発起人の青年たちによる書き換えとみるべきである。「其の莫大なる教育費を持たないものは永遠に高い教育を受ける機会を持たず、結局高い教育は有資産者のみの持つ特権となるのである」の部分は、土田の原稿では「其の莫大なる教育費を持たないものは永遠に高い教育を受ける機会を持たない」となっており、「結局高い教育は有資産者のみの持つ特権となるのである」の部分は発起人の青年たち、おそらく須山賢逸によって加筆され、教育機会の不平等がより強調されていることが知られる。また、土田の原稿の「併し教育は宣伝では無いから、我々の大学の教育は特に資本主義的でもなければまた社会主義的でもない」は、「併し教育は宣伝では無いから、我々の大学の教育は団体として特に資本主義的でも無ければまた社会主義的でも無い」と、「団体として」の文言が加筆されている(山野編 1973:125-127)。

下伊那地域では、青年会の自主化が進展するにともない、補習学校の「民衆教育機関化」とか青年会は唯一のプロレタリアトの教育機関なり」と、教育機会の不平等の現状を批判し、青年たちの学習の場である補習学校や青年会の改革、学習機会の保障を要求する声は強いものがあつた。たとえば平沢桂二は、「プロレタリアの唯一の受くべき小学校教育すらも、全然考へられて居ない、国庫補助もその費用の一大整理の上研究して補助するなんて云はれて居るではないか、(中略)まして補習教育に見るべきものなく、プロレタリアトの専門教育、大学程度の教育を受けんとするの如きは正に夢の沙汰である、文化的娯楽機関の如きは更にはない」と、農村青年のおかれた教育の現実を認識した上で、「青年会は唯一のプロレタリアトの教育機関なり」と主張した(平沢 1921:23)。

信南自由大学は、このような青年たちの要求に応えるべく設立されたものであつた。自由大学の設立に期待を寄せた青年の1人が河野村の胡桃澤盛であつた。胡桃澤は、23年11月26日の日記に次のように書いている(「胡桃澤盛日記」刊行会編 2011:125)。

「飯田へ此の度信南自由大学が設立される事に決定した。講座別に出来て居て、法、経、文、社会、生物、哲学、宗教の講座を設けて総合的に教授す。期間は十月より翌年四月迄の七月で、毎晩三時間、各専門の大家が講義する。本学の採るべき点は労働に従事しつつ側ら学業に励むと云う最も適切なる教育である。農村の振興、そして此の峡谷で大なる思想団を建設して社会に新機運を産ませたい。」

政友会系の地元紙『南信新聞』(1923年11月16日)は、社説「自由大学に就て」で、本郡青年が自由大学を設立しようとしていることに対して、「其講師科目等に就いて多少我々と見を異にしてゐる」としつつも、「兎も角斯る試みか試みらるる事は進歩的青年の為に其道程の荊棘を開くものであつて其効果の多少に関らず本郡識者の何人も賛成する処たるは疑を容れない、そして其収穫の如何は必ず

しも其組織のみに止まらず其研究の熱心如何によるのであるから之をして有意義たらしむると否とは之に対する青年諸氏の努力如何によるのだ我々は本郡青年諸氏が斯る貴重なる賜の降来に際して協力同心之を拝載し充分の敬意と真面さを以て其光に浴せん事を望むのである」と述べて、期待を寄せた。

一方、社会主義的青年の中には自由大学の設立趣旨書の内容に強い批判を投げかける青年もいた。北原亀二は、『南信新聞』（1923年11月23日）に趣旨書が掲載されると、『信濃時事新聞』紙上（1923年11月25日）に「信南自由大学の趣意書を見て」を發表し、「社会主義者にした処で無産階級と共に闘争の陣列に加はりつゝあつた中産階級を、その陣列から退かしめて、そこに自ら別な文化主義的使命を感じしめるに至るであらうという危険（この危険を立証する例は世界至る処にある）のためにこの教育の影響を及ぼす範囲によつては黙って見ているわけにはいかないであらう」と、自由大学が社会主義青年運動の側と共同戦線にいる中産階級の青年たちを引き離し、「文化主義的使命」の実践への方向に導く危険性を指摘し、「僕らが現在の文化、そして又基礎学として種々の主張、科学の全体に通ずる事の必要を否定しやうとするのではない事はもちろんである」と、自由大学の設立には反対ではないとしつつも、「だが然し、如何に教育の機関のみを自由な創意をもつて設立しようとも、それを活用するのは社会に生活している人々だ、それらの条件がいかに完備しようとも社会の状態が一変しない限り、真に自由な教育は有り得ない」と述べ、「僕らは社会に働きかける学問知識以外の学問知識を学問知識として認めることはできない」と主張したのである。

ただ自由青年連盟の機関紙『第一線』第5号（1923年11月12日、発禁）は、「南信自由大学の設立」の記事の中で、「教育の民衆化—教育機関の奪還は最近痛烈に要求されて居る、青年団の独立に勝ち得た吾等は、その第二の戦として教育機関を民衆のものとする運動を全国的に起さなければならない。そうした要求から今度、須山賢逸、横田憲治、平沢桂二君等の発企らよつて、南信自由大学が生れることになつた。南信自由大学はプロレットカルトを骨子として、民衆自身の教育機関として、経営して行く、この大きな仕事を、我々青年は協力して擁護しなければならぬ」と述べて、信南自由大学の設立を好意的に紹介した。そして、須山賢逸が執筆したと思われる「設立の趣旨」は、次のようなものであった。

「設立の趣旨 一部特権階級の手に奪れ、彼等の階級擁護のために利用せられたる教育を、教育本来の立場に奪還し民衆のため自主自律の教育機関を設立せんとするのが本自由大学を発意したる理由であります

現在の教育制度は長い年月と特定の場所を要し、労働を分離したるため、在学中の生活を保証され、その学費を支給さるゝものでなくば教育は受けられません尚その内容は或る特定の型に鑄んとする注入的機械的画一的であり、人間の創意と自由を認めたる人格自律の教育では決つてないのであります

故に現在の教育機関は有産階級のものゝみの受けらるべき、又一部特権階級支持のための教育であり自由な真理討究の教育機関でないことを断言し得るのであります

吾々はこの弊風を打破し、一般吾々が職業に従事しつゝ、自由に大学教育を受くる機関を得、且つ何物にも支配されず、吾々自身独立の学問を習得せんとして次の如き組織及び内容によつて総合長期の講座を開かんとするものであります」

須山は、信南自由大学を信濃自由大学の設立趣旨とは異なりプロレットカルトを明確に打ち出す考え方を持っていた。開講講座の講師となる山本宣治に宛てた須山の手紙には、次のように書かれていた（山本宣治宛須山賢逸の手紙、1923年11月24日、佐々木・小田切編 1979：190-191）。

「私達の自由大学は、塩沢君よりもお話しつた事と思ひますが、他の同様な大学とは其のモットーに於て大いに違つてゐる事と信じてゐます。それは、私達のはハッキリした方向を支持してゐると云ふ点です。即ち現代の教育が凡て一部階級の自家擁護の具となりつつあり、それがために学問の

独立すらも無視されつつある事に反対して立つたプロレットカルト的内容を持つ点です。信州上田にも、丹波あたりにも、形態の同じものはありますが、全然この点に於て違うふ様に思われます。土田さんの趣意書には、単に『労働しつつ学ぶ事が教育の本義である』と云ふ事から自由大学を主張されて、既成の教育制度から独立すべき事を説かれてゐますが、これは自由大学の同志をあらゆる団体、あらゆる傾向のものからも集めたいと云ふ点を心配されて書かれたのだと信じて居ます。土田さん自身は、最近の通信によつても、吾々の考へ通りプロレットカルトで行ければ尚望ましい事だと云つてゐますから、大丈夫と信じてゐます。」

信南自由大学の開講は当初は1923年12月を予定し、その講師には山本宣治に依頼することになり、伊那の喬木村出身で大阪時事新報の記者をしていた塩沢元二から山宣宛に依頼状が送られている。塩沢は産児制限運動の紹介などを通じて山宣とは親しい間柄になっていたという（佐々木 1978：138）。塩沢の手紙は、次のようなものであった（山本宣治宛塩沢元二の手紙、1923年11月3日、佐々木・小田切編 1979：186）。

「要件は土田杏村さんのお力添を得て私の故里の信州飯田に自由大学が生れたのです。それで先生になつて頂きたいと思ふのです。田舎の民衆大学ですから御承知の如く何かと不自由勝なんですが、そこを御理解下さつて是非共承諾して頂きたいのです。（中略）

そして出来るなら先生には、十二月最初の講義に行つて頂きたいのです。十二月に五日間の時が許される事を祈つてゐる訳です。」

それから半月後、今度は土田杏村から依頼状が送られている（山本宣治宛土田杏村の手紙、1923年11月21日、佐々木・小田切編 1979：189-190）。

『時事』の塩沢君が御依頼したことと思ひますが、飯田の信南自由大学の講義を依頼致したいと存じます。あそこは実に愉快的な土地ですよ。社会主義的傾向を持つた農村の青年の団体さへあります。それと共に小学校の教師は阿倍能成君を三、四年引きつづいて頼んで貰つたりします。青年と教師とが唯物唯心両端に向ひ一致して居ないのです。生物学の基礎概念の講義をしてやつて下さい。

日取りのことで急に此の手紙をかいたのですが、先方では出来るだけ基礎を固めたいから、講義もいそいそではやらない、それで一月からやりたいと言つて来て居ますから（塩沢君帰社の後に）、十二月の予定をして居ないことと思ふのです。もう一度先方へ問合せますから、大抵は一月からのお積もりにして居て下さい。十二月早々ではとても会員を集める時日の余裕がないでせう。」

信南自由大学の当初の計画であつた12月の開講は、準備の都合で1月に延期された。

須山賢逸は、塩沢と土田の依頼状に対して山宣が承諾したことを知り、先の11月24日付の手紙を出しているが、準備が遅れている状況を伝えたくて、1月の都合を問い合わせている（山本宣治宛須山賢逸の手紙、1923年11月24日、佐々木・小田切編 1979：191）。

「貴下には、本年の十二月に御来郡下さる様に、横田君から承はりました。それで昨晚同志が集まつて相談したのですが、大学の方の仕事がやつと会員を募集し出した、一寸と十二月開講は至難かと存じます。

来月の十日頃創立の会員大会を開きたい目的ですが、色々の問題で大へんおくれてゐます。それで土田さんへもその由を申し上げました故、土田氏よりもお話があることと存じますが、一月の御都合を願つたいと思ひますが如何ですか。

勝手のみ申し上げてすみませんが、その様にお取りはこびを願ひたいのです。」

11月28日には横田憲治からも開講期日について山本宣治に手紙を出し、1月8日頃をお願いしたいが都合はどうかを問い合わせている。手紙では、「土田、塩沢両氏から先生に十二月に来て頂く可く御依頼した由通知がありましたが、私達の方では明年一月より開講の予定で準備してみた為め、あらためて明年一月先生に来て下さる可く両氏から御願して下さる様にお話しておきましたから、先生

も既に御承知下さったことと思ひます。私達は、明年一月初旬に開講し度いと思ひますから、御都合が出来ましたならば、一月八日頃御願し度いものです。とにかく一月中に先生の最も御便利な時日が御ありでしたら御通知下さい」とある（山本宣治宛横田憲治の手紙、1923年11月28日、佐々木・小田切編 1979：192）。

しかし、山本宣治は、信南自由大学の窓口は須山賢逸と考えていたから、横田の手紙とは行き違いに11月29日、須山宛に「一月にとのお話委細承知、日程定まり次第お知らせ下さい」と送っている（須山賢逸宛て山本宣治の手紙、1923年11月29日、伊藤 2001b：57-58）。

須山は、12月2日に山宣宛に手紙を送っているが、それには、自由大学の会員を募集中であるが、「目下の処、全講座を通じて受講するものは七十名を下る様なことはない信じられます。それに、講座によつて、随意聴講するものも多数あることと思はれますから、相当の盛会を見ることがと存じてゐます」と会員の現状を伝えるものの、開講期日については触れておらず、郡青や自由青年連盟が主催する講演会などの様子を知らせている（山本宣治宛須山賢逸の手紙、1923年12月2日、佐々木・小田切編 1979：193-194）。

山本宣治は、12月8日、須山宛に「デユウニヒドリキメ、ハヤクシラセ」という電報を送っている（須山賢逸宛山本宣治の電報、1923年12月8日、伊藤 2001b：59）。電報記載の内容は「（信南）自由（大学の講義の）日取り決め、早く知らせ」てほしいというものである。

この山宣の電報による催促に対し須山は、翌12月9日、「開講の期日は、山本先生のを一月八日頃に思つてゐます。その頃と御決定が願へれば好都合です」との返事を送り、さらに次のように書き送っている（山本宣治宛須山賢逸の手紙、1923年12月9日、佐々木・小田切編 1979：195-196）。

「聴講生は御陰様に集りがよく、七十名に達するだらうと信じてゐます。

来る十五日に創立の総会と云つた様なものを開き、今後の組織、内容等について協議することになつてゐます故、その時には具体的なことが決まると思ひます。

私達は、初めは少数でも、段々と会員の数が多くなる様な調子にやつて行きたい考です。

参考書をお願いする部数も、十五日以降に於て御通知いたします。

会場は、私達が仲間で作つた天竜倶楽部と云ふ建物で開講したいと思つてゐます。七十人は大丈夫に入れる所です。余り広くはありませんが、最も自由で清心の氣に満ちた我々自身のものだと思ふ点で、我々の自由大学の会場としては最もよいものです。

種々の準備が出来、一日も早く開講の運びとなることを今から待つてゐます。」

12月15日、自由大学打合会が午後2時より天竜倶楽部で開かれ、40名が集まった。平沢桂二、横田憲治より経過報告があり、その後協議が行われた。打合会では、次のことが決定された（『南信新聞』1923年12月18日、12月19日）。

「一、本大学を堅実に維持する為の信南自由大学会を組織する事

一、会員は本大学の講演を連続自由に聴講し得るものとし一個年会費は十円位とす

一、聴講生は希望の講座のみを聴講するものとし一講座三円を申受くる事

一、確定せし開講の時期及講師は左の通りとす

一月八日より五日間人生生物学理学士山本宣治氏

一月十七日より五日間社会学法学士新明正道氏

授業時間は午後五時より八時迄

一、自由大学成立日山本氏講義終了の日とす

一、自由大学会則原案は發起人に於て作製すること」

河野村の胡桃澤盛も打合会に参加し、山本宣治の講座の申込をしている（『胡桃澤盛日記』刊行会編 2011：129-130）。山宣の講座には打合会の時点で92名の申込者となっていた（『南信新聞』1923

年12月18日)。

「創立の総会」と位置づけられていたこの打合会の開催により事実上、信南自由大学は成立した。

12月17日、横田憲治は、『南信新聞』に「信南自由大学設立に就て」を掲載したが、それは、土田杏村の「設立の趣旨」を平易に要約したものと『信南自由大学趣旨書』に記載されている「組織及内容」「講師及担任講座」「開講及申込の時期」とほぼ同内容のものを紹介したものであった(『南信新聞』1923年12月17日)。

須山賢逸は、同じ日、山本宣治に手紙を書き送り、「十五日に発起人会をして、会員と今後の組織、内容について話しました」と、打合会を開いたことを伝えとともに、「御来郡の期日は一月八日から開講出来る御予定を以て御出発下さいませ。八日午後五時半よりと発表しました」と、開講期日が決定したことを通知している(山本宣治宛須山賢逸の手紙、1923年12月17日、佐々木・小田切編 1979:197)。さらに12月31日には、開講の準備が出来たことと会場が飯田小学校裁縫室に変更になったこと、科外講演を検討したい旨の次のような手紙を送っている(山本宣治宛須山賢逸の手紙、1923年12月31日、佐々木・小田切編 1979:197-198)。

「賀正

自由大学の準備はスッカリ出来ました。

常盤館宛の『性教育』・附函・『人生生物学』等着いてゐます。

会場は飯田小学校裁縫室です。

申込者全部が来るか否かは別問題として、今日迄の申込者百二十余名です。予期以上の盛況にて、一同意気込んでゐます。

第一回は大切です、ほんたうに有意義に開講したいと思つてます。

科外講演のことに就いては、私は開きたい意向ですが、同志のものに話して見て、改めてお願いいたします。

御来飯の序に、科学的清心に立脚せる性の問題の批判をして戴いて、この大きな問題に対する正しき理解を一般に与へる事は刻下の急務と思ひますから。」

申込者が予想以上に多かったことから会場を天竜倶楽部から飯田小学校裁縫室に変更している。須山は、「申込者百二十余名」に自由大学に対する周囲の期待を肌で感じとっていたと思われる。こうして信南自由大学は青年たちの期待を集めながら開講を迎える。

### (3) 信南自由大学の開講

信南自由大学の第1期第1回講座は、京都帝国大学講師山本宣治<sup>(14)</sup>の「人生生物学」で、飯田小学校裁縫室を会場に、1924年1月8日から5日間開かれた。

講義内容は、山宣が用意した講義要項「人生生物学 五講」は、次のようになっている。

「 人生生物学 五講

山本宣治

現代文化のたゞに生を続けて居る我々自身の生物学的現状と併せて経済生活を自省して見る為に必要な材料の提供

#### 第一講 現代性教育運動の大勢

性の問題に対する種々なる態度、其の各々のよつて来る動機と其主張の可能性、終に落付く所は普遍的啓蒙、即性的分別至上主義、階級意識と啓蒙。

五講の序論として、講師自身の伝へんと試みる大体の傾向の基調を述べやうとする

#### 第二講 性知識一斑

両性の性的器官の解剖学及び生理学、通覧と大戦後の新知識追加、未婚者の性的衛生、及び既

婚者のそれ、之で次に述ぶべき所の根拠となる具体的知識を一挙に展開し、聴講者の用に供しやうとする。

### 第三講 日本人男学生の性生活の統計的研究

西洋諸国と我国とは、種々の命題の適用に於て、大差あるべきものか、講師自身過去三年間京都の学生に就て集めた資料の概括。

遺精、自慰、最初の性交の起る状況、其他。

### 第四講 生物学的母性観

母性発生の生物学的要件、男女両性の相違と「自主的母性」運動。

### 第五講 生と死

生と死との境の定め方、死の要件、何故に生物が死ぬか、人間が死ぬか、人の死に方、死ぬ時期、死の原因の一般研究、誕生と死との数的比例、世界及び日本の人口問題。」

『南信新聞』（1924年1月10日）は第1日目の講義の様子を次のように伝えている（清水 2007：38）。

「信南自由大学も愈よ八日午後六時より飯田小学校講堂に於て開催された。当夜は開講当初にも拘らず聴講生は六十名以上にて盛会であつた。山本講師は極めて快闊な<sup>ママ</sup>句調を以て現代文化の渦中に生を続けてゐる人間の生物学的現状と併せて経済生活を自省して見る為めに必要な材料提供の一つとして『現代性教育運動の大勢』に就いて性の問題に対する種々なる態度其の各自によつて来る動機と其の主張の可能性、終局落付く所は普遍的啓蒙、即ち性的分担至上主義、階級意識と啓蒙等人生生物学中今回講演せんとする五講の序論として大体の傾向の基調を講演せられた」

講義では、山本宣治『人生生物学小引』（増補第四版、1923年）や「生物学図解」（楯操ノート）などの教材を使用して行われたが、この人生生物学は、わが国における正しい性知識の欠如とそれから派生するさまざまな弊害の問題に対して、欧米の性科学の成果を取り入れて正しい性知識を与えるとともに、わが国における成年、成人の男女の性生活の実態を調査し、新しい性道徳を確立しようとするものであった（佐々木 1974：268-269）<sup>(15)</sup>。

胡桃澤盛は、日記に、1日目の講義の感想を「山本宣<sup>ママ</sup>二氏の性教育。新人の新意見。而かも未開の天地を研究する大家の意見」（1月8日条）と、性科学という未開の分野を研究する新人研究者の新しい意見を聞いたことを記し、2日目は「本日の分は生殖器の構造、生理であつた」（1月9日条）と講義内容を簡単に記している。3日目は講義要項の「三講」の通りで、「今夜ハ日本人男学生ニ於ケル性的生活、遺精、自慰、最初性交、春季蠢動ト四科目ニ亘ル。八時半終ル」と記したあと、「山本氏蔵書ノ『曲線美』ト云ウ独書ヲ見ル。至ル処全裸体ノ美人バカリダ。未ダ自分は凡俗ノ界ヲ脱セヌ為カ挑発サレ易クテ悪イ。此の本ハ京都辺古本屋へ行ケバ七八円デ求メラレル層ダ」（1月10日条）と、ドイツ書の美人裸体像に「挑発」されたことを記している。4日目の講義内容を「本夜の講義は主として避<sup>ママ</sup>口（妊）法であつて、其の他血族結婚の弊はなぜか、処女の是非を血清で診断する方法等を東西学界のあらゆる研究の程度、価値等を上げて批評して行く処は堂々たる大家である」（1月11日条）と記している。最終日の5日目は「四時開講。生－死－に付きて生物学上の歴史を引いて講義をされた。六時講義を終りて会食する」とあり、会食については「山本先生も大きな井をかゝえて大口を開く。運動具屋の中上君がおーいと云いながら箸をさげて集金に出掛けると、山本先生も五十銭投げ込む」（1月12日条）と、その様子を書き記している（「胡桃澤盛日記」刊行会編 2011：139-141）。

会食後、会員総会が開かれ「規約」が制定された<sup>(16)</sup>。

その間、1月10日の午後には、鼎村小学校で開かれた鼎村青年会の新年総会で「性教育ニ就テ」を講演している（長野県特別高等警察課 1931：92）<sup>(17)</sup>。

聴講者は、開講前の予想に反して、73名と少なかった。自由青年連盟の機関紙『第一線』は自由

大学に対して好意的態度を表明していたが、連盟幹部の対応は全体として冷ややかであった。横田憲治らが自由大学を設立することに対して、自由青年連盟の中でも、北原亀二のように「そんな運動をおこすならば、すぐにつぶさなければいけない」という強硬な意見と、羽生三七・今村邦夫のように「これも一つ我々の運動の側面になるから、これは協力しよう」という意見とがあったが（座談会 1979：19）、ただ今村にしても「私は山本宣治氏が来た時だけ、特に呼ばれていって話をききました」、羽生も「私は山本宣治・波多野鼎等のみには出たことがあります、それ以外に出たかどうか覚えておりません」という程度であった（座談会 1979：19、21）。自由青年連盟の結成大会に参加した150名（山田編 1995：77-80）のうち、自由大学聴講者は発起人の横田・平沢を含めて11名にすぎない。

山本宣治は、自由大学での講義を終えて京都へ帰る途中、名古屋から土田杏村へ飯田の様子を書き送っている（土田杏村宛山本宣治の手紙、1924年1月14日、佐々木・小田切編 1979：205-206）。

「飯田は滞りなくすまし浅間温泉にて一夜（中略）」

飯田は聴講者五十七名（自由青年連盟の猛者割に少し、其近因、自由大学はリベツ化助長ののおそれありとの誤解。なほ一つには唯物史観と生物学との関係ある事に馴れず、且又カムフラージュの肩書にくはずぎらひの人もあらう）」

山宣は、自由青年連盟会員の自由大学への対応に強い関心を持っていたことが知られるが、別の論文では、「一年前信南自由大学の初講に私が飯田に赴いた時、当時私が京大理学部講師であつた為、彼ブルジョア大学の下廻り野郎どうせロクな事は云ふまいと、一部極左党の勇士から未だ面見ぬ内に早くも匙を投げられた様に聞及んだ。兎に角『帝大の先生』の肩書の為にかく損する事もあつたが、又一方では自分の判断力に自信をもたぬ人々に性的啓蒙運動を徹底させる背後の権威として、其肩書が可成役に立つた事もある」と書いている（山本 1925：8-9）。

山宣は、自由青年連盟会員の聴講者が少なかった要因として、人生生物学の講義が基底のところでは唯物史観と結びついていて理解していなかったこと、「帝国大学の先生」という肩書きはカムフラージュだったが、その肩書きのために「ブルジョア」と判断されて敬遠されたことをあげている。佐々木敏二が指摘しているように、「マルクス主義に主要な関心をはらう自由青年連盟の闘士たちは、まだ山本の説く生物学の新しさ、性科学や産児制限論の持つ意義について理解していなかった」といえる（佐々木 1978：142）。

自由青年連盟会員には山宣の人生生物学に対する理解が得られなかったとはいえ、自由大学での「人生生物学」の講義は聴講者たちに少なからぬ反響を呼んだ。

千代村の楯操は、「人生生物学」の講義を、次のように回想している（楯 1983：192-193）。

「提灯を越にしてあの轍のある夜道を通して聴講がはじまる場所は飯田小学校でした。

その時の学問的雰囲気は、今尚まざきざと感じとることができる。

一つは人間に於ける科学。

二つはその方法について。

豊富な資料を用い、整然として学問的に解明をうけて人生途上裨益するもの多く、日本資本主義の隆昌発展段階に於て猫の手もかりたい時期にバスコントロールを罪惡視する風潮の中でその学問的な取上は、自由大学の前座的意味を十分に果たしたものと思われた。あの京都の名だたる花やしきの御曹子が身を崩さずはき出す声が今尚<sup>もと</sup>耳朶をはなれない。」

楯は、この「人生生物学」の「講義を通して科学的考へ方の面白さと正しき性知識によって性に対して安定感をえられた」とも回想しているが、千代村の自宅から飯田の会場まで片道4里（16キロ）の道を自転車で行くのは苦労が多かった。「昼間労働して、夕方早目に作業をおわり、腰に提灯を燈し轍の坂道（当時荷物の輸送は馬車で、道路は今日のように舗装されず冬期は大きな轍になる）

を通った学問に対する情熱を偲ぶもいとほしい。父は聴講については同意を惜しまなかったが、その費用は自ら工面しなければならず、今日の経済情勢と異り苦勞したが、この中で学問的意欲はいやがうえに高まってゆく」と回想する（楯 1978：67-68）。

発起人である横田、平沢、須山と中神米次郎の4人も、第2回講座のタカラ・テルの講義の準備と書店「民衆社」の立ち上げのために集まった1月21日の夜、山宣宛に礼状を送っている。横田は「人生生物学の反響は大したものです。蒔かれた種のひそかに芽生えつつあるを信じてよいと重ひます」、須山は「今度是非来飯をお願いして、ゆつくりお話を承はりたいと思つてゐます。その時は公開講演をして、今度、是非先生のお話を聞きたかつたと残念がつてゐる多数の連中に話してやつて戴きたいと存じます」、平沢と中神は連名で「何分不馴れで、不整頓で申し訳けありませんでした。然し蒔かれた種の芽生える日をお待ちを願ひたいと重ひます。今日は二十八日からの高倉さんの講義の準備のためと、書店民衆社の創立のために四人集りました。四人それぞれ寄せ書をいたします無礼を悪しからず。終りに、今や下伊那は、オルガスム曲線論の全盛時代であることを申し添へます」と、それぞれ記している（山本宣治宛信南自由大学一同の手紙、1924年1月22日、佐々木・小田切編 1979：208）。佐々木敏二が指摘するように、「山本の自慰無害論や科学的性知識を図解でして語る態度、産児制限の必要性和農村青年の生活に直接関係ある話しは、青年たちの要望に応えるものであった」といえる（佐々木 1978：143）。

下伊那郡青年会は、24年から常任委員制をとり、通信・記録・会計など事務担当のほか教育・調査・体育の3部門を設けて分担するなど執行機関の強化をはかった。常任委員会の組織は、委員長北原理一、委員には今村邦夫・北原亀二・宮島義治・羽生三七らが選出されていた。24年1月の代議員会では「最も重要な部門の教育活動の面では、基礎的な学習を自由大学にまかせ、着実な運動を進めて行く」方針をとったといわれる（長野県下伊那郡青年団史編纂委員会編 1960：53-54）。郡青と自由大学は、組織的提携がなされたわけではないものの、密接な関係があったことがうかがえる。

土田杏村は、山本宣治の講義が終わったあと、横田憲治に宛てて次のように書き送っている（横田憲治宛土田杏村の手紙、1924年1月26日、山野編 1973：2-3）。

「何にせよ、いろいろのことで困難は起ると重ひますが、根強くやって行きます。飯田の一時的に熱するところを、じりじりと底深く進めて行きたいものです。わたくしも出来るだけのことを致しますから、何でも用事を仰しゃって下さい。

何にせよ、会員を沢山に得ることが第一ですね。いろいろと方法を講じて下さい。講師への謝礼は少しも気ばる必要なく、出来る範囲でよいのですから、そのつもりでして下さい。そのために感情を害する人は一人もないと存じます。よく会員と講師と打ちとけて話し合ふ機会を多くつくって下さい。もう少しして経費の余裕が出来、講師の宿泊所でも建てる事が出来、講師は本でもかく時に随意に其処へ出かけて居て、青年の諸君と随時に話し合ふ、などといふ程に講師と自由大学との間が密接になる様に早くしたいものですね。」

ここには土田の、開講したばかりの信南自由大学の運営に立つ横田への心配りと、自由大学の将来についての夢が語られていて、信南自由大学への強い期待をうかがうことができる。

第2回講座は、当初予定されていた新明正道ではなく、タカラ・テルの「文学論」で、1月28日から5日間、飯田江戸町の正永寺を会場に行われた。聴講者は52名であった。参考書として指定されたのはタカラの著書『我等いかに生く可きか』（アルス、1923年）であり、おそらくこの『我等いかに生く可きか』に書かれている内容と同様のことが語られたと考えられる。

胡桃澤盛は、1日目の1月28日の日記には「電車で自由大学へ行く。春日君が一人増えて筒井君と三人。江戸町の正永寺。高倉輝さんの文学論。近代文学に付いて。近代文学とは自然主義の洗礼を受けた文学若しくは自然主義文学」と、講義内容に簡単に触れ、講師のタカラの印象を「四高を出

て帝大を出た層だ。三十才位。面の黒い筋骨の太い偉大な体格で喧嘩に強そうだ」(1月28日条)と書いている。3日目については「高倉さんはなんでもドットイスキーを読めと推頼(注、推薦かー引用者)された」(1月30日条)ことを記し、4日目については「文学とわ何に乎と云う事を聞く。ロシア革命前後の悲しい痛ましい運命の話を聞く。滑稽極るブルジョアから紳士になった先生の話を聞く」(1月31日条)と、講義内容を記している(「胡桃澤盛日記」刊行会編 2011:146-148)。

最終日には講義の終了後、茶話会<sup>(18)</sup>と会員総会が開かれ、信南自由大学を伊那自由大学に改称することと、新たに「伊那自由大学会規約」が決定された(『南信新聞』1924年2月3日)<sup>(19)</sup>。

なお、この日、タカクラは賀良村青年会で「イワンの馬鹿」について講演をしている(長野県特別高等警察課 1931:92)。

タカクラは、講義を終えると、土田杏村に飯田の状況を手紙で知らせているが、土田は、その手紙をもとに横田にいくつか助言を書き送っている(横田憲治宛土田杏村の手紙、1924年2月22日、山野編 1973:5)。

「いってくれた講師からいろいろと批評を聞きたいと思って居たが、僕が何にせよ話が出来ないものですから山本君にはまだ逢ひません。来てくれる話だったがのばしました。高倉君からは手紙で忌憚なくしらせて貰ひました。それにつき一二注意してよいと思ふ点を申し上げます。

一、旅館のこと。これはどうも騒々しくて夜眠られないで弱ったさうです。お負けに晩の御飯など時間前に拵へることを断ったり、さんざんだったさうです。何も講師を特別扱ひする必要はないが、このことは一つ考へて見てくれたまへ。僕も経験があるが、実際、講習にいつて困るのは夜眠れないことです。それですっかり疲れます。今度は何とか旅館をかへるなり、或はだれかの私人の座敷を借ることは出来ませんか。さもないと講師が皆んなこりて了ひます。折角の計画に講師間の評判がわるくなっちゃああとで行ってくれるものがなくなりますから。

二、謝礼の件。これも高倉君に忌憚なく批評して貰ひましたが、取扱ひは旨くなかったと思ひます。どうせ自由大学の経費の足らないことは講師にも察しがつくのですから、此れは少しも遠慮せずに打ち明けて話されるがよいと思ふのです。講師には万事経営のことまで相談する様にして、腹をわって仕事をするがよいと思ひます。却て遠慮をすると、形式的にをかしなものになって了ひますから。

要するに、もっともっと講師と意志の疎通をやり、従来の青年会の講習と特色の違ものにしてやって下さい。講師には出来るだけ好意を以てやって下さい。上田の方はその点実に旨くいって居ます。勿論もう三回もやったために講師と聴講者との間がよく行って、すっかり親しくなったためでもあります、飯田ももう二年位たてばさうなると思ひます。

右につき御意見をおきかせ下さい。」

伊那自由大学は、自由青年連盟や郡青の青年たちの学習要求をふまえ、当時無産運動に関係していた人々を多く講師に迎えたり、「唯物史観」の講座を企画したりした。3月には大原社会問題研究所の櫛田民蔵を講師に「唯物史観」の講座を予定していたことが土田杏村の手紙からわかり、手紙には「唯物史観の講義の件はたしに承知しました。今櫛田君に交渉中ですから返事あり次第申し上げます。櫛田君だめならば、前の予定通り代りを頼んで行きませう。櫛田君が最適任者だとわたくしも思つて居ます」とある(横田憲治宛土田杏村の手紙、1924年1月26日、山野編 1973:2)。しかし、櫛田の都合がつかず、代わりに水谷長三郎が出講することになった。土田も、下伊那地域の青年運動に関わりをもちつつ学習活動を進めて行こうとする伊那自由大学の方針に協力する姿勢をとっていたのであつて、横田に宛てた手紙には、「唯物史観の連続講義については、その様に話をしておきました。但し今年は急のことですからどんな具合に行くか。何にせよ、飯田としてはこの講座にはうんと力を入れたいものです」と書いている(横田憲治宛土田杏村の手紙、1924年2月22日、山野編 1973:5)。

水谷は、講師を引き受けたことについて、2月18日の横田宛の葉書で、「今度、自由大学の講師を引受けましたについては、三月上旬に行きたいと思って居ります。私は他の講師と異なり、傍らに弁護士事務持って居ますの（注、でー欠落か）、思ふやうにひまがございませぬ」（横田憲治宛水谷長三郎の葉書、1924年2月18日）と書き、次いで2月24日の葉書では「三月三日から開講したいと思ひます。御地のことは総同盟の京都連合会の人々から聞いたりして、是非行きたいと思って居ります」（横田憲治宛水谷長三郎の葉書、1924年2月24日、山野編 1973：4、6）。

水谷長三郎の「唯物史観研究」は、特別講座として3月3日開講の予定であったが、講師の都合で3月4日からの開講となり、3月8日まで5日間、天竜俱樂部を会場に開かれた。

水谷は、京都帝国大学法学部在学中から社会科学研究グループ労学会を組織、友愛会に参加、1921年に大学を卒業すると、弁護士を開業していた。参考書にはトゥガン・バラノウスキー原著・水谷訳『唯物史観批判』（同人社、1923年、原著は『マルクス主義の理論的基礎』1905年）が指定されており、その内容に沿って講義は進められたと思われる。横田宛の葉書には、「御手紙拝見。日取は五日間やれるかどうか疑問です。先づやれるだけやりませう。『マルクス主義の理論的基礎』の名称及びその内容は、ツガン・バラノウスキーの論著どほりです故、拙訳『唯物史観批判』位よんで下さい。大阪の大原研究所へ申込まればよろしい」とある（横田憲治宛水谷長三郎の葉書、1924年2月20日、山野編 1973：5）。

会場となった天竜俱樂部は、南信壮年団が建てた建物で、青年団も寄付金を出しており、青年団体の会合や宿泊に利用されていた。しかし、設備はそれほど整っていたわけではなく、伊賀良村の代田保雄によれば、畳の上にミカン箱を持って来て、その上でノートを取り、講師は粗末な机に白い布をかけて、それを演壇がわりにしたという（代田 1978：72）。

水谷の講義の様子は、『南信新聞』が「講師水谷長三郎氏は快闊な口調にてしかも明快なボルハネトの史的唯物講略解第一章第二章に就て講義をされた。出席聴講生は四十余名であった」と伝えている（『南信新聞』1924年3月6日、清水 2008：8）。この「唯物史観研究」の講座は、社会変革を目指して社会主義理論を学ぶもので、社会主義的青年たちの聴講を期待したものであった。しかし、青年たちはそれに応えておらず、聴講者は新聞記事では40余名となっているが、『伊那自由大学』第1号記載の記録では27名と少なかった。

水谷長三郎は、講義を終えたあと横田に、「滞在中はいろいろお世話に預りありがたう。私の如き、日頃訴訟依頼人と金銭上の話をしづけてゐる者には、あゝした日を、たとへ五日でも送るといふことは、まるで砂漠の中の、オアシスのやうなものです」と、横田にお礼の葉書を書き送っている（横田憲治宛水谷長三郎の葉書、1924年3月11日、山野編 1973：10）。

次いで3月10日からは関西学院教授であった新明正道の「社会学概論」が5日間、天竜俱樂部で行われた。聴講者は32名であった。当初は1月に予定されていたが、「一月の下旬から二月の中旬迄は神戸を出ることが出来ませぬ。最も都合のよいのは、三月です。度々御繰替をお願いまして済みませんが、も一度御配慮できるやう御願致します」（横田憲治宛新明正道の手紙、1923年12月27日、山野編 1973：2）と手紙を書いていたように、新明の都合がつかず、延期されたものである。新明は、自由大学へ出講することを楽しみにしており、出講を承諾した手紙には、「私は本職は学校の教師ですが、案外所謂学校には真の究学の気持のある人の少ないのに悲観してゐます。自由大学のやうな自ら進んで学問に近付かうとする人々の集って来らるゝところへ行つて話の出来るのを嬉しくおもつてゐます」と書いていた（横田憲治宛新明正道の手紙、1923年12月7日、山野編 1973：1-2）。

新明の講義は、聴講者の佐々木忠綱が筆記したノートによれば、「第一章 序言」では、社会学の特質、社会学の対象、現在の社会学の傾向について概説し、「第二章 社会学の主要なる諸傾」では、大きく自然的学派と哲学的学派に分けられ、自然的学派も一般的学派と特殊的学派に分けられとし、

一般的学派の有機体派（コント、スペンサー）、契約的有機体派（フイエ）、種族学派（ゴビノオ）、物理的機械的学派（ウオード）、比較民族学派（ラッツェルス）、比較歴史学派（マルクス）、心理学派（タルド、マクバウガル、ルボン、フロイド）や、特殊の学派（ジンメル）、哲学的学派について、それぞれ説明し、この講義では哲学的学の立場を採るとしている。「第三章 社会の本質」では、哲学的学派の見解は、「社会を自然とは別物として考へる、社会の意味としての成立に注目する」「個人の実在から出発しないで、社会を一つの実在として考察する」ことを説き、「抽象的社会と具体的社会」「社会の体制（社会の構造）」について解説している。「第四章 社会意識」では、社会意識の種類、社会意識と社会生活、社会意識と社会表章について解説している。「第五章 社会組織」では、社会組織、機関の形成について説明したあと、社会組織形成から見た組織社会の二つの型の対立について、「社会が成立してその後に組織が生じたもの」とみる生成社会、「社会組織が社会成立と共に生じたもの」とみる構成社会の2つがあることを解説している（佐々木忠綱筆記ノート「哲学史概論」）。

新明によれば、講義はドイツやオーストリアの社会学者の学説を紹介したものであった。新明は、そのときの状況を、「私自身一般学生に対するとほとんど同一の内容で講義を試みたが、いまからふり返ってみると生硬な議論も多く、さだめし聞きにくかったのではなかろうかと反省させられるにもかかわらず、夕方になって方々の村から小学校内の教室に集まって来る人々は、身じろぎもしないで緊張した顔付きで私の講義から何かを聞きとろうと熱心に耳を傾けている」と回想している（新明 1968：16）<sup>(20)</sup>。

新明は、最終日の3月14日、神稲村で「自由と社会進化」について講演を行っている。胡桃澤盛が日記にその内容を書いており、新明の講義の一端を知ることができる（「胡桃澤盛日記」刊行会編 2011：163-164）。

#### （4）LYL検挙事件と伊那自由大学

新明正道の講義終わった直後の3月17日、自由青年連盟の中核組織であるLYLの関係者に対する官憲当局による弾圧があり、21日までに羽生三七・今村邦夫・代田茂・矢沢基司・北原亀二・林武雄ら26名が検挙された。LYL検挙事件である。その中には自由大学関係者2名も含まれており、平沢桂二は17日朝に、横田憲治は19日に検挙された<sup>(21)</sup>。21日夜に羽生三七・今村邦夫ら13名、23日夜には今井敏造・桑原郡治ら4名が飯田刑務所に収監されたが、北原亀二・平沢桂二・横田憲治ら9名は釈放された。

この検挙事件に対して、片山均・須山賢逸ら南信壮年団・郡青の有志は常盤館に事務所を置いて「扶助会」を組織し、検挙者に対する差し入れ活動などを行った。

ほぼ4ヵ月にわたる予審では、羽生・今村ら19名が取り調べを受けただけでなく、すでにLYLを脱退している平沢・横田・北原亀二・北原理一や、彼らにLYL脱退を勧告した堀尾陸郎らも証人として喚問した。そして7月19日、裁判所は羽生ら19名全員を責付で釈放し、21日予審終結決定書を公表した。羽生ら19名は治安警察法第28条（秘密結社）違反、ほかに『第一線』の編集責任者であった林武雄は新聞紙法第41条違反で起訴された（佐々木 1978：154-168）。

このLYL検挙事件は、横田憲治・平沢桂二も検挙され取り調べを受けたことから、不起訴になったとはいえ、自由大学関係者に大きな衝撃を与えた。横田憲治宛のタカクラ・テル、水谷長三郎、猪坂直一、土田杏村の手紙が、それを示している。

タカクラは、「無事御帰宅の旨今日新聞で承知しました。とにかく一安心いたしました。今度は寔に愚な目にお逢ひになって全く御気の毒です。しかし結果は却ってより多く真剣になりはしませんか」と書き（横田憲治宛高倉輝の手紙、1924年3月25日、山野編 1973：11）、3月に自由大学で講義し

たばかりの水谷は、「信州の検挙ノ件如何、自由大学の人のうちで、若しもヒッカカタ人があれば、知らせて下さい。及ばずながら、弁護士としてお助け致します。とに角、自由大学はあんなことに干渉なく、益々発展あらんことを祈ります」と、書き送り弁護士の立場から援助を申し出ている（横田憲治宛水谷長三郎の手紙、1924年3月31日、山野編 1973：11-12）。また、猪坂は、「先般は御地には官憲の颱風が起き貴兄までが巻き添へを喰らはれたやうですがもういいんですか。一時は新聞を見乍ら大分心配して居りました。こんな事から自由大学の運動に頓挫を来しはせぬかと気づかひもしました。高倉さんも大分心配のやうでした」と書き（横田憲治宛猪坂直一の手紙、1924年4月1日、山野編 1973：12）、土田は、LYL検挙事件の結果、自由大学運動が挫折することを心配し、次のように書いている（横田憲治宛土田杏村の手紙、1924年4月15日、山野編 1973：13）。

「自由青年連盟で奇禍に遭遇せられたことは、上田へ問合せで直ぐに知りました。それから毎日消息を待って居たのです。今度不運な目におあひになった方には実にお気の毒です。（中略）自由大学が多少の影響を被ることがあっても、此れは今年の冬までには大丈夫形勢を恢復し得さうに思ひます。そして此れは是非恢復することにお互ひに骨を折りませう。我等の運動は自由青年連盟よりももっと根本的のものです。伊那はあゝいふ狭い谷ですから、青年連盟がやられたとなると、外部を見る機会が少ないため、却って反動的に動く人達が多くなりはしないか、そのために自由大学の人達さへも動くことになりはしないかと怖れますが、此の形勢は冬までの長い間には大丈夫恢復し得ると信じます。それよりも怖れるのは、伊那の注意、青年の重もだった人達の注意がの裁判の方へのみ注がれて居て、自然、自由大学より眼を逸らしはしないかといふことです。」

一方、須山賢逸は、LYL関係者が検挙された直後の3月19日、山本宣治に飯田の様子を伝えている（山本宣治宛須山賢逸の手紙、1924年3月19日、佐々木・小田切編 1979：212-213）。

「自由大学の方は去る十四日の新明氏の社会学を以て、第四講座目を終によつてりました。

先生たちの御力添へ今迄は順調にやつて来られました。特別課外としての水谷長三郎氏の「唯物史観」を除く外は皆、満足せる結果を見ました。高倉氏も新明氏も非常に熱心にやつて下すつて皆感謝して勉強しました。

これで、此の春の仕事は一段落をつけて、又秋になりましたら、シッカリと勉強する様に、自由大学の方をうまくやつて行きたいと存じてゐます。

先生の郡青年会への電報が昨日来た処を見ると、今度の飯田の事件は御存じの事と思ひますが、実にくだらない事をする連中にもあきれてしまひます。

昨夏、東京での共産党事件ですら馬鹿々々しいと思つてましたのに、こんな山間に、しかも真面目な青年を対象として、ゴタゴタして見るなど実に笑止な事です。

郡青年会で、榊本卯平氏や『信毎』新聞の風見氏等を講演にたのんで来た処、余り妙な話をしたので、ソと抗議を申込んだり、冷遇しましたから、其の腹いせに『万朝報』へ根も葉もない記を大業に書いたので、今度の第二共産党事件が起きたのです。

自由連盟の諸君と、『信濃時事』紙の山田外二名の連中が雑誌『第一線』の違法行為によつて調べを受けてをるに過ぎないのですが、事柄が事柄だけに、仲々やかましい様です。（平沢君も召喚されました。）

こんな事は何でもないのですが。ただ純真な青年の芽をとめたり、おびやかしたりされる事になるのを、実に残念に思ひます。

この事件によつて、目下開催中の蠟山正道氏、河西太一郎氏（新明氏も一日講演しました）の講演会の会員出席が、事件が発表された日より半分になつた所を見ても、いかに何も知らない青年をおびやかしたかがわかります。

何れ、東京の共産党事件より尚馬鹿らしい結果を見る事と思ひますが、少し静まつたら、ウンと

青年の自由研究の妨害をした官権を弾劾してやろうと思つてゐます。」

須山は、4月13日にも山宣にその後の様子を報告し、横田・平沢が釈放され、20日頃に自由大学の今後について会合を開くことを伝えている（山本宣治宛須山賢逸の手紙、1924年4月13日、佐々木・小田切編 1979：215）。

「当地、青年検挙事件は目下予審中です。収監者十七名、仲々予審が進捗しないのでこまります。検挙事件のために当地の自由主義運動は五年位昔に帰りました。大さわざで国粋会の発会式が挙げられ、あらゆる反動運動が台頭して来て、ここ暫くは、進歩党は潜伏時代です。

横田・平沢両君共、一時は収監されたけれども五日ばかりで放免、無事働いてゐます。

来る二十日頃、自由大学の事で会見する事になつてゐます。」

須山の手紙にある4月20日頃に開かれた会合で、今後の自由大学の方針について話し合いが行われ、LYL検挙事件に対する対応策として、自由大学の立場を明らかにするパンフレットを発行することが決められた。

須山は、山宣に宛てて、「自由大学は、此の夏（多分八月中旬）特別講座か定期講座を開きます。出氏の哲学史をやることになると思ひます。／自由大学で、七月迄にパンフレットを発行することに決めました。何か極く短いものを書いて送つて下さい。掲載したいと思ひます。／今年の青年検挙事件で、自由大学と自由連盟とが——教育と宣伝との区別がハッキリされたために、自由大学の方は大変都合よくなりました。大体基礎が出来た様に思ひます」と書き送り、パンフレットの発行と執筆依頼をするとともに、自由大学と自由青年連盟の立場の違いが明確になったことを書いている（山本宣治宛須山賢逸の手紙、1924年5月9日、佐々木・小田切編 1979：217）。横田は、すでに会合以前に

土田杏村にパンフレットの発行を提案しており、土田も折り返し賛同を伝え、次のように書いている（横田憲治宛土田杏村の手紙、1924年4月15日、山野編 1973：13-14）。

「パンフレットは是非報告として出したいものです。愈々出される時には私も何かかきますから、さう申して下さい。これは今回の検挙に関連して郡内の誤解を解くことにしてかいた方がよいものでせうか。我々のものは教化運動であつて、直ちに社会運動ではないといふことを。」

夏の講座を開講することについては、秋からの第2期講座との兼ね合いもあり、検討はされたものの、開講には至らなかった。

パンフレットの発行準備は、新明正道、タカクラ・テル、土田杏村から執筆の承諾が得られ、7月には執筆者の原稿が届き、順調に進んだ。そして8月には、自由大学パンフレット(1)・横田憲治編『伊那自由大学とは何か』（1924年8月10日刊）として刊行された。パンフレットは、土田杏村「自由大学とは何か」、高倉輝「自由大学に就て」、新明正道「自由大学の精神」の3論文と「組織及び内容」を収録した全26ページのものである。それは、土田によれば、「所謂秘密結社事件と自由大学との関係を釈明する」ために刊行されたのである（土田 1924b：49）<sup>(22)</sup>。

この中で重要なのは土田の論文「自由大学とは何か」である。土田は、原稿を送ったさいの手紙の中で、「自由大学パンフレットの原稿、本日書き上げました。別封でお送りいたします。随分むずかしいものになりましたが、何にせよ御地は社会主義思想の盛んなところであり、とって古いことはかきたくないし、実際家としてどっちにもさしさわりのない、しかしまた理論的に間違いのないものと思ひ、一言一句ゆるがせに出来ず、しっかりとかきました。此れならば理論的に攻撃を受けるところは断じてないつもりです」（横田憲治宛土田杏村の手紙、1924年7月5日、山野編 1973：17）と、自信を持って書いたものであった。

論文の前半は、自由大学の理念をまとめたもので、「自由大学とは、労働する社会人が社会的創造へ協同して個性的に参画し得るために、終生的に、自学的に学ぶことの出来る、社会的、自治的の社会教育設備だといふことが出来る」と説明している。現存の学校制度とりわけ大学制度が「其の門戸

を各人へ平等に開いて居る」というが、実際は莫大な経済的資力必要とし、「高い程度の教育は当然有産階級に独占せられてゐる」現状であるのに対して、自由大学は、それとは対照的に、「あらゆる社会的独占の原因」となる「教育の独占」の排除と「教育の自治」がつらぬかれるものであるとされた。したがって自由大学の組織は、「被教育者本位」に「自治的」に運営され、「講師の選択」をはじめすべてに「学ぶことの自由が完全に擁護せられ、教育の自治が十分に実現せられて居る」ものとされたのである（土田 1924a：4-8）。

論文の後半は、「教育と宣伝」の節で、自由大学の教育内容について、「我々の大学の教育は、団体として特に資本主義的でも無ければ、また社会主義的でも無く其等の批判を自分自身で決定し得る精神能力と教養とを得るを目的とするものである」という信南自由大学の「設立の趣旨」を確認し、「私は今資本主義と社会主義との何れが真なるやを断定しようと思はない。かゝる判断の真を追求し、偽を拒否する人格的態度を得るやうに、相互的に教育しようと思ふのみである」（土田 1924a：5-6）とのべて、教育と宣伝を峻別することを改めて主張した。「自由大学と社会運動」の節では、「最近上下伊那郡に起つた一事件は我々の自由大学にも多少の飛沫を与へた、其れがために教育の為の我々の自由大学と社会運動のための或る一団体との間に、何等かの関係あるかの如くに考へ、随つて自由大学に聴講することを憂惧するものありとすれば、其は全然の誤認であり、且つ杞憂であるとしなければならぬ。自由大学は教育のための一機関であり、其れ以外に何等の目的を持つものではないから、自由大学として或る特定の社会運動に加担せず、随つて他のいかなる社会運動団体とも秘密の定型をなす如きことは過去に於て絶異であつたし、且つ将来に於てもあり得ないことを我々は此処に声明するものである」とのべて、自由大学は教育機関であり、特定の社会運動もしくは組織と提携したこともあるいは将来提携することもありえないと、あくまでも「教育の自律性」を主張したのである（土田 1924a：8-9）。

このようにパンフレットは、伊那自由大学の立場を改めて郡下の青年の前にあきらかにしたが、しかしLYL検挙事件のために青年運動の側が危機に直面しているときに、自由大学が青年運動との提携を意識的に避ける表明をしたことは、自由大学を維持するためであつたとはいえ、地域反動層の思想攻勢によって青年運動が後退していくのを傍観するものとなつた。LYL検挙事件直後の4月にはトテ馬車業の一貫社主人鷲津辰三郎を支部長とする「国粋会飯田支部」が結成され、郡長臼田松太郎をはじめ郡内の有力者、上郷村長北原阿智之助、在郷軍人連合会会長大平豁郎、森本州平らは、青年の思想善導という名目で青年会の切り崩しを図るとともに、「下伊那国民精神作興会」の結成準備をよびかけ、10月26日には飯田小学校で発会式を行っている（須崎 1998：75-78）。国民精神作興会の目的は、赤化防止、共産主義の撲滅にとどまらず、皇室中心主義、国家主義などによる青年の教化であつた。この国粋会と国民精神作興会の結成により、下伊那地域では、青年の思想をめぐる左右の対立が激化していった（佐々木 1978：171-174）。

### 3. 伊那自由大学の学習運動の展開

#### (1) LYL検挙事件後の伊那自由大学

長野県内では、上田市に上田自由大学、飯田町に伊那自由大学が設立され、新潟県では北魚沼郡堀之内村に魚沼自由大学、南魚沼郡伊米ヶ崎村に八海自由大学が設立されるにともない、各地の自由大学の連絡機関をつくる動きが始まる。連盟機関設立の構想は、山本宣治によって提案され、土田杏村と上田自由大学関係者の手で具体化されていった。

土田は、8月3日、伊那自由大学の横田憲治に宛てて手紙を書き送り、「自由大学協会」の構想を披瀝している。すなわち、「今年あたりは是非相互の連盟をつくりたいと思ふがいかにですか。自由大学協会とか何とかいふ様なものをつくり、それは会員を共通とし、毎月、会費を十銭位づゝ徴集し、信州の二箇所、越後の二箇所を合すれば会員が少くとも八百名は得られませう。さうすれば、機関紙を出すことも出来ます。機関紙が出来れば会員の熱も大いに違って来ると思ひます。そして講師はお互ひによく融通して一方の帰りに他方へ行くといふ様な具合にして、なるべく計費を節減し、また講師の時間の妨害をしないやうにしたいものです」と、具体案を示し、そのうえで「打ち合せ会を一度上田で開きたい」旨を伝えている（横田憲治宛土田杏村の手紙、1924年8月3日、山野編 1973：17-18）。打ち合わせ会のことは上田自由大学の猪坂直一からも横田に伝えられ、「自由大学の今後の方針に於ては、土田さんから種々と心配して来られて居りますし、又土田さんも高倉さんも（中略）近いうちに各地の自由大学（今のところ、上田、飯田、越後の堀内及び八<sup>マ</sup>開）の関係者相会して、徹底的に協議したらどうか、と言って居られます。そこで場所ですが、矢張り交通の関係上、上田が良くは無いかと言ふのです。如何でせう。御地よりも貴兄なり平沢兄なり或は其他適当な方なり、今月の十五日頃までに都合が出来ませうか」と書き送っている（横田憲治宛猪坂直一の手紙、1924年8月3日、山野編 1973：18-19）。

こうして自由大学協会の設立準備会は、1924年8月15日、長野県別所温泉のタクラ・テル宅で開かれた。この設立準備会には、上田自由大学から金井正・山越脩蔵・猪坂直一、魚沼・八海両自由大学より渡辺泰亮、それにタクラ・テルが出席した。伊那自由大学からは誰も出席していないが、その理由は不明である。協議の結果、(1)連盟機関を「自由大学協会」と名づける、(2)機関雑誌を発行する、(3)「自由大学協会規約」の決議、(4)協会の専務幹事に猪坂直一を推薦、の4項目が決定された。こうして自由大学協会は、上田・伊那・魚沼・八海の4自由大学（のち松本自由大学を加えて5自由大学）が加盟して発足したのである。

伊那自由大学は、『伊那自由大学とは何か』の発行と自由大学協会の発足にあわせて役員を改選し、理事には横田憲治・平沢桂二・須山賢逸の発起人3人の他に土田杏村と木下幸一がなっている。木下は飯田町出身で郡青の常任委員であった。

自由大学協会の活動は、講師の斡旋と機関雑誌の刊行、各自由大学間の連絡が中心であった。

講師の斡旋は、専務幹事の猪坂直一を通して出講を依頼する方法がとられた。土田杏村は、伊那自由大学の横田憲治に宛てた手紙の中で、「冬の講義の承諾を確定的に得たいと思ひます。それで自由大学協会が確立した以上、専務幹事から一括して囑託し、出講してくれる月をきり、それを表につくって見て各自由大学へ配当する様にしたいと思ひます。それにつき猪坂君から至急給講師へ協会の成立したことを報告し、講師に依頼することになって居ます」と書いている（横田憲治宛土田杏村の手紙、1924年9月3日、山野編 1973：22）。この猪坂を通しての講師依頼は、伊那自由大学の24年10月からの講師に対してなされた程度で、それ以外の自由大学はそれぞれ独自に講師依頼をしており、必ずしも土田が意図するようなかたちにはならなかった。

伊那自由大学は、24年10月からの講座については、自由大学協会の猪坂直一を通じて講師の斡旋が行われたが、なかなか決まらなかった。猪坂の9月24日付の手紙には、「自由大学講師委嘱の件、其后諸方へ交渉を開始して居りますが、今年はどうしたものかうまく適任者が得られないので閉口して居ります。殊に貴大学に向けるべき山口、波多野、新明の諸氏が何れも決定せず多分不可能に終りはせぬかと危ぶれるのには全く弱り切つてゐます」（横田憲治宛猪坂直一の手紙、1924年9月24日、山野編 1973：23）とある。9月30日になって土田杏村から、山口正太郎と谷川徹三の2講師が決定したとの連絡があり（横田憲治宛土田杏村の手紙、1924年9月30日、山野編 1973：25）、山口からは、「小生本月二十日頃から余暇がありますので二十一日から二十五日迄御差支なければ貴地方の自

由大学へ出たいと存じます。御都合は如何でしょうか」(横田憲治宛山口正太郎の葉書、1924年9月30日、山野編 1973:26)との葉書が届いた。

こうして伊那自由大学の第2期第1回講座は10月21日から5日間、山口正太郎の「経済学」に決まった。のちに政治研究会下伊那支部の機関紙となる『政治と青年』第4号(1924年10月10日)は、自由大学講座開講の広告を載せ、時評欄に「自由大学の活躍を待つ」と題する一文を掲載して自由大学への期待を表明した。

「伊那自由大学は二十一日から今年の新講座を開くことになった。確定したと云ふ講師の顔触れを見るに大体に於て、吾等の意に添ふものがある。

大学が開設して今日に至つた一年間を顧みる時、余りにも云ふべきことの少なかつたことは意外に堪へないが、創立当時、理事者の意志が徹底してゐなかつたのと、誤解を余儀なくせしめるやうな行動を採つたのとのために、青年求学の徒にさへ快くなかつたことは掩ふことの出来ない事実であつた。

けれど吾等は、自由大学の存在を否認することは出来ない、吾々が常に求め来つたものは教育の機会均等であり、学理の探究であつたのだから、価値判断は別として、大学の存在は誰れしも飲んで迎へねばならぬことであつた、が当時峡谷を風靡してゐた思想の潮は、グングン押し進んで行つて自大の如きは緩衝地帯と呼んで顧みる所でなかつた。

しかし今春以来、下伊那の青年会の空氣に大きな動揺を生じ、思想的方面にも或る弛緩を生じてゐる時、自由大学の跳躍は最も望ましいことである。さうして下伊那の過去をふり返つて『頭ずがき』の製造であつたと感じてゐる今の場合、大学の使命そのものから云ふてもんとか振起せねばならぬ、大学が目的をなし遂げるときは今のやうな場合である。」

この『政治と青年』の一文は、自由大学設立時は自由青年連盟を脱退した人たちによって設立されたため、自由大学の趣旨を理解せず援助をしなかったことを反省したうえで、自由大学の発展を期待することを表明したものであつた。

山口正太郎の「経済学」の講座は、10月21日から25日まで、天竜倶楽部で行われた。しかし、『政治と青年』の期待があつたにも関わらず、また、『南信新聞』(1924年10月16日)の広告には「不問男女多数の聴講を希望す」と書かれていたが、聴講者は16名と少なかつた。

山口は、講義に先立ち、山口著『経済学説史研究』(岩波書店、1924年)、同『純理経済学の諸問題』(岩波書店、1921年)、山口訳・メンガー著『経済学の基礎理念』(大村書店、1923年)を参考書として紹介したが、「経済学を初めて聞く方には少し難しいかと存じます。それで講義後に読んで頂ければ結構です」とし、「講義には黒板が是非必要です。落着いて所謂講演にならず講義としたいと思ひます」と、黒板の用意を依頼している(横田憲治宛山口正太郎の手紙、1924年10月8日、山野編 1973:28)。講義の内容は、知られていないが、佐々木忠綱は、「大阪高等商業の山口正太郎教授が来て経済原論などの話もしましたが、それらには資本論も唯物史観も含まれて話があり、一応そういうことの認識も我々はそれにらつて順次、マルクス説に対する認識も非常に薄いものですが出てきたわけです」と回想している(座談会 1979:23)。

山口の講義が終わつた直後、10月27日、「政治研究会下伊那支部」の発会式が天竜倶楽部で行われた。参加者は各村会員の代表20余名で、北原亀二議長の経過報告のあと支部規約を決定し、11月20日に代表委員会を兼ねて支部総会を開くことにし、それまでの間は各村の班において入会者の勧誘、班の組織確立に努めることになった(23)。

この政研下伊那支部は、自由青年連盟が解散命令を受けたあとの社会主義青年運動を引きつぐものであつた。LYL検挙事件の第一審公判は9月15日から始まり、9月30日には判決があり、被告19名全員が有罪判決となつた(24)。さらに10月13日には「治安に害ある」ものという理由で内務大臣より

自由青年連盟の解散命令が出された。そこで青年たちは、新たに「下伊那政治研究会」をつくろうとしたが、警察当局からは解散命令を受けた自由青年連盟を改組したものと見なされたため、その組織化を断念し、鈴木茂三郎・片山哲・賀川豊彦・島中雄三らが中央で組織した政治研究会の下伊那支部として発足させることになったのである（佐々木 1978：190-199）。

自由大学では聴講者が16名と激減したことから、土田杏村は「何にせよ、今一大危機にせまって居るのですから、もう一段宣伝を骨折して下さい。お願いいたします」と、横田憲治に書き送り、具体的な方策を次のように書いた（横田憲治宛土田杏村の手紙、1924年10月30日、山野編 1973：30）。

「もう一段聴講者をふやすことについて大宣伝をやっていたゞけませんか。（中略）たゞ講義が開かれることを一二度公示した位じゃあだめです。各村、各字などにもっと委員を沢山つくり、その人達によって貰ひ、その地方々々で各二三名の聴講者を口どき落して来るといふ様にしてやはり戸別訪問式にしないじゃあだめだと重ひます。何にせよ、委員をもっともっと豊富にして下さい。」

横田の方でも、自由大学の経営難に対する一つの方策として、後援会組織をつくることを考えていたことが土田杏村の書簡から知られる。土田の手紙には、「経営については、上田も同様ですが、後援機関はよいことだと思ひます。一つ懸命になって拵へ上げて下さい」とあり、土田もその構想に賛成していることがわかる（横田憲治宛土田杏村の手紙、1924年12月13日、山野編 1973：35）。

この後援会組織が発足した日時は不明であるが、おそらく1925年1月の役員改選のときに設立が決められ、遅くとも4月には「伊那自由大学後援会」として組織されたと考えられる<sup>(25)</sup>。

12月1日からの谷川徹三「哲学史概論」の講座を前に、『政治と青年』第9号（1924年12月1日）は、その広告を載せ、「自大の危機を救へー徹底的改造の要があるー」を載せている。

この一文は、「吾等が熱烈に求めて止まなかつた自由の学問、自主的な学校として伊那の天地に自由大学の生れたことは誰れしも喜んで迎えた筈であつた。ところがどうした訳か開校幾許もなくして實際が我々の讃辞を裏切つたことは甚だ遺憾である。それには幾多の原因の損することは云ふ迄もないが、（中略）自大の主旨が不徹底であることが主因をなしてゐる。講座及び開校の上にも改造を加へねばならぬものもあるが、それよりか大学理事者の処置に甚だ思はしからぬものがある。飽く迄も理想主義を以て大学を押し進めて行くことはよいことであるが、これが為めに内部の現実と離れ、聴講生の意志と便宜とを無視する結果になる事は大学そのものの為めに遺憾この上もない。吾々は吾々のための大学を擁護し伸張しようとする至情から是非ともその欠陥を改造して完全なる自主的となさねばならぬ。そうするには此の際各人の意見を集めて徹底的に改革を試みスタートを切り直すより外はない」と述べ、自由大学の現状を批判し、その「徹底的改造」を求めつつも、「大学を愛し大学を吾等のものとして成育させたいと希望する人々は来つて大学の危機を救ふべきである」と主張している。

第2期第2回講座は、谷川徹三の「哲学史概論」で、12月1日から5日間、天竜倶楽部で行われた。『政治と青年』の呼びかけにもかかわらず聴講者は23名と少なかった。

谷川は、出講を承諾したとき、「浅学到底御期待に副ひ難いと思ひますが、ともかく最善をつくすつもりです。／皆さんが非常に御熱心だといふことを承って力強く思つてゐます」と書き、講義の参考書として、大西祝『西洋哲学史』、波多野精一『西洋哲学史要』、安部能成『西洋近世哲学史』をあげている（横田憲治宛谷川徹三の手紙、1924年10月30日、山野編 1973：30-31）。また、講義内容について、「私の今度の講義は哲学史概観として全部を一通り簡単に終りたいと思ひます」として、5日間の内容を次のように記している（横田憲治宛谷川徹三の手紙、1924年11月23日、山野編 1973：33-34）。

「第一日、1. 哲学の意味 2. 哲学と科学 3. 哲学と芸術 4. 哲学と宗教 5. 哲学史と哲学概説 6. 哲学史の意味 7. 私の講義に於て私のとる態度及び指定せられたる視点

第二日、ギリシャ哲学 1. ソクラテス以前 2. ソクラテス、プラトン 3. アリストテレス  
4. アリストテレス以後 5. ギリシャ哲学に於ける哲学の中心問題の推移

第三日、1. 中世哲学 2. ルネッサンスの哲学 3. カント以前の大組織 4. カント以前の哲学の概観

第四日、1. カント哲学 2. フィヒテ、シェリング、ヘーゲル 3. 唯物論

第五日、1. 現代の哲学 2. 哲学的態度と哲学的思惟」

そして「もし哲学史概観の一般内容部分がすこしでも早くすむようでしたら批評哲学とマルキシズムの関連について（マルキシズムの内容についてはあまり知らないのですが）私の理解した信じてゐる（現在さう考へてゐるのですからもっと私がまた異った見解に到達するかも知れませんが）ところをお話しすることができるかも知れないと思ひます」と書き添えている。

この講義要項は『南信新聞』（1924年11月29日）にも掲載されている。

大下条村の佐々木忠綱の筆記ノートには第1日目の分が残されているが、「哲学の意味」の項では「哲学の意味は哲学最初の問題にして然して最後の問題である。哲学とは何ぞかは哲学それ自身によられは答へられないから哲学は知識のみのものに非ず 哲学的要求 形而上学的要求 知識としての問題としての哲学は真に哲学そのものに非ず 然し哲学は天上の学哲学者は特に選れたる人との考は誤れり 総ての人は常に多少の哲学あり常に哲学して居る」という書き出しで始まっている。「哲学と科学」の項では「哲学と科学とは知識の立場に於ける現象の続といふことに於て同一なると 然し哲学は第一に価値に関係すれども科学は価値に関係せず homo sapiens 人間の動物学上の学名人間に価値を考にいれなければ人生観は成立せざるべし 価値的見地に立たずして人生の態度を決定することは不可能である」とある。また、「谷川氏講義の立場（採るべき）」の項では「1. 各時代の哲学がそれぞれ如何なる問題を取扱ったか 2. それを如何に取扱ったか 3. 各時代を通じて何か一貫した態度があるのかもしあるなれば如何なる態度であったか」と記されている（佐々木忠綱筆記ノート「哲学史概論」）。

この谷川徹三の講義を聴講した胡桃澤盛は、日記に「自由大学で哲学史が講ぜられると云うので往く。同志社の谷川さんである。哲学は始めて聴くのだから難解な事限り無い。／統一とか統一の統一とか、熟語さえ解し得ない。／哲学は各個の有して居るものだ」（12月1日条）と、講義が難解であった事を記し、2日目は自由大学は休み、3日目は聴講したもののやはり難しく、「夜、飯田へ行く。講義が無図解しくて解らない」（12月3日条）と日記に書いている。ところが4日目については「飯田へ往く。本日の講義は大へん良く判った」と、講義が理解できたことを記し、「講義は良く理解し得なくとも彼の空気に触れる事だけでも自れが成長する気分がある」（12月4日条）と、谷川の講義の感想を書いている（「胡桃澤盛日記」刊行会編 2011：260-261）

第2期第3回講座は、1925年1月8日から5日間、タカクラ・テルの「文学論（ダンテ研究）」が天竜倶楽部で行われた。聴講者は26名であった。

タカクラの講義内容は、千代村の楯操が筆記したノートによって知ることができる。講義は、日本のダンテ学者、英語を中心としたダンテ研究の参考書の紹介から始まり、「Ⅰ章 ダンテの出生、家系、家庭、生地、時代」「Ⅱ章 ダンテの幼時、容貌、教養、伊太利の叙情詩『新生』」「Ⅲ章 学殖及フィレンツェの政争」の章立てで講義が行われた。Ⅱ章の『新生』に関わるごく一部分を紹介すると、次のようになっている。

「新生 La Vita Nuova

ダンテの幼年より少年にかけて最も影響を及ぼした事件はベアトリチェ Beatrice に対する世にも不思議なる恋愛であった。

此の新生はその恋愛と熱情とに依って生れた。初恋の人ベアトリチェを主題とした多くの叙情詩

に注釈を加へた叙情詩集である。

之に依ると九才の時に始めて彼女を見た。

彼女は其の隣りなるファルコ・ポルチナリと云ふ人の娘で当時ダンテより一才年下の八才であった。

1274/5/1の春の祭の日パ \_\_\_\_\_ に至り始めて彼女を見た。

ダンテの記す所に依れば彼女は紅の衣を着て居た その姿が一生忘れ得なかった。其后九年間相見ることが出来なかった。が彼女が十八才の時再び会ふ機を得た。

其時彼女は云ひ難きインキンな挨拶をした そしてダンテは其時の心持を幸福の極を見尽した様に思ったと記して居る。然して酔へるが如き心持になったと。

その時ソネットを書き友人詩人達に送った。此ソネットはダンテの著作の最初のものとなって居る。

之は清新体詩の代表的のものでツルバギオルの旧派の詩人からは攻撃せられたが新派の詩人達には非常に歓迎せられた。」(楯操筆記ノート「高倉輝 文学論(ダンテ研究)」、山野編 1973:142)

タカクラの講義は、当時のイタリアの政治や文学状況を背景にダンテの生涯を語り、ダンテの著作を紹介したものであった。

タカクラがダンテ研究を講義したことについて、米山光儀は、タカクラの指導教授であった上田敏が『詩聖ダンテ』(1911年)の著者であり、文部省から『神曲』の翻訳を委嘱されていたこと、京都市文学会の機関誌『芸文』第12年第9号・第10号(1921年9月)を「ダンテ六百年記念」とし、タカクラと関係の深い厨川白村や新村出も寄稿しており、「このような環境の中にあったタカクラがダンテに関心をもち、それを語ることは自然なことであった」と指摘している(米山 1986:49)。米山も触れているように、上田敏は文部省文芸委員会の事業の1つとして『神曲』の翻訳を委託されていたが、新村出によれば、翻訳が完成しないうちに他界したため、地獄篇の初数章を『ダンテ神曲 上田敏未定稿』(1918年)として刊行して、記念に頒布して上田敏の遺業をしのんだことがあり、その仕事を担当した新村に協力したのがタカクラであったという(新村 1951:5)。上田敏未定稿の例言には、「稿本の筆写謄本の工程及印刷の校正は高倉輝豊氏の盡瘁甚大なることを特筆せざるべからず」とある。

このタカクラの講義を聴いた楯操は、「講義で感動の未だに耳朶に残っているのはタカクラ先生のダンテの神曲である。ダンテは九才のヴェアトリチェを一目見て絶高の愛を感じ、それがダンテの一生を支配し、あの膨大な神曲を作らしめたという、愛の基本像(?)とでも云えるものをあの美しい言葉で語られた」と回想している(楯 1981:16)。楯にとって、タカクラの「ダンテ研究」の講義は自由大学の中で最も印象に残っている講義の一つであった。

伊那自由大学では、このタカクラの講座に先立って、1月8日の午後1時より百十七銀行楼上で公開講演会を開き、自由大学協会専務理事の猪坂直一が「自由大学運動の現在及将来」と題して講演し、次いでタカクラ・テルが「所感」と題してロシア・インド等のお伽噺を引例して人間と貨幣についての暗示的な興味深い講演をした(『南信新聞』1925年1月7日、『自由大学雑誌』第1巻第3号、1925年3月)。猪坂によれば、この飯田での講演会では「しきりに野次が飛ん」という(猪坂 1967:59)。

タカクラの講義が終わった1月12日、役員改選が行われ、横田・平沢・須山の他に新しく吉沢敏二、中塚稲美、牧野元一、楯操、代田保雄が理事となり、木下幸一と土田杏村は辞めている(『自由大学雑誌』第1巻第3号、1925年3月)。吉沢敏二は竜江村出身で小学校教員、中塚稲美は市田村出身の小学校教員、牧野元一は鼎村出身で郡青の常任委員、楯操は千代村出身で農業、代田保雄は伊賀良村出身で元村青年会長であった。この理事の補充は、各地域に理事を配置し、青年たちの要望を吸い上げたり、新たな聴講者を獲得するためであったと考えられる。しかし、理事を増やすだけでなく、

タカクラが提案していた、講座の開かれていないときに、理事と会員とで講師の著書を読む研究会の開催、あるいは土田が提案していた、講義が終わったあとにもう一度聴講者に集まってもらって、講義の批評や次の講義についての打合せや準備を全員にはかることなど自由大学の改革については、具体化されることはなかった(26)。

また、横田憲治は、政治研究会下伊那支部の羽生三七と連絡をとり、自由大学への協力を要請したと思われ(27)、1月24日付の土田杏村の書簡には「羽生君等の一派が陰から後援してくれるさうですが、これも結構なことでした」とある。土田は、そのあとをつづけて、「自由大学は最も自由な教育機関のつもりですが、社会主義者は由来教育と宣伝との区別をおかぬ様ですから、いろいろと誤解を生じて来ます。併し私個人としては羽生君等の立場と大した相違を持って居ないつもりです。社会主義者が自由大学の会員となり、其等の会員の発意によって社会主義の講義を聞くこと、また大いに歓迎するところです。大体、これまでいってくれた講師が、文化主義などゝは没交渉な諸君許りで、関西労働運動の指導者なのですが、諒解せられなかったことゝ思ひます。何にせよ教育を他動的のものと考へられちゃあたまりません。あらゆる多元を包容しつゝ今後は発達させて下さい」と書き(横田憲治宛土田杏村の手紙、1925年1月24日、山野編 1973:37)、自由大学が社会主義者をも含めたかたちで学習運動を進めていくことに柔軟な姿勢を示していたことが知られる。

しかし、『政治と青年』第15号(1925年2月10日)は、「自由大学とプロカルト」という一文で、これまでの好意的な論調とは逆に、土田杏村や横田憲治の考える自由大学の理念を徹底的に批判している。

「教育の独占に対し吾等の大学を持つと云ふモットーに少なからず吾等が賛意を表した自由大学がその意気込に引きかえて張り合ひ抜けがした。

教育の独占とは吾々が大学へ行かれないと云ふ独占だけではない。資本家階級、特権階級者が政治上の支配者たると同時に教育上に於ても支配者である。従つてその教育内容は彼等のための哲学と科学を持つに至るのに対し、吾々のための教育、それは吾々のための哲学と科学をばプロカルトと称すべきであらう。そうした教育精神のもとに設けられた機関が自由大学でなければならぬ。

主旨がプロカルトであると主張した限り、吾等の精神は資本主義的でも無く社会主義的でも無いとは何う云ふ心底か測られぬ。

検挙事件当時に急しくパンフレットを出して、白々しい寝返りを打つた様な行為はたてえ他人でも青年同志なら浅まし過ぎる。

中央から講師が来て、日本の哲学の主流は目下此处だ、文芸思潮は此ういふものが流行る、と云ふ様なことはかすつばな物知りを作り出すより外に無い。

そうした自由大学が次第に人気が無くなるのは無理も無い。主催者は、下伊那の青年は軽薄だから自由大学様な地味な仕事は解らないと云ふ様だが、此う云ふ物の云ひ方が軽薄だからジユウ大学も人気が無いのだ。

自由大学の中心人物土田杏村氏は新しい教育制度の法文科大学だと云ふが制度だけあつて精神が無い。プロカルトとは形と同時に精神を第一とする。

抽象的な「教育」という精神は与へられぬ。而も自由大学はプロレットカルトだと主張する限り、プロレタリアの哲学と科学を持つ教育機関でなければならぬ筈だ。

楽しみに学問をして見るのなら問題外だ。それなら「ご」打ちが仲間同志集つて「ご」を打つのと変りがない。吾々のための生きた教育機関であつて見れば、も少し生活に即する筈である。働いている人の糧になるわけである。自由大学の会員は何れも世を離れた様に独善的なのは何故なのだらう。

けだし此处に自由大学の欠点が潜んである。最初の主張が今でもその主張だつたら主催者と会員

諸君にもう一度考へてもらいたい。(理)」

この評論を執筆したのは1924年の郡青委員長であった北原理一である。下伊那国民精神作興会などの地域反動層の圧迫に抗して郡青の自主と独立を守り、郡青に進歩的青年を擁護する姿勢を保ち続けさせた北原理一から見れば、自由大学パンフレット『伊那自由大学とは何か』や25年1月8日の猪坂直一の講演に対して、プロレットカルトを放棄したものと批判せざるをえなかったといえる（佐々木 1978：183）。

1925年は自由青年連盟が結社禁止になったあと結成された政治研究会下伊那支部が、軍事教練反対運動を軸に激しい社会運動を展開し、また、北原亀二が下伊那郡青年会の委員長となり、LYL検挙事件で打ちひしがれていた郡青執行部が、保守的村青の脱退、下伊那国民精神作興会の発会、下伊那郡連合青年会の組織化という一連の保守攻勢の動きの中でようやく立ち直って尖鋭化してゆき、青年の社会思潮が左と右に明確化していった時期であった。左は無産青年としての意識を深め、右は青年会の修養団体の名の下に国家主義に投じ、青年訓練所支持にまわって動いていった（長野県下伊那郡青年団史編纂委員会編 1960：107）。このように左右の思想対立が深まる中で自由大学は、社会主義青年運動の側から批判を受けながらも、その一部からは支援を受けつつ 学習運動を進めていく方針をとったのである。

伊那自由大学の第2期第4回講座は、同志社大学教授波多野鼎の「社会思想史」で、3月15日から5日間、天竜倶楽部で行われた。聴講者は24名であった。

波多野は講義に先立ち、「社会思想史略年表」と「講義目次」を送っているが、2月21日付の書簡の中で、講義についての要望を次のように伝えている（横田憲治宛波多野鼎の手紙、1925年2月21日、山野編 1973：40-41）。

「この講座は、五日間で終わってしまわねばならぬものですか、それとも来年度あたりに続講が、許さるゝものですか。若し前者だとすれば、全体の行程を簡単にして、ボルシェビズム、ギルドソシアリズム、理想派社会主義等にまで及ばねばなりません。私は今年限りで終るのではないと思ってゐるので、各思想についてやゝ詳細にやる計画を立てたので、右（注、社会思想史年表－引用者）のやうになった次第です。

成る可く僕の希望に添ふやうにして下さい。全体を端折ったのでは何の役にも立ちませんから。」

波多野の講義内容は、「講義目次」が散逸しているためわからないが、「社会思想史略年表」にはアダム・スミス、マルサス、オーエン、フーリエ、サン・シモン、プルードン、マルクス、カーライル、エンゲルス、J.S.ミル、ラスキン、ラッサール、ベルンシュタインらの名前が記されている。25年10月の出講を依頼されたときの手紙には、「『社会思想史』の講義を途中で切ってしまうのは寝覚めが悪いから、何とか都合して、せめてマルクス主義の解説だけでも終りたいと願って居ます」（横田憲治宛波多野鼎の手紙、1925年7月20日、山野編 1973：50）とあり、アダム・スミスの自由主義からオーエンの空想的社会主義あたりまでを取り上げたものと思われる。

波多野は、飯田に出講したときのことを、「大正十二年飯田で開講されたときのこと、広いお寺の一室で講義したと思うが、聴講の青年諸君が、米と味噌とを持参して、深い雪道を踏み越えて集ってきた人達であるとの話を聞いて、こちらも身の引きしめる思がした。同志社大学の学生たちに講義するような態度では相すまぬ、と思い、かえってあがり気味の講義に終始した。聴講者の真剣な態度に、若い私は全く押され気味だつたのである」と回想している（波多野 1968：13-14）。

この波多野の講座は、『政治と青年』の第15号に自由大学批判の論評が掲載されたにもかかわらず、第17号（1925年3月1日）に今中次麿「政治学（国家論）」、新明正道「社会学」とともに広告が掲載されていた。羽生三七も波多野の講義を聴講している（波多野 1968：14）。また、千代村青年会は、楯操が自由大学の理事に選出されたこともあり、この講座以降、村青会員を受講させている（清水米

男編 1934 : 100)。

波多野鼎は、飯田での講義を終えると、その足で上田に向かい、3月21日から25日まで上田自由大学で「社会思想史」を講義しているが、横田に宛てて次のような礼状を書き送っている（横田憲治宛波多野鼎の葉書、1925年3月27日、山野編 1973 : 45）。

「御地滞在中は色々御厄介になりました。上田でも若い人たちの気分は飯田と大差ないと思ひます。たゞ老人達が大分居るので一種の空気を作って居るだけです。十分提携して行けると思ひました。講座の系統計画二三日うちにまとめて御送りしませう。

自由大学諸兄の御自愛を祈ります。」

波多野の講義のあと、3月26日から今中次磨の「政治学」の講座が予定されていたが、講師の都合で中止となった（『自由大学雑誌』第1巻第4号、1925年4月）。そこで横田憲治は急遽、新明正道に出講を依頼したが、これも都合がつかず、結局、波多野の講座をもって第2期の講座を終了した<sup>(28)</sup>。

なお、3月下旬の講座が決まらない中、横田憲治は、平沢桂二とともに農業経営を合理的にするための研究をする「農村研究会」の設立準備を進め、25年3月に設立している<sup>(29)</sup>。

## (2) 第3期以降の伊那自由大学

横田憲治は、1925年6月、『信濃時事新聞』学芸欄に「教育とその運動」という論文を3回にわたって掲載している（山野編 1973 : 133-136）。

この論文では、教育の目的は、「我々が各々人間として自分より理想的に生かすために自分以外の何物からも絶対に支配されることなく一步一步人格の自律を達して行く」ことであるとし、「教育の基礎にも絶体的の自律がなければならぬ」から、「教育の内容についての自己教育があるばかりでなく亦教育の組織や制度も本来自律的のそれでなければならぬ」と、自己教育の原理を述べている。そのためには「民衆自身よって組織せられ支持せられる最も民衆的な教育設備でなければならぬ」、言い換えれば「労働しつつ終生学ぶことの出来る教育設備」でなければならないとし、その教育設備が「自由大学」であるとしている。そして、民衆自身による新たな教育機関による「教育の回復方法」について、その「教育形式は純粹にプロレタリア的であらねばならないであらうか」と問い、次のように述べている。

「今日教権はブルジョア国家の手中にあるが故に、其の国家の存立を危くするが如き純粹のプロレタリア的教育の成立は、結局理想的社会ならばとにかく今の社会に於ては全く不可能である。故にプロレタリア教育は、革命前期に於ては半ブルジョア<sup>ママ</sup>的であるより仕方がない。

然らば革命後期に於ては如何、此の時政権はすでにプロレタリ<sup>ママ</sup>の手中にあるが故に、従って教育も純粹にプロレタリア的のそれであると考へられる然し事實は全く予想に反する。現に労農ロシアを見れば明白であろう彼等はすでに政治革命<sup>ママ</sup>は達成したが、実際の施策政策を見れば其の多くは反ブルジョア的である。

併し教育がAよりAをうむことではなくてAよりA+Bをうみ出す一の創造的過程である以上、教育方法がたとへ半ブルジョア的であり亦教育に従う者がブルジョア的教育の中に育ち、ブルジョア的教育の弊害から絶縁とうないものであるとしても其処より自らプロレタリア的教育への要求は生れ出る唯たのむ所は、プロレタリア的教育の要求にもゆる少数民衆の創意如何である。

かくして私はプロレタリア教育は現制度の下に於ては許される限りの半ブルジョア的のそれである所詮は他の共產主義的断体<sup>ママ</sup>の如く現代資本主義社会に対する寄生的存在であるとしても、それに就て何等の耻辱をも感じない。唯其の組織は教権を放れた自由なる民衆自身による民衆自身のために、民衆の中に建設したるものであることである。此の如き小集団の複合的社会的拡充はやがて社会改造の過程に何等かの作用をなしうであらう。」

この横田の論文は、『政治と青年』が自由大学批判を掲載したことに対して、あらためて伊那自由大学の立場を明らかにしたものであった。横田は、参考文献を明示していないが、「自由大学に就て」（『信濃自由大学の趣旨及内容』1923年）や「プロレタリア文化及びプロレットカルトの問題」（『文化』第5巻第4号・第5号、1923年4月・5月）など土田杏村の諸論文を読み込んだうえで、書いていることが知られる。長島伸一は、横田の「半ブルジョア的」プロレタリア教育という見解は、土田が『文化』に掲載した「プロレタリア文化及びプロレットカルトの問題」で新たに確立した見解で、土田のプロレットカルト論が当初は、ポールのそれとの区別が曖昧である点が含まれていたため、それを明確にするために書かれた論稿であることを指摘している（長島 2022：191-193）。

横田の論文を読んだ林源は、横田に宛てた手紙の中でも次のように書いている（横田憲治宛林源の手紙、1925年7月13日、山野編 1973：48-49）。

「信濃時事に発表して呉れた『教育とその運動』うれしく読みました。

やっぱり、あゝしたものを出来るだけ世間に発表するのが本当だと思ひます。

僕達のやうな年少な輩と違っての人生を掴んだ確さと云ったやうなものを感じて、自分の事のやうに、無性にうれしく思ひました。」

また、信濃時事新聞の主筆池田愛泥が『南信新聞』（1925年6月10日）に「伊那自由大学」という論説を執筆し、自由大学の擁護を説いている（清水 2008：10-12）。

池田は先ず、「伊那自由大学の存在に対して、左傾せる青年団体はこれを異端視し動もすれば迫害的態度に出づるやの憾み多く、一方右傾青年と民衆とは、共產主義的色彩を帯びる教養機関かの如く誤解し、白眼にてこれを視る傾向がある」と、左傾と右傾の両派から抑圧され、その「存在性を希薄ならしめ」られていることを指摘する。そして国民精神作興会と自由大学とを対照してみると、その有意義性には「雲泥の差」があり、「後者の存亡如何んを以て重大なる問題となし識者の省察を促すと同時に或は経済的に或は精神的援助を乞わんと欲する者である」と、自由大学への支援を説いている。自由大学の「趣意とする所は、氷地に花をさかせるにも似たる、現代の形式的伝統教育を排し、化石せる智識の注入主義を否定して、新鮮にして生氣ある弾力性ある教育を肯定し、索漠たる現代教育界のオアシスたらしむべく人間としての完成に努力する機関である」とし、「左傾青年諸君が、自由大学に政治経済科学宗教哲学文芸を専攻することに依って、階級意識を喪失し、マルキシズムを放棄し或はレーニズムに疑義を有つなからんかを懸念し不安を覚えての結果、伊那自由大学を迫害するとせば、寧ろ嘲笑すべき愚策である」と述べて、社会主義青年運動の指導者が自由大学を迫害することの愚を主張し、自由大学を擁護している。

理事の中塚稲美は、「自由大学の発展策」として2つあげ、1つは「自由大学の本体を常識的に新聞を利用して宣伝すること」で、「自由青年連盟とは立場を異にすること、即ち単なる学術研究の大学 文化科学の仲介大学の出張所であることを両新聞（特に）に書いてほしい、この事は新聞に書いた位ではだめだといつてゐてはだめだと思ふ」と、社会主義青年運動とは一線を画していることを新聞で宣伝することを説き、もう1つは、「現在の中学校長（中学、女学、農、商、実女）小学校長の有力者に説いて先生の聴講に努力すること、郡内有力者の賛同を得ること」を提言して、横田憲治に手紙で書き送っている（横田憲治宛中塚稲美の手紙、1925年1月24日、小林編 1926：91-92）。

中塚の提言は、自由大学を純粹に大学の学問を学ぶ場としてとらえ、地域の有力者にも働きかけて、保守的青年層や教員を聴講者に獲得しようとするものであった。ただ、それは社会主義的青年をも包含していこうとする横田の意向とは異なっていたといえる。

この間、25年9月20日には、自由大学協会の幹事会が別所温泉花屋ホテルで開催されたが、このときは伊那自由大学から吉沢敏二が出席している（『自由大学雑誌』第1巻第9号、1925年9月）。

横田憲治は、第3期の講座開講を前に、信濃時事に「自由大学季節が来た」と題する一文を掲載し

て、自由大学への聴講を呼びかけるとともに、文部省が進めようとしている成人教育講座を批判し自由大学の立場を明らかにしている。横田はまず「愈々自由大学の季節が来た。各自由大学は夫々新学期の準備にとりかゝつてゐやう。我が伊那自由大学も十一月七日より此学期第一回の講座をひらかうとしてゐる」と、自由大学の季節が来たことを伝えたくて、私たちが自由大学を創めて以来ここに三年、経済的困難は依然として深刻さを加へつつある」と経済的困難に直面していることを明らかにしている。文部省は35万円の教育費を計上して全国に成人教育機関を經營しようとしているが、それは「我々の最も重視する民衆の成人教育が全く御用本位のものとなつてしまふ」と批判し、「成人教育を、文部省や内務省やの役人の手に渡してはならない」と主張し、われわれ自由大学の運動は「財力が乏しい」が、「唯たのむところは、少数民衆の発意する教育的要求である」と述べて、民衆の教育要求をもとに民衆の成人教育を進めていくことを訴えたものであった（『信濃時事新聞』1925年11月5日）。なお、横田の文章には、土田杏村が『自由大学雑誌』第1巻第2号（1925年2月）に掲載した「自由大学の危機」から借用している部分が少なくない。

1925年秋からの第3期第1回講座は、新明正道の「社会学（社会進化論）」で、11月7日より5日間、飯田実科高等女学校で行われた。聴講者は22名であった。

前回の講座から7か月が経っていたためか、『南信新聞』（1925年11月5日）は「復活した自由大学」の見出しを掲げ、本文では「文化の中央集権は地方人にとって殆ど教養の機会を与へて居ない斯うした事が強く峡谷の若人達の頭脳を刺戟して横田、須山其他の青年有志に依り自由大学が創説されて三ヶ年、此の間種々なる蹉跌を生じて開講を躊躇してゐたが愈々此の程復活して十一月七日から五日間実科高女校舎で同志社大学教授新明正道氏を招聘『社会進化論』を開講」する運びとなつたとし、「伊那自由大学も組織当事者の言つてゐる如く少数の会員である事が遺憾だがその方法に於て自学的であり、その組織に於て自治的の点は全国的最も進歩した教育の本質に合致した機関であるプライドを完全に表現して臆て茲から郡全体に亘る普遍的教育が期せらるゝ事と思はれる」と、自由大学に期待を込めて紹介している。

新明は、11月1日から5日間、上田自由大学で「社会学（概論）」を講義し、その足で飯田に来ている。講義内容について、横田に宛てた手紙の中で、講義の題は「社会進化論という題でも宜敷いです」とし、「波多野君に先達あつてきた所では、何か社会の発展について歴史哲学的な話をといふやうな意味でした、『権力と社会』で述べたやうなことが根幹と成る訳です、（中略）所謂共同社会と集合社会の議論なども多少これに関連をもちます」と書いている（横田憲治宛新明正道の手紙、1925年8月22日、山野編 1973：53）。須山賢逸が持っていた講義プリントの写しによれば、講義は「社会の観念」をテーマに行われ、「（一）社会の考察の初まり」「（二）社会の起源」「（三）一般的社会概念」「（四）自然的社会概念」「（五）文化的社会概念」「（六）国家と社会」「（七）経済と社会」「（八）結論」の順に進められた。須山は、結論を要約して、「要するに社会の 社会学的見解は、自然的社会を自然的存在と見るものも、社会の全体の文化全部とみるものも両者共誤りであつて社会を 人間の内的結合、或は文化の形式的結合、或は精神的結合など、見るのが正しき社会の見解である。即ち之を一言にして云へば、高田博士の『望まれたる共存』又は、マクイバーの『望まれたる関係』等と云ふ言葉が適切である」と云ふのである様です」と記している。そして新明の講義の感想を「今回の講座は昨年との関係を持ってゐて大へんよい講義でした」と記している（佐々木忠綱宛須山賢逸の手紙、1925年11月15日）。

ところで、新明は、横田に宛てたさきの手紙の中で、横田が『クラルテ』読んだことに対して、「汗顔の至です。勧めらるゝまゝに好い氣になつて書きはしましたが、面羞ゆい仕事です、素人のやることゝして見直して貰へたら幸甚です」と書いている（横田憲治宛新明正道の手紙、1925年8月22日、山野編 1973：53）。『クラルテ』は、住谷悦治がアンリ・バルビュスのクラルテ運動を京都で立ち上

げようと1925年6月に発行された文芸雑誌で、新明は、創刊号に「称名寺の住職」という歴史的エッセイを、第2号には「砂糖と白楊」という創作を書いている(30)。

第3期第2回講座は、谷川徹三の「哲学史」で、12月1日から5日間、飯田小学校で行われた。聴講者は19名であった。

講義項目は、「カント以後現代に至る迄」の哲学史で、「一、理想主義哲学の発展 フィヒテ、シェリング 二、理想主義哲学の完成 ヘーゲル、ヘーゲルの反対者 ショペンハウエル、ヘルバルト 三、理想主義哲学の崩壊 唯物論、唯物論の反対者、ロッツエ、ソエヒネル、ハルトマン 四、実証論 コント、ミル、スペンサー 五、理想主義哲学の復活 新カント派、プラグマティズム、新実在論、生の哲学」となっていた(『南信新聞』1925年12月5日)。

講師と聴講者は、講義のときだけでなく、講義後も講師の宿泊先を訪ねて質疑応答を行ったり、さまざまな話をしたりする時間を過ごすことは、聴講者にとっても有益で貴重な時間であり経験であった。谷川が聴講者の佐々木忠綱に宛てた葉書が残されている。そこには、次のように書かれていた(佐々木忠綱宛谷川徹三の葉書、1925年12月9日、青木・上條 1983: 186)。

「宿の方へ遊びにおいでになるのを心待ちしていましたが、気分が悪いとかで早く帰られたのは残念でした。どうかお大事になさい。私は明日早朝立ちます。ではまた。十二月九日夜 谷川生」  
宿泊先で聴講者と話し合う時間をもつことは講師にとってもうれしい時間であり経験であった。講師の谷川は、それを「心待ち」にしていたことが知られる。このことは伊那自由大学だけでなく、上田自由大学でも共通することであった。自由大学では、聴講者と講師とは学問への情熱によって結ばれ、人間的な交流が築かれていたのである(31)。

谷川は、横田に次のような礼状を認めている(横田憲治宛谷川徹三の手紙、1925年12月19日、山野編 1973: 61)。

「滞在中はいろいろ御厄介になりました。有難くお礼申し上げます。あれから京都へ帰りますとすぐ祖父死去の知らせを受取り急いで国へ帰りましたのでその後も取りまぎれ失礼いたし居りました。

須山、平沢二氏その他みなさんへもよろしくお伝へ下さい。」

第3期第3回講座は、タカクラ・テルの「ダンテ研究(続講)」で、1926年2月3日から4日間、飯田小学校で行われた。聴講者は15名と少なかった。

このタカクラの講義に先立ち、1925年の10月頃、須山賢逸がタカクラを訪ねてきたとき、古典文学ではなくロシア文学をやってもらいたいとの要望をしていたことが知られる。横田憲治に宛てたタカクラの手紙に次のようにある(横田憲治宛高倉輝の手紙、年月日不詳、山野編 1973: 60) (32)。

「所で私の講義ですが先日須山君来訪の節古典文学をやめてロシア文学でもやって貰ひたい、委員の希望だからとの事でしたが何しろもう今年は余日もありませんし順備をする閑も有りませんから今年だけ休まして頂いて来年十二月から準備が出来たら講義をさして頂く事にしたいと思ひます。私の代りに誰か講師が要るわけですが、その件猪坂君ともよく相談して見ますが、そちらの御希望をお返答下されば便宜です。」

しかし実際は、他の講師の都合がつかず、タカクラがダンテ研究の続講をすることになった。そのあとのタカクラの手紙には、次のように書かれている(横田憲治宛高倉輝の葉書、1925年11月18日、山野編 1973: 60)。

「御手紙拝見いたしました。先日の須山君の意見ではダンテを他の題目に代へて貰ひたいと言ふ委員の意見だからと言ふのでそれでは一月には間に逢はぬからと思ひましたがダンテの続講なら一月に参れます。」

タカクラは、当初、ロシア文学では準備ができないと断っているが、上田自由大学では、22年12

月の講義ではゴーゴリの生涯と作品を講義し、23年12月と24年12月の講義では「ドストイェフスキイの研究」を講義している。したがって、ロシア文学の講義をすることはできたはずである。それにもかかわらずロシア文学の講義を引き受けなかったのは、米山光儀も指摘しているように、ダンテの講義が途中であったことが大きい（米山 1986：51）。自由大学の講義は、「従来の夏期講習等に於ける如く断片短期的の研究となる事無く統一連続的研究に努め」（「信濃自由大学趣意書」）ることを原則としており、タカクラは途中で講義を放棄することを良しとしなかったのである。

ただ聴講者の側から講師に講義内容について変更を要望した事例は他にはなく注目すべき事例といえる。

このタカクラの講義は楯操の筆記ノートによれば、「<sup>ママ</sup>V章 流竄時代及び其死」<sup>ママ</sup>「6 "饗宴""俗語論""帝政論""水地論"」の2章分で、「流竄時代及び其死」の章では、「貧困の風に吹きまわられて、彼の港より此方の港へと流浪する舟の如くであったと自ら云へる如く之から最も困窮の時が始まるのである。而し此ダンテの貧困流浪の旅と、ベアトリチエに対する恋とが無かったら、彼の崇高などかの神曲は絶対に生れなかったであらう」と述べ、「転々流浪の旅」を続けたそれぞれの地でのダンテの様子やそれにまつわる「神曲」を紹介している。たとえば、ハインリッヒ7世は1312年にローマに入ったが反対党に大半を占領され、「流血の惨を極め」たため、ローマを去り、ブオンコンヴェントで死亡する。「ダンテは天獄篇30曲137に記して居る。斯くハインリッヒ来り平和と自由とを得られし同時にフィレンツェに帰還し得るとの思ひも此ハインリッヒの失脚に依って愛せるフィレンツェには永久に帰り得なかった」と。そして「絶世の崇高、世界文化上光彩陸離たる神曲、饗宴、俗語論、帝政論、水地論の大作を大なる努力もて貧困流浪の中に於て著した」ことを説明している。流浪の末、ダンテは56才で死んだが、「死と云ふ問題」について、「死もよき水夫が港に近づく様に、帆を下し、穏かに悠然として入港する様に、吾等も吾等が活動の帆を下し、誠心誠意神に帰るべきである。（中略）そっと地上に落ちる如く吾等の□神も今迄宿らん肉体からそっと落ちて了ふべきである、と。／此生前の言を以ってダンテの死に対する考を知る事が出来る。／又天獄篇14、25-27より "死ねば天上に生れる事が分って居るのに、而かも尚地上に死ぬを悲しむ者は、永遠の雨の情新さ（死と云ふ）を此処（死）に含んで居る" 以ってダンテの覚悟は十分□□できる。斯して其遺骸は鉛と胡桃と月桂樹の葉と共に石棺にて覆はれフランシス泳の寺院の下に葬られた」と、タカクラは語っている。

また、「"饗宴""俗語論""帝政論""水地論"」の章では、「ダンテの著作中新生以外は皆、ダンテ流竄時代に書かれしもの」と述べたうえで、それぞれの著作について解説を加えている。たとえば「饗宴」について、「ソクラテスの意味に於ては其食卓は智識の食卓であって、各個人参、集って智識を求める事から饗宴である。ギリシヤ語の"智識"は食卓に座するである（?）。ダンテの意味に於ても斯る意味である」と述べ、そのあと文学と言語の問題にふれ、「ラテン語に対して伊太利俗語の意味及価値を説く。之まで凡ゆる文学はラテン語で書かれた。然し唯々ラテン語で書かれなかった唯一のものがある それはアシジの聖フランシスの書きし幾多の詩の中に特に有名な"太陽頌歌"」で、「ダンテの意見に依れば伊太利俗語はラテンに劣るものでな」というのは「卓見である」とし、「神曲」も伊太利俗語で書かれたことを指摘し、「多少不備の点あれども、ダンテの偉大を語るものであり、如何に教養の高かりしかを彷彿する事が出来る」と評価している。また、「俗語論」は「饗宴に書かれし俗語対ラテン語の関係を詳しく研究」したもので、伊太利俗語には14の方言があり、「果して孰れを標準語にとすべきかを論じ、伊太利の詩に就て論じて居る」とし、ラテン語で書かれているが、「言語学から見て偉大にして、真に科学的に言語学を研究せる最初のものである」と評価している（楯操筆記ノート「高倉輝 文学論（ダンテ研究）」）。のちにタカクラは文学と言語の問題を検討していくことになるが、その暗示を与える講義であった。

このタカクラの講義を聴いた平沢桂二は、当時東京女子大学に在学していた妹の多世に、次のよう

な手紙を送っている（平沢多世宛平沢桂二の手紙、1926年2月11日、福元 1978：60）<sup>(33)</sup>。

「高倉さんの講義はダンテの研究です。

力のこもったいい講義です。

神曲をよみたいと思ひます 東京へ出た折に古本で見付けてもらひたいと思ひます、決して急ぐことはないが、もう絶版になつて居るが山川半三郎（注、丙三郎の誤り－引用者）氏の訳したものがいいさうでなす、然しこれは多分見つからないでせうから中山昌樹氏訳のものでいいと思ひます、三冊一緒に買ってもいいと思ひます文芸作品として古今東西を絶した人類の有する最大のものださうです。」

この手紙からはタカクラの講義が「神曲」を直接読みたくなるような「力のこもった」講義であったことがわかる。

次いで2月下旬には、西村真次の特別講座が組まれた。早稲田大学教授西村真次の「人類学」は、2月25日より4日間、飯田小学校で行われた。

『南信新聞』（1926年2月20日、清水 2008：13）は、「人類学の講座を開講する 不断の努力の自由大学 斯学の権威を聘して」の見出しのもと、西村真次の人類学の講座を開くことについて、「興味の深い自然科学であるだけに今度は教育家の多数の聴講者があるばかりでなく篤学な頭脳のよい青年連に参聴希望者が多いから定めし盛会のことと予想される」と書いていたが、聴講料も2円であったにもかかわらず、聴講者は16名と少なかった。

西村の講義内容は知られていない。西村の講義を聴いた伊賀良村の木下栄治は「西村真次氏の『人類学』は特に感銘深かった」という感想を残しているが、具体的にどんな内容が感銘深かったのかはわからない（木下 1982：6）。福元多世は、西村にまつわる次のようなエピソードを残している（福元 1978：54）。

「後年私が早稲田の史学科に聴講生としての籍を置いていた時、西村真次先生のご指導で赤羽の貝塚を調査に行った折、野生の桜草の咲く荒川堤にそって帰る途すがら出身地を問われて飯田とお答えしましたら『私も飯田へゆきましたよ。自由大学というのに招かれてね』ということで、兄たちの話がでました。『横田君はいい君だ、実にいい君だ』と言われたことを義兄（注、横田憲治－引用者）に話した処『あの先生とはお礼のことでわたり合ったかのだが』と苦笑し乍ら話してくれました。これは義兄の誠実な人柄が伝わって、お礼を値切られたことの後味が案外すかつとしていたことによるのではないのでしょうか。」

西村真次は、自由大学の講義を終えたあと、3月1日、河野村青年会の講演会に招かれ、生産組合の講堂で古代家族制度について約2時間話をしている（「胡桃澤盛日記」刊行会編 2012：31）。

第3期第4回講座は、第八高等学校教授佐竹哲雄の「哲学概論」で、3月11日から5日間、飯田小学校で行われた。聴講者は17名であった。

佐竹の講義は、テキストのヴィンデルバント原著・宮本和吉訳『哲学概論』（岩波書店、1921年改訂版）にもとづいて「第一章実在問題」の36ページまでの解説が行われたと思われる<sup>(34)</sup>。ただし、筆記ノートや聴講者の回想などは残されていない。

第4期講座の準備は25年の暮れから始まり、横田憲治は、具体的な講師の人選として、谷川徹三、高橋亀吉、佐竹哲雄、河野密らの名前を挙げて、土田杏村に相談していたことが知られ、土田の書簡には「講座のこと、御計画のこと皆な賛成です。ただ学生を講師として得ることは、今年は例の京大事件のため一層困難の様です。これから文部省や大学が講師派遣についてやかましい様になるので、講師を得るに苦しむ様になります。／高橋亀吉氏、谷川徹三氏、佐竹哲雄氏は既に承諾してくれましたか。河野君は熱心ですから屹度承諾してくれると思ひます。直接にお手紙出してくても大丈夫です。新明君などから、前々依頼があった筈ですから」とある（横田憲治宛土田杏村の手紙、1926年9

月21日、山野編 1973：62)。

この土田の手紙が来た2日後、9月23日に横田憲治の家が火災にあい、家屋を全焼させている(筆者宛横田千世の手紙、1972年10月16日)。福元多世は、火災の状況を次のように記している(福元 1978：54-55) (35)。

「本宅もろとも灰ににってしまったのでした。日常のものはもとより、土蔵に入り切らなかった書画骨董品も多く失いましたが、裏二階の書斎にあった義兄が精選して集めた書籍全部、克明に書きつづけた日記、歌稿(国民文学に投稿していました)は何一つ取り出せなかったのが一番惜しめます。(中略)西村真次、佐竹哲雄両講師の日程その他打合せが全然見えていないのはそのためかもしれません。」

1926年秋からの第4期第1回講座は、高橋亀吉の「日本資本主義経済の研究」から始まり、特別講座として開講した。11月20日から2日間、天竜倶楽部で行われ、聴講者は26名であった。

講師の高橋は、24年4月から雑誌『東洋経済新報』の編集長を務めていたが、26年6月に東洋経済新報社を退社している。

高橋の講義内容は知られていないが、この高橋の講義に対して千代村青年会は補助金を支給して督励し、嶋岡己勝、楯操、大平重夫、清水庄一、渡邊信一が聴講している(清水編 1934：110)。

第2回講座は、谷川徹三の「哲学史(現代哲学)」で、1927年1月12日から3日間、飯田小学校で行われた。

谷川は、講義日程について、「仕事が片づかない」ことから27年の1月か2月に延期してほしい旨の手紙を出し、「実は二月に前橋へ参る(36)ことになってあるのですがその頃ではとうでせうか。紀元節前後です。勿論一月十日過ぎでもいいのです」と書き送っている(横田憲治宛谷川徹三の葉書、1926年10月21日、山野編 1973：63)。この連絡に対して横田からは26年1月10日前後の要望をだしたと思われ、谷川は「御葉書拝見いたしきした。承知いたしました。十日前後ならば結構です」と返事をしている。この葉書には「あなたのお家が火災にあはれたといふのはちっとも存じませんでした、どんなだったのですか。まさか全焼なのではないでしょうね。ともかく大へんな御災難でしたね。後れながら御見舞申します」と火事への見舞いも書かれていた(横田憲治宛谷川徹三の手紙、1926年11月19日、山野編 1973：65)。

講義内容は、谷川が横田に宛てた葉書の中に、「講義の大目」として「1. 現代に於ける理想主義哲学及び理想主義的傾向。 2. 実証主義哲学及び実証主義的傾向。附 唯物弁証法批判(これは2. 附です) 3. 『生の哲学』への転向、及び『生の哲学』の意義」と書かれており、この章立てにそって行われたと思われる(横田憲治宛谷川徹三の葉書、1927年1月9日、山野編 1973：67)。理想主義哲学ではカント、ヘーゲル、実証主義哲学ではサン・シモン、コント、ヒューム、生の哲学ではショーペンハウアー、ニーチェ、ディルタイ、ジンメル、ベルグソンなどが採りあげられたと考えられる。

これまで自由大学では地域の産業を考慮して夜間に授業をすることを原則としてきたが、この谷川の講義は「毎日午前九時半より」となっていて(『南信新聞』1927年1月7日・8日)、午前中の講義であった。なぜ午前中にしたのか、その理由は明かでないが、聴講料3円を払い飯田町まで午前の講義を聴きにいく青年は限られていたと考えられ、聴講者は10名と少なかった。

佐々木忠綱は、日記に「本日にて哲学講習終わる。夕方宿に帰りそれより吉野館に至る 谷川先生 外 横田君 平沢君 林君 久保田氏等八人なり 八時宿を出て谷川先生を送る」(1927年1月14日条)と書いており、講義を聴講したほとんどの人が谷川の宿泊していた吉野館に集まり、谷川を駅まで見送ったことが知られる。

第3回講座は、新明正道の「近世日本社会史」で、1927年3月25日から3日間、飯田小学校で行

われた。聴講者は12名であった。

新明は、伊那自由大学への出講を承諾した手紙の中で、「飯田へは特別に親しみがありますので、是非参りたいと思ってゐます。一月か、三月には御引受しませう。今度は少し軟かい話をしたいと考へます。徳川時代の遊郭の社会学的考察といふのでは如何でせうか。硬い方でしたら、ヘーゲル及びヘーゲル以後の社会哲学（マルクス主義への展開を主として）、或ひはもっと漠として晩近社会学の問題としても宜敷いです。何か御希望があったら、今から承知しておいた方がいゝ思ひます」と書いていたが（横田憲治宛新明正道の手紙、1926年10月13日、山野編 1973：63）、最終的には講義日程は3月下旬で、講義内容は『町人階級論』（社会史の一断片として）」ということになった（横田憲治宛新明正道の葉書、1927年2月25日、山野編 1973：67）。

この新明の講義を聴講した平沢（福元）多世は、次のように回想している（福元 1978：55）。

「昭和二年三月二十五日からの講義は追手町学校で開かれました。私も五日間通ったもので、出席者十二名のうちの一人です。『近世日本社会史』となっていますが、副題の「町人階級論」と記したノートがあった筈ですが見当たりません。『今度は少し軟かい話をしたいと考へます。徳川時代の遊郭の社会学的考察といふのでは如何でせうか』（一二九）（注、『伊那自由大学関係書簡』の書簡番号一引用者）とありますが、内容は此の点にも触れていました。こういう取上げ方もあるものかと感心してノートしたかに覚えています。講義の終わったあと主税町の吉野館（いまの「大安」のあたり）へもついてゆきました。その時の空気が何とも和やかだったことが記憶に残っていますが、今度お手紙を読みかえしてみて、なるほど、あれは先生のお人柄から出るかおりのようなものだったのかな、とつくづくと懐しまれます。心残りはありながら兄（注、平沢桂二一引用者）と私は電車の時間の都合で一足お先に失礼いたしました。」

平沢多世は、1925年4月に東京女子大学高等部に入学したが、26年9月に義兄の横田憲治の居宅が全焼すると、感ずるところがあり中途退学して帰郷する。翌年1月から3月までの短期間ではあったが、自分の母校である神稲小学校に補欠代用教員として勤務する。自由大学を聴講したのはそのころになる（大槻 2005：18-19）<sup>(37)</sup>。

この新明正道の講義で第4期の講座は終了したが、飯田町での開講は実質上、これが最後となった。

『南信新聞』（1927年3月17日）は、「伊那自由大学 内部組織を変更 愈々本質的活動期に入る」の見出しで、「伊那自由大学は本月廿五日から五日間大久保天竜クラブで東北大学教授新明正道氏を招き『近世日本社会史』の講座開講の筈に決定したが之れを従来の大学組織に基く最後の講座として其後は根本的内容の組織変更を行って活躍する手順となって居る」と報じている。

こののち伊那自由大学は支部の組織化が図られ、この支部を中心として講座が組まれていくことになる。

#### 4. 伊那自由大学支部の設立

伊那自由大学は、昭和期に入って、千代村支部、竜峡支部、下条村支部の組織化が図られ、この支部を中心として学習運動が進められていった。支部組織化の背景には、飯田町での講座への聴講者が減少していたこと、千代・竜峡・阿南地域の聴講者が比較的多かったことから、この地域で講座を組織した方が聴講者にも便利であり経営的にも聴講者の数が望めることなどがあったと考えられる。支部単位で講座を開講していくことにより、それぞれの地域で青年たちを組織化しつつ、下伊那地域に自由大学運動を改めて広げていくことを意図したものと思われる<sup>(38)</sup>。

千代村支部は、1927年10月22日に発会式が千代小学校で行われ、全会員40名のうち20余名が参加し、支部規約の改定のあと、議案の討論に移り約10項目を可決のうえ趣意書を朗読、最後に理事の選出があり、林源<sup>(39)</sup>、嶋岡己勝、楯操<sup>(40)</sup>の3名が選ばれた（『南信新聞』1927年10月26日、清水編 1934：115-116）。

この千代村支部の中心となった青年たちは、当時、下伊那郡青年会の中でも公然と社会運動に新出した千代村青年会の幹部の青年たちであった。楯操は27年度の会長、嶋岡己勝と清水金吾は郡青代議員、28年度には清水金吾が常任委員長、嶋岡己勝、楯操が教育部委員、林源が社会部委員であった（清水編 1934：281-282）。

1922年9月に自由青年連盟が結成されると、発会式には村青幹部の林国男・小沢年保・楯富晴が参加し、連盟会員として活躍した<sup>(41)</sup>。同年6月には、南信電気株式会社に料金割引交渉をして一定の成果をあげている（清水編 1934：57）。青年会が社会運動に進出することが鮮明になると、村会で問題にされるようになった。23年10月の村会では、在郷軍人会の大平豁郎が補助金問題と絡ませて、青年会報の巻頭言を取りあげて、村当局は青年会を修養団体とみるのか、社会運動団体とみるのかを質問している。この質問は言外に社会運動団体なら補助金を打ち切るという意見をにおわせたものであったが、村当局は「其内容ノ一部ニハ多少考慮ヲ要スルモノアルモ其全体ニ於テ修養団体ト認ムル事ヲ得ル旨」を答えている（大串 1978：103-104；大串 1980b：115）。

1924年3月のLYL検挙事件で自由青年連盟が結社禁止となったあと、その後継団体である政治研究会下伊那支部が11月に結成されると、千代村からは牧田正矩、榊原富男、楯一利、渡邊源逸、嶋岡己勝、楯操ら青年会幹部が参加した（清水編 1934：88）。このころから村当局の青年会への攻撃が強まり、村青は、24年7月に伊賀良村青の補習学校改善に刺激され、村当局に「補習学校改善、専任教師問題」を申し入れたが、25年2月の村会で校長は、「徒ニ生徒ノ希望ノミヲ採用セズ相当考慮シ科目ノ選択及人選ヲナス考ナル旨」を述べ、補習学校の運営は生徒の希望にとらわれないことを言明している（大串 1978：108；大串 1980b：118）。

千代村青は、1925年度には村議改選の年にあたることから2月に地方自治村政問題研究大会を米川公会堂で開催し、また、青年訓練所実施法案が帝国議会に上程されることに反対し、郡青と政研下伊那支部は8月に中央から山本宣治、荒井邦之介らを招いて軍教反対の講演会を開いたが<sup>(42)</sup>、10月には郡青の要請に応じて村での軍事教育反対宣伝週間を設定し各支会で講演を行っている。26年、27年にも青年訓練所反対運動を行い、33年まで青年会の規約に青訓援助をいれることはなかった。他にも28年以降継続して阿南7ヵ村の中心となり恐慌による生活難救済を目的に電灯料値下げ運動を行っている。また、青年たちの中には、27年6月には無産者新聞の読者会が竹下京、清水庄一、森本護、清水米男、柏木栄逸、竹下晴雄らによって組織され、年末には嶋岡己勝、森山充、遠山嵐造、小島一重らが加わり、楯一利、渡邊源逸のように労働農民党の活動に参加する者もいた（清水編 1934：120-121）。

千代村の青年たちにとって学習の機会は、青年会の文庫の図書と自由大学、そして青年会の講演会であった（大串 1980b：119）。その中で、青年会の文庫は、村立図書館に改組され、1924年2月に村会で決議され、県知事の認可を受け、4月に村立千代図書館が千代小学校内に設立された。図書館設立に際して村は、「千代村図書館規則」を制定し、第6条で「館長ハ千代村長トシ館ノ経費及一切ノ事務ヲ総理ス」とされたが、「評議員ハ本館一切ノ事務ヲ評議」するものとされ、図書館の運営は事実上評議員に委ねられた。この評議員の構成や図書館運営の詳細については「千代図書館細則」に定められ、その第3条で評議員は「一、村吏及名誉職中ヨリ 五名／一、青年会役員ヨリ 五名／一、処女会役員中ヨリ四名／一、小学校職員中ヨリ 一名」と規定されたことが注目される。15名の評議員中9名が青年会・処女会関係者で占めることになり、評議員会や役員会が青年会主導で進められ、

図書選定をはじめとした図書館の運営権を事実上青年たちが握ることができたのである。ところが、図書館開館直前に起きたLYL検挙事件により、青年たちの活動に対する規制が強まり、千代図書館の運営に対する干渉も始まる。図書館開館から半年後の24年9月、千栄分教場に分館が設置された。村会では10月に分館設置に伴う規則改正が審議されたが、そこで評議員の選出方法について質問が出され、村側は教員3名を評議員に加えた。村青の代表委員会は、26年3月1日、図書館が「青年会の修養問題と至大なる関係」があることから、その利用方法について協議し、「イ、各支会図書委員を一名選出す。／ロ、委員は毎月廿一日図書館に出頭し図書の交換を為し支会に配本する事」を決定した（清水編 1934：110）<sup>(43)</sup>。ところが、26年3月の村議会では青年たちを評議員から大幅に減員する改定案が出されたため、村青は猛反発し、村長（館長）と交渉して、村長に細則の再検討を約束させ、10月の評議員会には村青役員が出席して各支会の希望図書を購入させた。村青の組織的な行動によって一旦は図書館の運営権を取り戻したかにみえたが、村側もすぐに巻き返しをはかり、27年2月の村会では「図書購入ノ件ニ付昨年評議員会ノ際購入図書ニ付適当ナラザルモノアリ」との批判が出され（「千代村村会議事録」昭和二年二月二十五日・二十六日、大串 1978：111）、28年5月には村長は、従来細則に定めていた評議員の構成を千代図書館規則の中に盛り込み、館長が「本村村民中ヨリ五名 本村小学校職員中ヨリ三名」を委嘱する改正案を村会に提出し、評議員は減員され、村青や処女会が図書館運営に関与する余地をなくした（『千代村立図書館 大正13年～昭和19年』千代支所文書、小黑 2005：240所引）。

このように千代図書館の運営をめぐる村当局と村青との攻防が激しさを増していたさなかの1927年9月に伊那自由大学千代村支部の「趣旨書」が青年会員に配布されたのである。この「趣旨書」は嶋岡己勝が起草したもので、謄写版刷であった（山野編 1973：127-19）。

「趣旨書」は、「物質的な意味」でその日暮らしをくりかえしているだけで「精神的な意味の生活」をまったくもっていず、「人間的な色を全く塗りつぶして牛馬同様な暗澹たる生活」を送っている農村青年の現実認識から出発して、「晴れたる蒼空の下で自らの生活に意義を感じ健康なる百姓として快活に働き得る理想社会を作りあげ」るためには「教育の仕事」が重要である、としている。次いで現在の教育制度における「小学校教育は補習教育は概念的なパンフレットはどれだけ吾々を教育したか 吾々が社会を構成して行く為の人格識見をどれだけ作ったか、経済的関係の批判力をいつ与へたか 吾々は科学の時代に生てみると云ふが果して吾々はどれだけ科学を掴んであるか」と、これまでの教育を批判し、新社会建設のための本格的な科学的理論の習得と理論の主体化を強調して、その「吾々の希求する一つの教育運動」が自由大学運動であるとする。伊那地方でも大正十二年末より伊那自由大学が設立され、「其処では現代日本の新進学者の粋をあつめたと云ってよい講師」が講座を担当し「年数回の講座を飯田で開いて来た」が、「将来社会の黎明を吾々はその貧しき教育の窓から感受した 講座の度毎に吾々は吾々の無智に戦慄し新に展開する視野に驚異の眼を開き何とも知れない腹底の力を受けて帰った 此の四年間の自由大学へ集まる人々を見て如何に教育の力が吾々の人間に影響するかと云ふ事実吾々は思はずにはゐられない」と、自由大学の教育の特質を述べたうえで、次のように宣言した。

「自由大学の斯くの如き特質を吾々が理解すればするだけ深い物足りなさが吾々をおそった それは自由大学がもっと徹底的に普遍化されねばならない事を感じたからである 例へば千代村の青年会員が昼間の労働の傍ら斯の如き自我教育の時間を持たなければ駄目だと云ふような考へ方が吾々の心を動かしたのである（中略） 吾々は此の冬より毎年一ヶ月間の講座を経済学 社会学 生理学 文学等々数ヶ年に亘って計画をたて総合大学的な教育組織を作る、これ以外に自由大学の講師の来伊を機として講演会講習会を開く 又吾々の仕事と最も密接不可離な関係にある補習学校、図書館等の理想的改革に努力する 又一月一回研究会を開いて社会現象の批判解剖を試み自らの啓蒙

に努めよう。この研究会には臆て二三年の後には経済学社会学等専門的な研究を発表する会員の出て来るのを吾々は期待してゐる 或いは又千代村の経済統計などが作られ現実的な生産関係に裨益する事も出来なければならない 斯の如き集団が出来てこそ初めて吾々の正しき生活が指示される事を吾々は信ずる。」

千代村支部は、総合大学的な教育組織を作り、講座の開講だけでなく、研究会を開くこと、また、青年たちの自学自習に必要な図書館の改革にも言及して、本格的な学問的自己教育を模索していたことが知られる（岡本 2021：46）。とくに図書館の改革は、村当局が青年会の関与を排除する動きを強めていたときだけに、自由大学での講座や研究会に必要な図書・資料を希望通りに購入できるようにするためにも喫緊の課題となっていた。「趣旨書」は、地域の変革をめざす主体意識にうらうちされつつ学習こそ変革の「根底的な力」との意識から、学習と実践の統一をめざす志向で書かれており、自由大学運動の文章のなかでも画期的な意義をもつ文章であり、高く評価されなければならないと考える(44)。

この「趣旨書」とともに同じく謄写版刷の『自由大学とは何か』、「伊那自由大学千代村支部規約」も配布された。「支部規約」は全10条からなっているが、その第9条には「本支部の事業は常に青年会と連絡を保ち左記事業ををなす」とあり、事業として、「毎年一回講座開講 講座期間は一ヶ月を予定として夜間を利用す／其他講演会一回、毎月一回研究会、毎年二回支部会報発行」を規定している（山野編 1973：138-139）。千代村支部は千代青年会と組織的に提携して活動を進めて行くことを規約で明確にしたのである。

千代村支部のあと、1928年12月23日には竜江村の定継寺で竜峡支部が設立された。竜江村の吉沢清之らが中心となり、竜江・川路・竜丘の3村の青年たちが集まって設立されたものであり（吉沢 1929：17）、千代村支部と同様に青年会と提携して講座を開講することを「規約」に規定している（『伊那自由大学竜峡支部規約』『伊那自由大学』第1号、1929年）。この発会式には横田憲治も来たという（吉沢清之より聴取、1976年8月17日）。翌年29年1月6日には竜丘村長石寺で年始総会を開いている（吉沢 1929：17）。また、下条村支部は、原巖（岩穂）が中心となり、1929年2月26日に結成準備会が開かれ、3月6日に陽皇公会堂で結成式を行った（『伊那自由大学』第1号、1929年；『南信新聞』1929年3月1日）。

千代村支部の最初の講座は、東北帝国大学助手であった今川尚の「経済学原論」で、1927年11月15日から5日間、米川公会堂で行われた(45)。

今川尚を推薦したのは新明正道で、横田憲治に宛てた手紙の中で、今川を次のように紹介している（横田憲治宛新明正道の手紙、27年9月19日、山野編 1973：68）。

「当人は目下東北大学法文学部経済の助手（昨年度卒業）の経済学士、今川尚君といふ方です。明年度神戸の関西学院の先生となって赴任する筈で目下研究中なのですが、私とは格別よく知り合っており、教養も十分あり、且つ温厚の人で推薦致して申分ないと思ひます。」

今川の講座を聴講した嶋岡潔は、次のような2つの回想を残している。

「各地区にも自由大学支部が有志の手で出来た。当千代地区へもそれらの講師（注、山本宣治、高倉輝、三木清ら－引用者）が学術講演に足を運んでくれたし、分けても東北帝大助教授の今川尚のマルクス資本論入門を夜間一週間に亘る学術講習があり、私達青年に取って基礎的なものを学んだのが感銘が深かった。近村からも遠い道を苦にせず参加して意欲的なものがあつた。」（嶋岡 1981：20）

「第一回講座は、東北帝大教授の今川尚氏に依る、経済学原論を（資本論）十一月十五日～十九日迄、五夜にわたって、米川公会堂で開かれた。

遠く泰阜の稲伏戸、三耕地からも駆けつけ、如何に当時の青年達が知識欲に駆られて居たかが立

証される。」(「千代風土記」編集委員会編 1983:198)

この嶋岡の回想からは、今川の講義内容は、マルクス資本論の基礎的なものを教えたことが知られ、嶋岡は「感銘が深かった」との感想をもったことがわかる。

1928年に入り、1月10日、伊那自由大学会の事務所を下伊那郡鼎村の林源方に移転した。また、このとき「伊那自由大学会規約」を改定している(46)。

2月27日には、千代村会で千代村支部の動向について議論されている。「昭和三年度村会議事録」によれば、次のような質疑がなされている(大串 1978:112)。

「九番林君ハ前年青年等ノ開催セル自由大学ハ思想上適當ノ者ト認ムルヤヲ問フ

議長ハ必ズシモ危険思想ニシテ不可ナル者トハ認メザル旨ヲ応フ 更ニ金田校長ハ講師ニヨリ可不可アリ講師ニヨリ其都度考慮スルノ外ナキ旨ヲ答フ」

自由大学の講座に対して「思想上適當ノ者ト認ムルヤ」という質問に、議長は必ずしも「危険思想」とは認められないと答え、校長は講師によって対応する他はないと答えている。ここには、村当局が千代村支部の「趣旨書」の内容については黙認し、講師の今川尚についても消極的にせよ容認していたことを示している。いずれにせよ、村当局、保守層が自由大学の動向に注意を向けていたことが知られる。

3月には、千代村支部の機関誌『飢餓』が発行された(清水編 1934:129)。嶋岡己勝と楯操が中心となって編集した謄写版刷のものであった。誌名は「知的飢餓心」からとったといわれる(楯 1979:47)。この『飢餓』は発見されていない。

7月1日の午後1時から千代小学校で夏季講演会を開催し、横田憲治、木下幸一、清水金吾の3人が講演をしている(『南信新聞』1928年7月1日)。講演の内容は知られていない。

8月末には事務所で役員会が開かれ、新会員の募集、機関誌『飢餓』の発行、秋季講座について協議し、秋季講座にはタカラ・テルの「文学論」を決めている(『南信新聞』1928年9月2日)。次いで10月25日の第10回委員会では、秋季総会の開催、秋季講座、自由大学会確立普及の件を協議している(『南信新聞』1928年10月29日)。

伊那自由大学会としては飯田町での最後の講座となる佐竹哲雄の「哲学概論」が、28年11月1日から2日間、飯田小学校で行われた。

佐竹は、自由大学への出講を承諾した書簡の中で、講義日程を「十月三十日十一月一日の二日間とするか、或は十一月一日二日とするか、御都合によって定めたいと思ひます」とし、講義は、前回(26年3月)の続きで、テキストの宮本和吉『哲学概論』(岩波書店)の「第一章實在問題(三七頁)」から始めることになる」としたうえで、2日間だと、「先日やったように予め要点字句などの研究が済んでゐれば早く進めることができるやうと思ひます。この前の進度から見ますと、(二)実体だけしか済みさうにありませんが、途中で切つてよければ(三)に入ることができるかもしれません。いづれご配慮の上、ご都合をお知らせ下されば、その上にて万事取り決めましょう」と書いている(横田憲治宛佐竹哲雄の手紙、1928年7月30日、山野編 1973:69)。この佐竹の文面からは、前回の講義のときは聴講者が「予め要点字句などの研究」をしていたことがうかがえる。講義の「梗概抜粋」の謄写版刷を依頼した書簡では、「自由大学の性質として、会員一同が前以って集つて研究することが、或は困難かとも想像されますが、できますならば、事前に御研究を御願し度いと思ひます」と、事前の学習会を要請している(横田憲治宛佐竹哲雄の手紙、1928年10月4日、山野編 1973:70)。

テキストを予習する学習会がもたれ、ゼミナール形式の講座が行われたとすれば、自由大学の中では画期的なこととなるが、それを裏づける史料は発見されておらず、昼間働きながら事前に学習会をもつことはかなり困難であつたと思われる。

佐竹は、林源からの情報をもとに、開催地と「好学の望みある」聴講者への周知について、横田に

次のように伝えている（横田憲治宛佐竹哲雄の手紙、[1928年10月]8日、山野編 1973：73）。

「林さんから承りましたが、会員が飯田町にゐないやうでしたら、却って多数会員の便宜の所を選ばれて開催された方が良法と思ひます。

同志の人を造るといふ意味で、自由大学を世間に知らせる必要があるやうに思はれますが、如何ですか。あまりお祭騒ぎ的な宣伝は、避けねばなりません、好学の望みある人々に、大学の存在を知らせることは、有意義と考へます。」

佐竹は支部の組織化に賛意を示していたことが知られる。

千代村支部が予定していた秋の講座は延期され、12月になって開催された。タカクラ・テルの「日本民族史」で、12月1日から4日間、米川公会堂で行われた(47)。

タカクラの講義は、これまでの「文学論」ではなく、「日本民族史」に変わった。

タカクラは、別所温泉に定住し、常楽寺の離れである友月庵から古平家、そして27年3月には柏屋別荘の主人斎藤房雄の好意で建てられた思温荘に住居を移している。このタカクラの家には自由大学に参加をした青年達や付近の農民がたちが集まった。「一年分の小作料を支払うと、たちまち家族の食料がなくなる。貧農小作人が、当時、わたしを取りまいていた。いやでも、わたしは、農業の問題に新しい目を向けないわけにはいかなかった」と回想している（タカクラ 1981：4）。その中でタカクラは、上田に滞在したことのある大原幽学を知り、農村共同組合こそが農村改造の道であると考えようになり、浦里村の越戸共同経営組合に関わる。そして28年4月には上小農民組合連合会の結成に関わり、農民運動に活動の重点を移していく中で、自由大学の講義内容も「文学論」から上田自由大学では「日本文学研究」、伊那自由大学では「日本民族史」へと変化する。タカクラは、次のように書いている（タカクラ 1973）。

「わたしは、ロシア文学・フランス文学・イタリア文学などの代表的な作者の作品を、具体的に紹介して、文学ぜんたいにたいするみとおしをそれらの勤労者にもってもらおうと思って、始めました。ところが、そうやっていくうちに、それらにたいする会員たちの驚くような熱意に、すっかり圧倒されると同時に、会員たちは別のもつと熱烈な要求をもっていることを、わたし自身がひしひしと感じないわけにはいかなくなりました。」

タカクラは、一段と深刻化する農村不況の中で生活する農民たちの学習要求を汲みとり、それに応えるかたちで自由大学の講義内容を組み替えていったのである。

タカクラの「日本民族史」の講義は、楯操の筆記ノートによれば、次のように始まっている。

「特に古代民族史は一般に等閑に附せられてゐる、普通教育に於ても、大学に於ても研究されてゐない。

日本の学者が日本そのものを研究せずに、西洋の受売をしてゐるからだ。」

タカクラは、当時の大学の学問批判から始めている。そのうえで「日本の言語はいかなるものか（之が亦研究されてゐない）、日本人はいかなる人種であり、古代民族は如何なる生活を行つてゐたか」を講義していく。タカクラは、「言語学上殊に文法（＝単語）が最も正確にその人種による差異を認め得る」とし、「世界の文法には何種ありや、日本には何の文法ありや」を問い、オーストリアの言語学者フリードリヒ・ミスラーの分類を紹介し、世界の言語は77、8種存在していることや、「此言語を分類して五大別し得る、而して此五大別が人種を決定する」と述べて、印度・独逸語族、ウラル・アルタイ語族、印度支那語族、セミチック語族、マレオ・ポルネシヤ語族、この5つの語族に含まれる言語やそれぞれの語族の特徴を説明している。そして、「日本の文字とは何んなものか」と問い、文字について、昔は5つの文字があったものが、<sup>エジプト</sup>埃及起源文字と支那起源文字の2つが現存し、ヨーロッパ語は埃及起源文字に属し、日本語は支那起源文字に属するとする。支那起源文字は「日本及朝鮮に入つて大変化をした」とし、日本は「漢字を変化せしめて仮名を作つた」が、「現在の吾国

漢字は無くともよいが仮名はなければならない。仮名を作って五十音図を作っている。之は古来より日本に存し、日本の文化を知る上に重要。之は誰が作ったものでもない。此五十音図はインドの文典を使って漢字を仮名に書き変へたものである」と述べ、このことは「日本民族の古代生活を知るに非常に重要なものである。如何にして、斯くの如く文法上、言語上、正確にして完全な知識を古代民族は何処から捕みとったか（之は日本民族の研究上重要点なるも未だ研究されず）」と述べている（楯操筆記ノート「インテリゲンチャとは何ぞ 高倉輝 経済学の哲学的基礎 三木清 日本民族史 高倉輝」）。楯の筆記ノートは途中で終わっているが、「日本民族史」の講義はこのようなものであった。

楯は、「日本民族史の中でニッポン語についての説明は民族を考える上で、その役割大きさを知らることができ言語に対する興味をもたされる」と回想している（楯 1978：68）。

1928年は、三・一五事件をはじめとする官憲当局の弾圧の影響と、単一郡青組織の失敗を契機に下伊那郡青年会が解体し（28年5月）、郡青活動をはじめ一切の事業がストップしたが、その中で自由大学だけが講座を開講したことになる（長野県下伊那郡青年団史編纂委員会編 1960：87-89）。

1929年に入ると、法政大学教授の三木清「経済学の哲学的基礎」が2月15日から3日間、竜江村大願寺で行われた。この講座は千代村支部と竜峡支部の合同主催であった。吉沢清之によれば、聴講者は50～60名であったという（吉沢清之より聴取、1976年8月17日）。

三木の講義内容は、楯操の筆記ノートによって知ることができるが、「歴史に就いて」や「弁証法」について講義していることが知られる。「歴史に就いて」の項目では、次のような筆記がみられる。

「マルクスの歴史は現在の歴史の研究である。

資本論は現代の歴史を書いてあるのである。

（経済（資本論）の研究が歴史の研究になってある。）

——存在するものは凡て歴史性を持ってある。

現代経済上の運動法則を研究するのである。資本論の中にて行はれたものは凡ゆる時代に行はれるものではなく現代の運動法則である。

現代をかく歴史として見ることは非常に困難である。之は自らの生活を否定されて居るプロのみに行はれる。

ブルジョアは現在の生活が自らの時、さういふのであって現在を何等の意味に就て永遠化する（動かないとする）に反してプロレタリアは進化すると見る。之は二者を根本的に区別せしめる。」

「弁証法」の項目では、次のような筆記がみられる。

「弁証法の内容

#### 1. 運動の法則である

物を動的に見る見方と何時も結び付いてある。

丙 運動は何時も矛盾を含んである。運動は静止を自らの内に含んである。静止  
甲——乙 してゐては進行することが出来ない。



ツェノン 運動の不可能を例証した。アキレスと亀

従って運動を矛盾を理解せんければならぬ。弁証法は矛盾の論理である。矛盾は運動の活動力である。

矛盾と統一によって運動してゆく。

#### 2. 弁証法は全体として見る事が重要な見方の一つである。

・この場合注意すべきは普遍と特殊との関係である

普遍

##### 1. 個々のものより共通のものを取出して普遍を作り出す場合

戊  
 へ  
 丙⇒丁  
 へ  
 甲⇒乙

之は形式論理に於けるもの、抽象的普遍がある。従って最も抽象的なもの程普遍であることとなる。  
 2. 普遍を具体的に見ることが出来る。  
 最も有機体（人間）  
 全体と部分とが相互に作用する。全体は部分を含む、而して部分に就て何時でも全体が働いてゐる（中略）。

弁証法に於ける普遍は全体と部分とを同時に考えこむ時の普遍である。

・日本経済を（特殊）研究するに当っては世界経済の研究せざれば解らぬ。（全体の一環）

世界の資本主義を見なければならぬと同時に日本の特殊をも見、そして二者の關係に就て始めて理解し得る。」（楯操筆記ノート「インテリゲンチャとは何ぞ 高倉輝 経済学の哲学的基礎 三木清 日本民族史 高倉輝」）。

三木の講義は、ヘーゲルやマルクスの歴史観について、また、唯物弁証法を概説するものであった。

竜丘村の北澤小太郎は、この三木の講義を受講したときのことを、「一九二九年（昭和四）－三木清「経済学の哲学的基礎」（竜峡支部）。三木清の講座は二日間続き、会費が確か一円であったと思う。当時の一円は繭値が一匁目二円五〇銭に暴落した年でもあり、一円あれば飯田町で芸妓がついて宴会のできた金額、である。私はこの講座の受講生の一人として、歴史の観方、ものの考え方の基礎的なものを与えられた気がした」と回想し（北澤 1981a : 268）、また、「自由大学の思い出の中で一番印象に残っている講座は、自由大学竜峡支部で開いたものです」と述べて、次のようにも回想している（北澤 1981b : 21）。

「題名は「経済学の哲学的基礎」会期は三日間、受講料は金壹円、地元の龍江青年会も共催でした。

当時は岩波文庫が一つ星十銭で買えたし、繭が一貫目（三、七五K）二円四〇銭位、仔豚が一匹五〇銭と云う時期でしたから当然一日の会費は相当なものでした。

終了した三日目天竜峡の宿舎で開かれた有志参加の夕飯会に出て、私のような田舎青年が二三質問した事に、先生が非常に親切に答えてくれた事を覚えています。

基礎的な勉強も学歴もない私は、同じような悩みをもつ仲間の青年と共に、観念論と唯物論の違い、唯物史観唯物弁証法とものの観方の根本にふれる哲学の歴史や、その勉強が経済、社会の理解する上に大事な事などを、わかり易く講義されて、それから勉強する窓を開いてくれた気がしました。

話の内容には勿論難しい術語が一杯あった気がしました。私らはそれに一生懸命噛みつくようにして、何とか自分なりきの勉強したい、そんな意識にかき立てられた講座でした。

講座の会場迄、私の家から約九キロ余り、自転車に乗れず、バスもない処え足の障害者である私にとっては必死の思いの出席でした。」

北澤は、青年会の講座に物足りなさを感じていた青年は自由大学の講座に期待したという。そして仲間と定期的な読書会を開き、仲間の考え方を参考にしながら、自己の考え方や社会に対するものの見方を確かなものにしていったのである(48)。なお、北澤が回想の中で触れている、天竜峡の宿舎、すなわち仙峡閣で開かれた夕食会のときに三木を囲んで撮った写真が残されている(49)。

楯操は、三木の講義での次のようなエピソードを記している（楯 1978 : 68）。

「三木清先生「経済学の哲学的基礎」は寺院を講堂にしたが、奥できいていた僧侶が社会進化の所で大声をあげて中止を申出たが平静の中に進行したエピソードもある。」

この三木の講義が終わったのち、3月に伊那自由大学の機関誌『伊那自由大学』第1号が発行された。機関誌を発刊したのは、編集印刷兼発行人の林源によれば、「新しい息吹を盛りかえすために支部を作り、その機会に団結を強めたい」という意図があったからで、発行部数は300部くらい、自由

大学の会員、後援会員のほか、自由大学運動に理解を求めるために下伊那郡の小学校長へ送ったという（林 1978：2）。

この第1号には、巻頭言、高倉輝「耕す者は永遠である」、桑田治郎「窓辺の漫語」、吉沢清之「自由大学運動の精神を語る」、楯章「自由大学とは何か」、後援会解散に就て、事務所一覧、伊那自由大学竜峡支部規約、伊那自由大学会規約、長尾宗次「一九二九年の下伊那郡民諸君にさゝぐる詩」、伊那自由大学事業報告、伊那自由大学会計報告、編集後記などが掲載されている。

「巻頭言」は、「自由大学運動は文化下伊那の建設である。吾々はその建設の手段を自我教育に抛らうとするのである。／吾々はこゝで真理に飢へたる仲間を呼び合ふ狼である。／されば雪に凍る二里三里の山道も自由の学燈の輝きあれば毎夜通ふとも苦難とする所ではない」と、学問によって「自我教育」をする自由大学運動を通して「文化下伊那」の建設をするという自由大学の精神を記している。そこには千代村を中心とした青年たちが学問に対して主体的に取り組もうとする姿勢が示されていた。

高倉輝「耕す者は永遠である」は、タカクラが1928年4月14日の上小農民組合連合会発会式で講演したものである。のちにプリントにしており、それを掲載したものと考えられる<sup>(50)</sup>。タカクラは、「耕す者は永遠である」の最後の部分で、『『永遠の生産者』であるところの農民が先づ己が人類の社会に有つところの真の位置に自覚して、当然農民が有つ可き権利を農民の手から奪ひ取つて居るところのかの一部特権階級の手から再びそれを農民の手に奪ひ返さなくてはならないのであります。それは単に農民自身の生活を安定ならしめその生活権を確保する唯一の法であるのみでなく、同時に人類社会の秩序を正しくし新しき正義を人類社会の世界に持ち来らす道なのである。／而して農民が斯の如き力をもち得る途は只一つしか無い。即ち農民自身が団結する事である。団結のみがしひたげらる農民に取つての唯一の力である」と、虐げられた農民の生活から解放されるためには農民自身が団結することを説いている（高倉 1929：13）。

吉沢清之「自由大学運動の精神を語る」は、自由大学運動は「真の教育運動」であり、「がく校といふ速成的ながく問道場に入門し得ぬことを余儀なくされた生命力を自覚した終生的教育を希望する生活者の総てを抱擁する」のが、自由大学運動の精神であるとしている（吉沢 1929：18-19）。

楯章「自由大学とは何か」は、現在の学校教育制度では、「最高学府たる大学」は「有産階級に独占」され、「一生教育を受けるものではない」のに対して、自由大学は、「普遍的にして局部の人間に限界されて居ない、又自我教育たる故に一生涯自分を教育す可き機関」であり、「高き教養が一部分の人間に専有されず、工業労働者農民も余暇に自己の教養を成し得る」ものである、と述べ、そして自由大学での学びを生かす方法を次のように述べている（楯 1929：21-22）。

「自由大学に於ては講座のみが、自由大学精神ではない。即ち一科目の講座に依り概念を収取し、その理念を根源として、自己の教化を進展せしめ、獲取したる学問的原理を利用して（中略）現実的な人類既成社会の現象を解剖批判する知識を得るを持つて、モットウとし、その批判した結果を自己の修得されし本質的理念に依り、より良き理想郷の建設へと進展す可きである。これが為研究会を催し此の研究会により社会問題を理解する一段階とも見る可である様に考へる。」

この楯の一文は、聴講者は自由大学の講座で得た「概念」をもとに「自己の教化」を進め、そこで得る「学問的原理」を用いて「理想郷の建設」に向けて既成社会を批判・分析すべきだと説いている。楯は、「自己を教化」する聴講者たちが研究会を組織し、そこで討論し知識を共有することが自由大学の学びとしてとらえていることがわかる。千代村支部「趣旨書」が講座だけでなく定期的な研究会の開催を提起したのは1年半前のことであった。したがって楯がなおも研究会開催を繰り返していたことは、研究会活動が進展していなかったことを示している。それは、岡本洋之が指摘するように、かれらが「問いを設定したうえで自由な議論・論述をする」という学問の具体的方法が、わからなかつ

た」からとみられる（岡本 2021：47）<sup>(51)</sup>。

この機関誌『伊那自由大学』は、この第1号のみで、その後刊行されることはなかった。

千代村支部の講座は、29年12月に2回開催された。まず藤田喜作の「農村社会について」が、12月12日から3日間、千代村大郡の楯操宅で行われている。

藤田は、1915年に東京帝国大学文学部社会学科を卒業、引き続き法学部経済学科に進んだ。その後、東京帝大講師となり、文部省給費生としてドイツ・イギリスに留学したが、のちに東京帝大講師を辞め、自由大学に出講したときは法政大学講師であった。

藤田の講義内容は、楯操の筆記ノートによれば、「農村社会は協同社会基本的な単位であり、人間の生活資料の生産即ち一義的な生産をなす任務を荷<sup>ママ</sup>つてゐるのである」という言葉から始まっている。

まず原始から近世の農村の歴史を振りかえり、「斯くて農民の歴史は搾取（貧困）の歴史である」とまとめたうえで、現在の農村の実情を資料をもとに明らかにし、「一戸の農家は自家及農家以外の他の一戸を養ふてゐるのだ、即ち一戸の農民は二戸の家族生活を支へてゐるのだ」と述べ、土地所有関係からみると、「七割の農民は総面積の三割を所有するに過ぎない水呑百姓であつて自活し得ない階級である、斯く土地は不平均に分配されてゐる。自活し得る階級と併せて九割の農民は無産農民である」と説明している。農民は、人口増加、租税、地主の三者によって貧困化している。「殊に信州農民は半工業に関係してゐる関係上、資本主義（金融資本）から直接搾取される為その貧困度はより甚しいものがある」と述べている。

藤田は、「農民は社会を根本に支へ乍ら其營養分は上へ上へと吸収されてゐる。負担の重荷に苦しんで理論上、事実上絶対的に搾取されてゐる。之が農村の現状である」とし、この農村の現状から遁れることは出来ないか、と問い、「之こそ現在の而して将来の重要問題である」と語り、農民が「団結」し根強い運動に取りかかることと、農民が自覚しその実体を認識するための「知識」を獲得する以外にはないと説いている。そして最後に、この現状認識から出発して「農村青年の全体の自覚を促し堅き結束を結成し他の凡ゆる農民層を引込し、ありのまゝの状態を認識することを努め、支配階級及其手先に働く階級よりの甘言（あまやかされること）から自らを解き、学問することに依つて確固たる農民意識を持ち、堪へざる忍耐をすることが吾々青年農民に課されてゐる社会的任務ではなからうか」という言葉で結んでいる（楯操筆記「藤田喜作先生 農村社会について」）。

この資本主義社会の中で農村社会と農民がおかれてゐる現状を明らかにした講義に対する聴講者の感想や反応は知られていない。

藤田喜作は、宿泊した天竜峡の仙峡閣に、次のような言葉を記した色紙を残している（山野 1979：5；今村編 1979：240）。

「自由大学に招かれて初めて信州に来る。天竜の景奇勝なりと雖も自然の生は更一驚にして足る。予の更に驚嘆せんと欲するは現代文明の生める青年信州の根強くして先鋭なる思想的傾向にありとす。予の来れるは、説かんが為めに非ずして、彼等に聴かんが為め也／藤田喜作／一九二九、一二、一二 到着の朝」

ここには、自由大学の講義に臨む藤田の謙虚な姿勢をうかがい知ることができる。

次いで12月20日から3日間、タカクラ・テルの「日本民族史研究」が千代村の米川公会堂で行われた。

タカクラの講義は、楯操の筆記ノートによれば、「従来の歴史は真の歴史ではなかった。一部の階級の歴史であつた。即ち政権を握った人々の歴史であつた。真の祖先の歴史ではなく、全体の歴史ではなく、一部の支配階級の歴史であつた。吾々の祖先の一部分の歴史だつた」という言葉で始まり、「吾々は自らの真の歴史をさがさねばならない」とするものであつた。タカクラにとって「真の歴史」とは「農民の歴史」であつた。かれはこの立場から、古事記について説明し、そして「文明文化が進む

に従って有力なる階級が生まれて農民を支配するに至った」とし、権力が寺院から貴族、武士、承認、資本家へと推移したことが語られる。講義の後半では、農村不況下の地域の現実を上小農連の調査資料をもとに具体的数字を上げて説明を加えたあと、農民が「歴史には始めから表れなかったのは財力を有しない被支配階級であり、苦しい階級であったからである。然らば此の階級は如何にして人間的解放の道を探すか。それは農民同盟に他なし」という言葉で結んでいる（楯操筆記ノート「インテリゲンチヤとは何ぞ 高倉輝 経済学の哲学的基礎 三木清 日本民族史 高倉輝」）。

このようにタカクラは、農民たちの生活現実根ざした講義を行った。民衆の生活から生まれた問題意識をもって、大学で学んだ知識を活用しただけでなく、新たに研究した成果をふまえて、自由大学の農村青年たちの前で語ったのである。米山光儀が指摘するように、『我等いかに生く可きか』を扱った講義やダンテ研究の講義は、まだタカクラが「大学の中で学んだ知識の枠内にあり、それを民衆に伝えるだけのもの」であったのに対し、「日本民族史」の講義は「大学の中で学んだ知識を駆使しているとはいえ、問題そのものが民衆の生活の中にあり、大学の知識の枠からはみだしてしまうもの」であった（米山 1986：52-53）。

なお、タカクラは、12月24日、千代青年会主催の講演会が米川公会堂であり、「日本民族史」の講演をしている（清水編 1934：244）。

このタカクラの講義あと、1930年に入って2月に、三木清の講座が開かれた。三木の「経済学の哲学的基礎」で、2月14日から3日間、竜江小学校で行われた<sup>(52)</sup>。この講座は、千代村支部・竜峡支部と中部青年会が共催したもので、聴講者は86名と多かった。

この三木の講義内容や聴講者の感想等は残されていない。林源は、三木が自由大学で講師として果たした役割の大きさについて、「三木さんは、私の印象では、伊那自由大学を支えていた講師側で言えば、前半三分の二までは高倉輝先生ですが、後半三分の一は三木先生と言っていいかと思うほど三木先生は非常な力を入れて下さいました」と証言している（座談会 1979：33）。

伊那自由大学は千代村支部を中心として講座を組織してきたが、この三木清の講義が最後となった。

東京控訴院検事局は、伊那自由大学を「社会運動理論ノ究明検討ヲ為シ指導理論ノ把握ヲ目的トス」る「準左傾団体」として動向調査の対象としていたが、1928年段階の伊那自由大学について、「昭和三年十月中飯田町ニ於テ佐竹哲雄を聘シ五日間ニ亘リ同年十二月中下伊那郡千代村に於テ高倉輝ヲ招キ哲学概論、日本民族史等ノ題下ニ講演会ヲ開催ス将来相当ノ見込ミアリ」と、今後自由大学が発展するとの見通しを記していた（東京控訴院検事局 1929：349）。また、『伊那自由大学』第1号（1929年）は、「後援会解散に就て」の中で、「今や一本立ちになつて自分達が自我教育の正道を歩んで行かれるようになりました」と書いていた。しかし、実際には、自由大学の継続は困難となっていた。

伊那自由大学の経営が困難となった直接的な要因としては、昭和恐慌による農村不況の深刻化によって大半の農家が経営基礎を根底から崩されたことにある。ことに自由大学の聴講者を支えていた養蚕業が壊滅的な打撃をこうむり、自由大学の2円ないし3円の聴講料を支払える農村青年たちはいなくなったのである。楯操は、「繭価が下がって、大方赤字が出て、その整理に理事の連中が困った。1回の講座3円の聴講料がなかなか重荷で」と証言している（楯操より聴取、1972年8月2日）。また、支部組織になってから自由大学の事務局を担当していた銀行員の林源が1930年に上伊那に転勤になり、そのあとを継ぐ者がいなかったことも要因の1つであった（座談会 1979：33）。さらに、竜峡支部のメンバーである長尾宗次は読書会を組織し、高橋亀吉の『経済学の実践的知識』をテキストに自宅で会合をもち、そこへマルクス主義法学者の奈良正路が来たことから、30年6月に警察の特高に呼ばれて取り調べをうけたことがあり（座談会 1979：33；長尾 1981：19）、官憲当局の取り締まりも厳しくなり、公開形式での講座を開くことが困難になっていたことも要因の1つであった。

このような状況の中で、千代村支部の林三郎、渡邊信一、松島尚、楯操、小島一重、楯章、清水米

男、森山充らのメンバーは、少人数での読書会による研究活動を進めた（清水編 1934：153）。小沢一によれば、小島一重の自宅で『空想から科学へ』を読んだという（小沢 1982：56）。その後、森山充、清水米男、小沢一、藤本信一、関口庄三、大平千春、小島八重、北川しのぶ、長沼はるねらは1930年には社会科学の研究運動の大衆化を図るため各部落に読書会を組織し、『産業労働時報』『農民の友』『戦旗』『プロレタリア科学』等の左翼雑誌を読破したという。小沢一、田中英一らは日本プロレタリア文化連盟並びにプロレタリア作家同盟下伊那支部に加わった。また、楯操、森山充、松島尚、清水米男、長沼秀雄、小島若一、大平重夫らは、实际的に農民生活の生活改善、農業生産方法の改善研究を目標に「新興農民会」を組織し、翌年、この組織は小島若一、林三郎、小沢一らを中心に労働農民組合に発展した（清水編 1934：163）。そして32年4月には、3月のプロレタリア科学研究所の坂本三善の講演をきっかけに、森山充、清水米男、関口庄三、大平千春、長沼はるね、藤本千恵らの青年たちは、村青の支持を得て「文化クラブ」結成していく（清水編 1934：171-174；大串 1982：52-54）。

こうして下伊那地域においては、自由大学はその教育的役割を果たし終え、とくに千代村支部は読者会組織となり、さらに社会主義青年文化運動に転化していったのである。

## 5. 伊那自由大学の講座・講師と聴講者

これまで約6年間にわたる伊那自由大学の学習運動がどのようなものであったかをみてきた。

ここでは、伊那自由大学の講座や講師が、各地に設立された他の自由大学と比較してどのような特徴があるのか、また、聴講者にはどのような特徴があったのかをみておきたい。

伊那自由大学では1924年から30年までの6年間で23講座開講された。そのうち17講座が飯田町で開かれ、1927年に支部組織に形態が変わってからは6講座が千代村支部を中心に開かれた。

伊那自由大学の講座一覧を示すと、第1表のようになる。

23講座を学問系統別にみると、哲学概論・哲学史・文学論など人文科学系は52%、社会学・経済学など社会科学系は39%、人生生物学など自然科学系は9%であった。上田自由大学の場合は、34講座の内訳をみると、人文科学系が74%、社会科学系が21%、自然科学系が6%で、新潟県の魚沼・八海・川口の3自由大学の場合は、21講座の内訳をみると、人文科学系が76%、社会科学系が14%、自然科学系が10%である。したがって、上田や新潟の場合は人文科学系の比率が75%前後と極めて高いのに対して、伊那の場合は社会科学系の比率が上田や新潟より比較的高いことが知られる。社会学系の講座が比較的多く開講されたのは、政治運動や社会運動を展開していた自由青年連盟や政治研究会下伊那支部、下伊那郡青年会を意識していたことを示している。

伊那自由大学に出講した講師は13人であるが、1926年頃までは主として土田杏村が斡旋していたこともあり、その多くは京都や関西の大学に勤務する研究者が多かった。出講した回数が最も多かったのはタカクラ・テルの5回で、次いで新明正道と谷川徹三が3回、佐竹哲雄と三木清が2回であった。13人のうち新明正道と波多野鼎は東大新人会の出身で（H. スミス 1976：292-307）、山本宣治、水谷長三郎、波多野鼎は京都労働学校、新明正道は大阪労働学校の講師となっており（東京市社会局編 1925：32-33；佐々木 1976：3-5）、当時の無産運動と関わりをもつ人たちも少なくなかった。また、住谷悦治が京都でアンリ・バルビュスの「クラルテ運動」を進めていくために14925年6月に創刊した京都版『クラルテ』の同人14人の中には波多野鼎、タカクラ・テル、新明正道が名を連ねており、反戦平和の精神が講師の中に流れていたといえる。

(第1表) 伊那自由大学講座一覧

| 学期 | 開講年月日                                                                                                  | 日数                                             | 講 師                                                                         | 講 座                                                                               | 聴講者数                                    | 会 場                                                                   | 備 考                                                                              |
|----|--------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------|
| 1  | 1924. 1. 8<br>1924. 1.28<br>1924. 3. 4<br>1924. 3.10                                                   | 5日<br>5日<br>5日<br>5日                           | 山 本 宣 治<br>タカクラ・テル<br>水 谷 長三郎<br>新 明 正 道                                    | 人生生物学<br>文学論<br>唯物史観研究<br>社会学概論                                                   | 73名<br>52名<br>27名<br>32名                | 飯田小学校<br>正永寺<br>天竜倶楽部<br>天竜倶楽部                                        | 特別講座                                                                             |
| 2  | 1924.10.21<br>1924.12. 1<br>1925. 1. 8<br><br>1925. 1. 8<br><br>1925. 3.15                             | 5日<br>5日<br>5日<br><br>1日<br><br>5日             | 山 口 正太郎<br>谷 川 徹 三<br>タカクラ・テル<br><br>タカクラ・テル<br>猪 坂 直 一<br><br>波多野 鼎        | 経済学<br>哲学史<br>文学論 (ダンテ研究)<br>所感<br>自由大学運動の現在及将来<br>社会思想史                          | 16名<br>23名<br>26名<br><br><br>24名        | 天竜倶楽部<br>天竜倶楽部<br>天竜倶楽部<br><br>百十七銀行<br><br>天竜倶楽部                     | 公開講演                                                                             |
| 3  | 1925.11. 7<br><br>1925.12. 5<br>1926. 2. 3<br><br>1926. 2.25<br>1926. 3.11                             | 5日<br><br>5日<br>5日<br><br>4日<br>5日             | 新 明 正 道<br><br>谷 川 徹 三<br>タカクラ・テル<br><br>西 村 真 次<br>佐 竹 哲 雄                 | 社会学 (社会進化論)<br>哲学史<br>ダンテ研究 (続講)<br>人類学<br>哲学概論                                   | 22名<br><br>19名<br>15名<br><br>16名<br>17名 | 飯田実科高等女学校<br>飯田小学校<br>飯田小学校<br><br>飯田小学校<br>飯田小学校                     | B<br>特別講座                                                                        |
| 4  | 1926.11.20<br><br>1927. 1.27<br>1927. 3.25                                                             | 2日<br><br>3日<br>3日                             | 高 橋 亀 吉<br><br>谷 川 徹 三<br>新 明 正 道                                           | 日本資本主義経済の研究<br>哲学史 (現代哲学)<br>近世日本社会史                                              | 26名<br><br>10名<br>12名                   | 天竜倶楽部<br><br>飯田小学校<br>飯田小学校                                           | 特別講座                                                                             |
|    | 1927.11.15<br>1928.11. 1<br>1928.12. 1<br><br>1929. 2.15<br><br>1929.12.12<br>1929.12.20<br>1930. 2.14 | 5日<br>2日<br>4日<br><br>3日<br><br>3日<br>3日<br>3日 | 今 川 尚<br>佐 竹 哲 雄<br>タカクラ・テル<br><br>三 木 清<br><br>藤 田 喜 作<br>タカクラ・テル<br>三 木 清 | 経済学原論<br>哲学概論<br>日本民族史<br><br>経済学の哲学的基礎<br><br>農村社会について<br>日本民族史研究続講<br>経済学の哲学的基礎 | <br><br><br><br><br><br><br>86名         | 米川公会堂<br>飯田小学校<br>米川公会堂<br><br>竜江村大願寺<br><br>千代村楯操宅<br>米川公会堂<br>竜江小学校 | 千代支部<br>千代・下条支部 C<br>千代・竜峡支部、<br>竜江青年会、C<br>千代支部、<br>千代支部、C<br>千代・竜峡支部、<br>中部青年会 |

備考；筆記ノート

A；佐々木忠綱「哲学史概論」 B；楯操「高倉輝 文学論 (ダンテ研究)」 C；楯操「インテリゲンチヤとは何ぞ 高倉輝 経済学の哲学的基礎 三木清 日本民族史 高倉輝」 D；楯操「藤田喜作先生 農村社会について」

伊那自由大学の聴講者については、上田自由大学のように「会計簿」等が残されていないため、聴講者の回想・証言や書簡類などの史料から明らかになった氏名を集計していくしかなかった。清水迪夫は、判明した41名について、家族、親戚、知人等へのアンケート調査をもとに、聴講生の学歴、社会運動歴、職歴、父親の職業などから聴講生の社会階層を明らかにしている（清水 2017：108-121）。ここでは、その後判明した分を含めて54名の聴講者について、その特徴をみておきたい。

自由大学聴講者の年齢は、生年から判断して10代から20代が多い。学歴別では、学歴のわかる40名のうち、尋常・高等小学校卒は18名（45%）、飯田中学校卒は9名（23%）、地元の下伊那農業学校ほか中等学校に進学した者は13名（33%）であった。下伊那地域は自由青年連盟や政治研究会下伊那支部など社会主義青年運動が活発な地域であったが、自由青年連盟や政研下伊那支部に関わっていた者は、脱会者の横田憲治・平沢桂二を含め10名で、自由青年連盟・政研下伊那支部発会式参加者を含めても13名であり、少なかった。その中で、自由大学理事の木下幸一は1924年11月の政研下伊那支部総会で幹事に、横田憲治は25年8月の支部大会で調査部員に選ばれている（佐々木 1978：198、268）。また、27年10月に自由大学千代村支部が設立されるが、その年千代村には無産者新聞の読者会が組織され、自由大学関係者では嶋岡己勝をはじめ5名が参加している。自由大学関係者の中にも社会主義に関心を持ち運動に関わる者も少数ながらいたことが知られる（53）。自由大学の理事となった竜江村の小学校教員吉沢敏二の場合は、のちに1933年の二・四事件で検挙されている（54）。

職業別では、判明している38名のうち農業が20名（53%）で最も多く、次いで教員6名（16%）、銀行員4名（11%）、官吏2名（5%）の順で、その他6名（16%）である。聴講者は農業に従事する青年が多かったことが知られるが、中でも自由大学を設立した横田憲治や平沢桂二、須山賢逸は、家業は養蚕業などを営み、飯田中学を卒業した村の「素封家」と呼ばれる比較的富裕な農家であり、伊賀良村の代田保雄、大下条村の佐々木忠綱<sup>(55)</sup>、河野村の胡桃澤盛<sup>(56)</sup>らも飯田中学卒ではないが家は比較的富裕な地主の家であった。このように家に経済力があり、自由大学の聴講料を払える余裕があった階層の青年たちが比較的多かった。一方、林源は、聴講者の学歴について、「伊那自由大学へ来た人たちは、昔の旧制中学を卒業した人は二割か三割、半分以下ですね。半分以上は高等科卒業の人たち。ことに千代については、私の生まれた村ですからよく知っていますが、殆ど、楯君以外は高等科卒業の青年たちでありました」と語っている（自由大学研究会編 1983：34-35）が、清水迪夫は、この林の証言について、「今回の調査では再検討の余地がある」と疑問を呈している（清水 2017：113）。千代村の聴講者18名のうち学歴がわっているのは7名で、そのうち高等小学校卒は4名で大半が高等小卒とはなっていないが、学歴不明の11名は高等小卒の割合が高いことが推測され、林の証言はほぼ正しいと思われる。かれらは、伊那自由大学が支部組織となり千代村支部が設立され、青年会と連携して自由大学が講座を開講したときに会員となったメンバーと考えられるからである。

清水は、41名の聴講者を分析して、「伊那自由大学の受講生は濃淡の差はあるがほとんどが町村における青年運動、あるいは下伊那郡青年運動のなかでリーダー的立場にある活動をしている」とし、その出身社会階層は「一定の『経済的資力』を持つ『有資産者』層の青年たち」であった、と指摘している（清水 2017：114）。ただ、この清水の指摘は、飯田町で開講していた時期の伊那自由大学にはあてはまるものの、千代村支部の青年たちの出身社会階層も同様だとはいえないと思われる。

このように飯田町で開講していた時期の伊那自由大学と支部組織になってからの自由大学とでは、聴講する青年たちにも変化がみられたが、青年たちの学問を学ぼうとする意欲、情熱は変わらなかった。聴講者と講師とは学問への情熱によって結ばれていた。すでに指摘したように、新明正道は、自由大学に出講する際、「自由大学のやうな自ら進んで学問に近付かうとする人々の集って来らるゝところへ行って話の出来るのを嬉しくおもつてゐます」と述べていたし（横田憲治宛新明正道の手紙、1923年12月7日、山野編 1973：2）、谷川徹三も「皆さんが非常に御熱心だといふことを承って力強

く思っています」と述べている（横田憲治宛谷川徹三の手紙、1924年10月30日、山野編 1973：31）ことからもうかがえる。青年たちは、自由大学の講義を聴き、そこで視野を広げ、本物の学問に触れることにより学問するよろこびを体験した。そして、講師もまた、そうした学問を求める青年たちの声に応じて学問を教えたのである。自由大学の学問は、既成の大学の学問をほぼそのまま持ち込まれたものであった。多くの講師は大学での講義していたものを自由大学で講義していた場合がほとんどであったが、それにもかかわらず聴講者である青年たちは、主体的に学問を学び、視野を広げ、青年たちの人間形成に影響を与えたのである（山口 1994：82）。平沢桂二は、妹多世に宛てた手紙の中で、「自由大学も満二ヶ年十二回進む毎に新しき眼が開かれて視野が拡大されて行くことが大きな喜びです力のゆるす限り続けて生きたいと思ひます」と書いている（平沢多世宛平沢桂二の手紙、1926年2月11日、福元 1978：60）。楯操は、「第一回の講義は山本宣治先生の人生生物学であったが、性の問題を通して科学（人間に於ける科学的態度）に対する解説をされたが学問に対して興味を持たせてくれたと思う。講義で感動の未だ耳朶に残っているのはタカクラ先生のダンテの神曲である。ダンテは九才のヴェアトリチェを一目見て絶高の愛を感じ、それがダンテの一生を支配し、あの膨大な神曲を作らしめたという、愛の基本像（？）とでも云えるものをあの美しい言葉で語られた。次はタカクラ先生の日本文化史で日本語について実に興味ある（魅力的）講義で今に至る関心を失わせていない。新明正道先生の社会学では社会の見方と同時に学問の面白さについて知ることが出来たと思う。講座が開かれる度に学問に対して興味が加ってゆく。他方で自由青年連盟の運動があったが興味がわからず学問的教養を高めたく専念する」と語り（楯 1981：16）、長尾宗次は、自由大学に聴講して特記しておきたいこととして、「1. 世の中には此んなに深い研究と主張を持った偉い学者が居る事。2. 学校では耳にもしなかった広い学問があること。殊に社会科学。3. 経済学も文学も広くて深い事。4. 学校で云われて来た社会の指導者とは何か。ああ何と幼稚で、小っぽけな自分である事かと云ふ驚きと、自分はもっと勉強しなくてはと半少年の私は過去の学校に幻滅すら感じた」と語っている（長尾 1981：19）。また、佐々木忠綱は、「自由大学当時において、我々よりわずかに年齢の上の立派な先生方が講義をしていただいて、その魅力といえますか感化といえますか、今にありありと心にのこっている」とし、「本の選択というような力を、ぜんぶ自由大学の時に得たのではないか」と語っている（自由大学研究会編 1983：28）。自由大学に参加し、講師や聴講者から有形無形の影響や感化を受けたことが知られる。林源は、「自由大学は真理を探究し、理想を求め、教養を高める学問の道を選んだ。（中略）一講座終ると私達は目の皮が一枚むけて、人生のこと、世の中のことが一層はっきり見えるような気がした。それは丁度山を五合目六合目と登るにつれて展望がひらけるようなものの年団の役員、後には県会議員、村長、村会議員、農協の組合長や役員などになってそれぞれ活躍した。（中略）僅か五、六年の教育でこんなに効果のあった教育運動は珍らしいのではなからうか。しかも自由大学で学んだ人達は当時の青年団の五パーセント以下の小人数であった。その小人数が中核になって次の時代を動かしたのだから不思議な気がする」と、自由大学で学んだことによる影響を記している（林 1978：64-65）。

伊那自由大学が開かれる飯田町まで自転車ですら1時間半かかる道を往復して講義を聴いた千代村の青年たちは、4年後に千代村支部を設立するが、その自由大学での学びの経験を、設立「趣旨書」の中で次のように記している（山野編 1973：128）。

「大正十二年末より伊那自由大学が設立され爾来幾多の困難と闘ひて營々として所期の目的を果すべく底力強く自由大学運動の一角にをなびかせてゐる 其処では現代日本の新進学者の粹をあつめたと云つてよい講師が哲学、経済学、社会学、文学、生理学と其々の精粹を担任して年数回の講座を飯田で開いて来た 将来社会の黎明を吾々はその貧しき教育の窓から感受した 講座の度毎に吾々は吾々の無智に戦慄し新に展開する視野に驚嘆の眼を開き何とも知れない腹底の力を受けて帰っ

(第2表) 伊那自由大学聴講者一覧

| 氏 名   | 出 身  | 生年   | 学 歴              | 職 業       | 備 考                                                    |
|-------|------|------|------------------|-----------|--------------------------------------------------------|
| 松下千尋  | 生田村  | 1904 | 小県蚕業             | 蚕種業、小学校教員 | 父は蚕種業、村会議員。長男、胡桃澤盛と従兄                                  |
| 池上明   | 生田村  | 1904 | 飯田中学             |           | のち村長                                                   |
| 清水玄三郎 | 山吹村  | 1898 | 高等小              | 農業        | 自由青年連盟、政研下伊那支部、組合製糸                                    |
| 中塚稲美  | 市田村  | 1903 | 飯田中学             | 小学校教員     | 自由大学理事、養蚕農家、長男                                         |
| 横田憲治  | 上郷村  | 1898 | 飯田中学             | 小学校教員     | 父種苗家。自由青年連盟・LYL(脱会)、政研下伊那支部<br>自由大学発起者<br>長男、平沢桂二の妹と結婚 |
| 宮澤重男  | 上郷村  |      |                  |           | のち村会議長                                                 |
| 木下 英人 | 上郷村  | 1905 | 高等小              | 農業        | 自作農。戦後上郷農民組合執行委員、村助役。                                  |
| 中神米太郎 | 上飯田村 | 1888 | 高等小              | 印鑑業       | 書店民衆社創設。父は神主。                                          |
| 木下幸一  | 飯田町  |      | 飯田中学             |           | 郡青常任委員、自由青年連盟、政研下伊那支部、自由大学理事                           |
| 井上甲子男 | 飯田町  |      | 飯田中学、國學院大中退      | 小学校教員     | 実家は呉服商、地主。<br>セツルメント運動                                 |
| 代田保雄  | 伊賀良村 | 1899 | 上伊那農学校           | 農業        | 村青会長、自由大学理事、のち村議、森林組合長                                 |
| 木下栄治  | 伊賀良村 | 1904 | 高等小、補習学校         | 銀行員       | 父は役場勤務。のち飯田市収入役                                        |
| 北原次郎  | 伊賀良村 | 1907 | 下伊那農学校           |           | 法学書院設立                                                 |
| 須山賢逸  | 鼎村   | 1899 | 飯田中学             | 養蚕業、小学校教員 | 郡青会長、自由大学発起者、南信大衆党、父は役場収入役                             |
| 羽生三七  | 鼎村   | 1904 | 高等小、松濤義塾         | 米穀商       | 自由青年連盟・LYL、のち全国労農大衆党、県会議員、戦後参議院議員                      |
| 長尾宗次  | 鼎村   | 1906 | 下伊那農学校           | 建設事務所     | 祖父・父とも村役                                               |
| 牧野元一  | 鼎村   | 1901 | 飯田中学中退<br>蚕業試験場卒 | 養蚕技術員     | 自由大学理事、長男、須山賢逸と従兄、のち村長                                 |
| 水野長治  | 鼎村   | 1901 | 高等小              | 農業        | 自由青年連盟・LYL、のち村議                                        |
| 北原理一  | 鼎村   | 1900 | 飯田中学、小県蚕業別科中退    | 養蚕業       | 自由青年連盟・LYL(脱会)、のち村議、町議。                                |
| 伊藤収一  | 松尾村  | 1905 | 高等小              | 職人        | 自由青年連盟、四・一六事件で検挙され、懲役2年執行猶予3年。父は職人                     |

|        |      |      |              |        |                                                   |
|--------|------|------|--------------|--------|---------------------------------------------------|
| 北澤小太郎  | 竜丘村  | 1911 | 尋常小          | 信用組合員  | 共産青年同盟下伊那地区、プロレタリア作家同盟伊那地区、のち村議、祖父・父とも村議          |
| 山田邦夫   | 下川路村 | 1901 | 高等小          | 銀行員    | 自由青年連盟・LYL、政研下伊那支部、父は荒物業兼農業                       |
| 佐々木嘉太郎 | 下条村  |      | 高等小          | 役場     | 祖父製糸業                                             |
| 原巖（岩穂） | 下条村  | 1905 | 高等小、松濤義塾     | 住み込み雇い | 父製糸業、祖父村議・村長。                                     |
| 佐々木忠綱  | 大下条村 | 1898 | 松濤義塾、小県蚕業    | 農業     | 村青年会長、のち村長                                        |
| 松下重光   | 大下条村 | 1902 | 高等小、松濤義塾     | 役場書記   | 旧家の農家で地主。戦後村議。                                    |
| 小林博夫   | 大下条村 |      |              |        | のち助役                                              |
| 伊藤昇    | 大下条村 |      |              |        | のち村会議員                                            |
| 春日伍一   | 河野村  | 1907 | 高等小          | 農業     | 父は農業。                                             |
| 胡桃澤盛   | 河野村  | 1905 | 竜東農学校        | 農業     | 自由青年連盟、政研下伊那支部、のち村長。田畑山林所有地主                      |
| 筒井甚一   | 河野村  |      | 高等小、補習学校     | 農業     | 田畑1町地主、妻は胡桃澤盛の妹                                   |
| 平沢桂二   | 神稲村  | 1898 | 飯田中学         | 農業、教員  | 郡青会長、自由青年連盟・LYL(脱会)、自由大学発起者、三男・家督を継ぐ、戦後公選村長。父は収入役 |
| 福元多世   | 神稲村  | 1908 | 飯田高女、早稲田大聴講生 | 教員     | 平沢桂二の妹、福元利之助と結婚                                   |
| 宮井啓二   | 下久堅村 | 1905 |              | 農業     | 横田憲治の従弟、地主                                        |
| 吉沢敏二   | 竜江村  | 1901 | 飯田中学         | 教員     | 二・四事件で検束される、吉沢清之と従兄弟                              |
| 吉沢清之   | 竜江村  | 1907 | 下伊那農学校       | 教員     | 竜峡支部                                              |
| 大平重夫   | 千代村  | 1911 | 蚕業試験場卒       | 技術員    | 村青会長                                              |
| 小沢一    | 千代村  | 1911 | 高等小、補習学校     | 農業     | 村青会長、自小作農家、日本プロレタリア科学同盟下伊那地区                      |
| 嶋岡潔    | 千代村  | 1907 | 尋常小、補習学校     |        | 戦後社会党入党、村議                                        |
| 嶋岡己勝   | 千代村  | 1895 | 高等小          |        | 千代村支部、政研下伊那支部発会式参加、無産者新聞読者会、父は旅館業                 |
| 清水金吾   | 千代村  | 1905 |              |        | 村青委員長                                             |
| 清水庄一   | 千代村  |      |              |        | 無産者新聞読者会                                          |

|      |     |      |                        |     |                                                               |
|------|-----|------|------------------------|-----|---------------------------------------------------------------|
| 竹村房子 | 千代村 |      | 高等小                    |     | 法全寺へ嫁す                                                        |
| 楯章   | 千代村 |      | 下伊那農学校<br>日本国民高等<br>学校 |     |                                                               |
| 楯操   | 千代村 | 1905 | 下伊那農学校                 | 農業  | 村青会長、自由青年連盟発会式<br>参加、政研下伊那支部発会式参<br>加、自由大学理事、千代村支部、<br>桑園1町3反 |
| 林源   | 千代村 | 1904 | 錦城商                    | 銀行員 | 千代村支部、父は蚕種業                                                   |
| 渡邊信一 | 千代村 |      |                        |     |                                                               |
| 島岡太郎 | 千代村 | 1904 |                        |     | 嶋岡潔の先輩                                                        |
| 林三郎  | 千代村 |      |                        |     |                                                               |
| 小島一重 | 千代村 |      |                        | 農業  | 無産者新聞読者会                                                      |
| 清水米男 | 千代村 |      |                        | 農業  | 自由青年連盟発会式参加、無産<br>者新聞読者会                                      |
| 森山充  | 千代村 |      |                        |     | 無産者新聞読者会                                                      |
| 松島尚  | 千代村 |      | 補習学校                   | 農業  | 村青委員長                                                         |
| 藤本信一 | 千代村 | 1911 |                        | 農業  | 小作農                                                           |

出典；清水迪夫「伊那自由大学受講生の社会階層」（『飯田市歴史研究所年報』15、2017年）、清水米男編『千代青年会々史』（千代青年会、1934年）、楯操より聴取（1976年8月17日）、佐々木敏二『長野県下伊那社会主義運動史』（信州白樺社、1978年）、山田旦『道－山田邦夫遺稿集－』（非売品、1995年）、大日方悦夫『満洲分村移民を拒否した村長』（信濃毎日新聞社、2018年）など。

た 此の四年間の自由大学へ集る人々を見て如何に教育の力が吾々の人間に影響するかと云ふ事実を吾々は思はずにはゐられない いつか知らぬ間に吾々は其れ以前と違った吾々を発見した」

千代村の青年たちは、自由大学を受講して「吾々の無智に戦慄し新に展開する視野に驚嘆の眼を開き何とも知れない腹底の力を受けて帰った」経験から、自由大学を自分たちの村にも設立してより多くの青年たちに学問を享受できる機会をつくろうとした。そこには青年たちが学問に対して主体的になっていたことを示している。そして、自由大学の講座の開講だけでなく、研究会を組織して地域社会を研究し、教育の力で地域を改革していこうとした。

多くの講師は大学で講義していたものをそのまま自由大学で講義していた場合がほとんどであったが、その中であって、大学の教員ではなかったが、自由大学で最も多くの講義をおこなったタカクラ・テルは、深刻化する農村不況の中で生活する青年たちの学習要求を感じとり、それに応えるかたちで自由大学の講義内容を組み替え、飯田での「文学論」「ダンテ研究」から千代村支部では「日本民族史」に変えている。そこでは、大学で学び研究した言語学などの知識を活用しながらも、大学では想像し得なかった農民の立場に立った新しい学問内容を青年たちに語ったのである（米山 2006：67-68）。

このように伊那自由大学では、下伊那郡青年会や自由青年連盟との関係に配慮しつつ、当時無産運

動と関わりを持っていた人々を多く講師に招き、講座内容も社会科学系の講座を比較的多く組織していった。上田や新潟では人文科学系の講座が圧倒的に多かったのとは異なる特徴であった。聴講者は、比較的富裕な階層の子弟である青年たちが比較的多かったが、支部組織になりその中心となった千代村支部では、学歴的にも高等小学校、補習学校卒が多くなり、必ずしも富裕とはいえない階層の青年たちも聴講するようになった。聴講者には変化があったとはいえ、自由大学では聴講者と講師とは学問への情熱で結ばれていた。そして、聴講者である青年たちは、主体的に学問を学び、視野を広げ、その後の生き方に影響を与えていったのである。

## おわりに

ここでは、1920年代に約6年間にわたる学習運動を展開してきた伊那自由大学の歴史を跡づけてきた。伊那自由大学は、青年教員による自由教育の実践、補習学校の自主化、青年団の自主化、『夕樺』に代表される文化活動、そしてLYL・自由青年連盟を中心とした社会主義青年運動の活発化など、下伊那地域の大正デモクラシーの高まりの中で形成され、学習運動を展開していった。

この地域での自由大学運動を推進したのは、社会主義青年運動や青年団運動に関わっていた横田憲治、平沢桂二、須山賢逸という3人の青年たちと、それに協力した土田杏村、タカクラ・テルなどの知識人たちであった。横田と平沢は、LYL・自由青年連盟の脱会者であったが、自由青年連盟は機関紙『第一線』は「自由大学はプロレットカルトを骨子として、民衆自身の教育機関として経営して行く。この大きな仕事を我々青年は協力して擁護しなければならない」と、自由大学擁護の論調で自由大学を紹介した。LYL検挙事件後、自由大学がパンフレット『伊那自由大学とは何か』を刊行して、自由大学がLYLの合法的学習機関と見られることに釈明したにもかかわらず、結社禁止となった自由青年連盟の後を引き継いだ政治研究会下伊那支部の機関誌『政治と青年』は、自由大学の経営危機に対して、その現状を批判し「徹底的改造」を求めつつも「自由大学の危機を救うべきである」と講座の聴講を呼びかけている。

また、政研下伊那支部に加盟していた横田憲治は、羽生三七に側面からの援助を依頼して了解を得ている。1925年半ばまでは自由大学と社会主義青年運動の一部の青年たちとの間には協力関係は維持されていたといえる。ただ、北原亀二など社会主義青年運動に関わる青年たちの多くは、自由大学に対して批判的で、講座を聴講することもなかった。

下伊那郡青年会や村青年会と自由大学との関係についてはどうか。下伊那郡青は、1924年1月の代議員会で常任委員制を実施し、委員長に北原理一が、常任委員には今村邦夫、羽生三七、北原亀二、宮嶋義治ら自由青年連盟の幹部が選ばれたが、「教育活動の面では、基礎的な学習を自由大学に任せ」との方針を決めたといわれる。自由大学の講座には、代田保雄（伊賀良）、佐々木忠綱（大下条）、胡桃澤盛（河野）をはじめ数多くの村青年会長等幹部クラスの青年たちが聴講した。その中で千代青年会は、1925年1月に熱心な聴講者である楯操が自由大学の理事に選ばれると、自由大学を支持して、25年3月の波多野鼎「社会思想史」の講義から会員を受講させ、26年11月の高橋亀吉「日本資本主義経済の研究」の講座に対しては村青から補助金を出して幹部クラスの青年たちを聴講させている。そして自由大学を聴講した青年たちは、自由大学を自分たちの村に設立してより多くの青年たちに学問を享受できる機会をつくろうとし、設立したのが千代村支部・竜峡支部・下条支部である。そこには青年たちが学問に対して主体的になっていたことが知られる。とくに千代村支部では、千代青年会と連携して講座を開講するだけでなく、補習学校や図書館の理想的改革に努力して地域文化の向

上をはかり、また研究会を組織して地域の改革を進めることを構想し、生活現実根ざした講義も行われたのである。自由大学の講義と図書館の利用、研究会の組織を結びつけた知識の共有作業の構想は、自由大学の理論的指導者であった土田杏村の構想を超えるものであった。

この伊那自由大学の学習運動の軌跡は、下伊那地域の社会主義青年運動や青年団運動と一定の関わりをたもちながら行われたところに特徴があり、上田自由大学や新潟の自由大学とは異なる、いま1つの側面をもった自由大学であった<sup>(57)</sup>。そして、自由大学に参加した青年たちは、主体的に学問を学び、視野を広げていくなかで、佐々木忠綱のような批判意識をもちつつ誠実に生きていく人々を生みだしていったことが知られるのである。

## 注記

- (1) 自由大学運動の研究は1960年代後半以降に活発化したが50年間にわたる研究史については、拙稿「自由大学運動研究の軌跡」(2021年、<http://www7b.biglobe.ne.jp/~takakuraterukenkyu/jiyudaigakukenyunokiseki.pdf>; 山野 2023: 286-315)を参照。
- (2) 1919年における長野県の養蚕の地域的分布をみると、下伊那郡の桑園面積・収繭量・生産額それぞれは、県全体を100とすると、12.4、16.4、17.2で、桑園面積は東筑摩郡の12.6に次いで2位であるが、収繭量・生産額は1位となっている(長野県編 1972: 117)。
- (3) この千代小学校の1918年度の教育方針について、大串隆吉は前任校長の熊谷春次郎によるものとしているが(大串 1978: 85)、栗谷真寿美は吉田一郎が作成したものとしている(栗谷 2019: 60)。
- (4) なお、大串隆吉は、木下茂男は「仏教日曜学校の積極的推進者であり、彼の自由教育の基底には仏教思想があった」とし、白樺派教師たちと木下の考えとは「相当趣を異にしていた」と指摘している(大串 1980a: 52-53)。
- (5) 羽生三七は、鼎村の尋常高等小学校を1918年に卒業すると、家業の米穀商を手伝いながら、漢学者の松村蓬麻が開いた私塾・松濤義塾と鼎小学校にできた夜学の補習学校に通ったが、補習学校の青年教師松沢茂三の影響もあり、トルストイ、ドストエフスキー、ゴーリキー、ツルゲーネフなどのロシア文学に傾倒した(石川 1982: 35-37)。また、『潮音』、『文章倶楽部』や地元の新聞に投稿したりしたが、それは、「その頃は長男は家業を継ぐものとされていたので、上の学校に進学できなかった」ため、「その不満や悲しさを文学に託し、詩歌に生き甲斐を感じた」からであった。しかし、「文学に生き甲斐を感じながらも、一方で米穀商という家業をとおして、社会の矛盾にを次第に感じはじめ、また芸術至上主義的なものに飽きたらなくなった」という(羽生 1977: 162-163)。
- (6) 横田憲治は、上郷村の素封家の長男で、羽生三七より6歳年長で、飯田中学校卒業後、上郷小学校の代用教員をしたが、マルクス主義の本を読んで印刷物を作り、校内で配ったことが村長北原阿智之助に知られ、辞職させられるという経歴を持っていた(佐々木 1978: 75-76、石川 1982: 57)。横田も羽生三七や今村邦夫ら同様に短歌をたしなんだが、羽生らが太田水穂の『潮音』に投稿し、『夕樺』を発刊したのに対して、横田は窪田空穂の『国民文学』に投稿した。『国民文学』第57号(1919年4月)に掲載された「雨雲」6首が初出で、「押しくだる雨雲切れてあらはれし山の頂は雪に真白し」「向山の山平しめて生ふる松雨雲つゝみ幹立ち見えず」などの歌について、「島木赤彦氏に見るやうな手法があるが、まだ力の入れ方が外部的で内部から湧き上がったものとなつてゐないはいけない」としつつも、「然し対象をしつかり見てゐて、少しのゴマカシも用ゐない所は

よい」との評が添えられていた。

- (7) 横田憲治は、村営電灯問題で村民が大挙して郡役所に押し寄せたときのことを、「烟道をすでにぬけたる行列の先頭の人等の鯨波のこゑきこゆ」と詠み、『国民文学』に投稿したが、「過去六ヶ年に亘つて解決を見なかつた村営電燈の問題が愈々切迫し、遂に数回村民大会を開催するに至つた。そして其の結果、五千余の村民は大挙して、郡役所へせまつた。其の日多くの警官は沿道をいましめて、物々しい有様を呈した。併し今日に及ぶも何等解決の曙光さへ見る事が出来ず、紛糾に紛糾を重ねつつある」との解説を付している（横田 1923：89）。
- (8) 猪坂直一は、羽生三七と荒井邦之介と会談したときのことを、次のように回想している（猪坂 1967：28）。なお、猪坂の回想には市村今朝蔵も同行したとしているが、羽生にはその記憶がない。「たしか大正十二年の一月であつたと記憶するが、私は上田市原町の友人寺尾一二君の宅で自由青年連盟の最高幹部羽生三七、その指導者荒井邦之助、及び軽井沢出身の三氏と会った。寺尾君の宅の土蔵の中にランプをぶらさげ、その薄暗い光の中で寺尾君も加わった五人が声をひそめて話し合ったのである。三氏は私に文化団体LYL即ちリベラル・ヤングメンズ・リーグへの参加を促した。これは荒井氏等によって指導されている社会革命の急進団体であることを私はひそかに知っていた。私はすでに理想主義社会観もち、マルクス主義には挑戦的態度でさえあつたので、それを断るとともに、このような急進主義が青年運動として適當でないという意見を述べたので、ついに荒井氏とはげしい議論となり、その声は戸外に洩れるほどであつた。けっきょく荒井氏は私を”土田杏村そっくりの議論である”或いは”臆病なインテリゲンチヤ”ときめつけ私は私で”唯物論の独断””マルクス主義のユートピア”とやり返し、数時間にわたる会見は遠来の三氏を失望せしめて終つた。」
- (9) 伊藤友久は、土田杏村の巡回講演について、下伊那郡青年会主催ではなく、下伊那文化会の主催であるとしているが誤りである。また、土田は、「その講義の中で、プロレットカルトを目指した信濃自由大学の設立経緯について触れている」としているが、その出典は示されていない（伊藤 2001a：137）。
- (10) 横田憲治は、堀尾陸郎が平沢桂二と一緒に来たときのことを、次のように証言している（「証人 証人横田憲治」1924年6月13日、『治安警察法違反事件刑事記録』第4冊）。  
「大正十二年二月中 堀尾陸郎カ平沢桂二ト共ニ私宅ニ参リLYLト連盟ヲ脱退スル様勧誘シマシタ 其勧告ノ理由ハ社会主義ハ社会国家カラ危険視シ排斥サレテ居ル故 左様云フ主義ヲ信テルノハ一家一族ニ累ヲ及ホスカラ此ノ際断然罷メタ方カ宜カロウト云フ事テアリマシタ 其当時北原阿智之助カ私ノ父ニ連盟ヲ脱スル様ニ勧告カアリ 父カラモハ釜敷ク云ハレテ居リマシタ 左様ノ次第テ私ハ一家ノ事ヲ考ヘ直チニLYL脱退ノ決意ヲ為シ同月二十六日脱会届ヲ認メ羽生ニ送りマシタ 尚同時ニ連盟ノ脱会届ヲ羽生ノ手許ヘ送ツテ置キマシタ」
- (11) 平沢桂二は、堀尾陸郎から脱会を勧告されたとき、LYLの存在を堀尾が知っていたことを「不思議ニ思ヒマシタカ秘密結社ノ事カ堀尾ニ判ッタトシテ見レハ同人ノ勧誘ヲ退ケル訳ニハユキマセヌ故私ハ同人ニ自由青年連盟及LYLヲ脱退スル様ニ云フテ置キマシタ」と述べ、一方、今村邦夫に対しては、「裏面テハLYL会員トシテ尽力スルガ表面上脱会シタ事ニナリマシタ」と証言していることが知られる（「証人 証人平沢桂二」1924年6月2日、『治安警察法違反事件刑事記録』第4冊）。平沢は、表面では自由青年連盟を脱会しながら裏面では関係が続けてきたことを、のちに平沢の三女晶子の義父となる安藤重一に宛てた手紙の中で、その思いを次のように記している（安藤重一宛平沢桂二の手紙、1923年8月8日、平沢徹編 1991：102-106）。  
「兄にお逢ひしてから後の私の行動——それは兄の御手紙に答へるためには是非とも聞いて頂かなければならないことです  
実は私はあの当時も今日もですが 表面は自由青年連盟と手を切つて 裏面にては深く関係を続

けて来たのです。

私の思想はもう如何なる圧迫にも抑圧にも枉げることは出来ないのです 唯運動と宣伝とをより効果あらしむるために圧迫を避ける方法として思想を捨てたかの如くよそほふことがあります、

私は最後の場には親にも兄弟にも妻子にも逆き得る決心をもって居ります、

然し今逆くことが何らの価値を有せず、却って大衆と離反し一ぼっちになるばかりです

一ぼっちで何んの仕事が出来ませう、

私達の思想は大衆を目的とし社会を変革せんとするものです

決って自分一人の享樂的のものではないのです これが人に変節漢笑はれる苦悩を忍んでも表面連盟と手を切って 白色テロリズムに降服した所以です

私の思想は圧迫されると共に反発して益々深くなっていくのです、

此れで大体私の現在の行動も御推察下さることゝ思ひます、」

また、北原理一は、脱退を勧告されたときのことを、次のように回想している（北原編 1982：33-34）。

「当時県会議員の北原阿智之助氏から私に、或る旅館に来るように招きを受けた。北原氏は私と同じ祖先の北原であるので面識があった。出掛けてみると、平沢桂二、横田憲<sup>ママ</sup>一、北原亀二の三君が居り、私と四名は北原、高田両県議の前へ並んで、自由青年連盟から脱退するように勧告を受けた。」

なお、北原亀二は、約10ヵ月後の1924年1月には自由青年連盟の常任委員として運動に復帰している。

- (12) 猪坂直一の回想によれば、横田憲治、平沢桂二、須山賢逸の3人が自由大学の趣旨や経験を聞くために訪れたのは「(大正)十二年春」としている（猪坂 1967：56-57）。しかし、山越脩蔵の横田宛の手紙（横田憲治宛山越脩蔵の手紙、1923年11月9日、山野編 1973：1）の「高倉氏や他の諸兄から充分御きゝとり下さったのをせめてもの満足と致します」との文面からみて、23年春に続いて最終的な打ち合わせのために再度訪問した内容とは考えられない。したがって、横田ら3人が上田を訪れたのは23年の11月初旬ということになり、猪坂の回想は記憶違いだと判断できる。これまで、猪坂の回想に依拠して、横田ら3人が上田を訪れたのは23年春としてきたことは誤りであり、ここで訂正する。また、佐々木敏二が猪坂からの聴き取りとして、タカクラ・テルが住んでいた所を「杏掛」としているが、「別所温泉」が正しいことになる。

なお、伊藤友久は、横田、平沢、須山の3人が猪坂直一を訪ねたとき、「自由大学の趣旨に対する考え方の相違から大激論になった」とし、その出典として『上田近代史』（上田市、1970年）をあげているが（伊藤 2003：64-65、73）、『上田近代史』には「LYLメンバーと信濃黎明会の会合が大正十二年一月にもたれたことは先に述べたが、数ヵ月後、飯田町の青年たちが猪坂を訪ね高倉に紹介されて、十二月に信南自由大学が生まれる」とあるだけで、激論があったとは記述されていない（上田市史編さん委員会編 1970：507）。伊藤は、前記論文の注(26)で、「この件に関する賢逸宛書簡類及び書類については別稿に譲りたい」とあるが、未だ公開されていない。また、伊藤は、別の論文で、「須山賢逸は、信南自由大学開設前に信濃自由大学の創設者へ会いに行き、その足で別所温泉に居住する上小農民組合連合会に所属する高倉輝へ相談。この時、信南自由大学の開講講師役に山本宣治を紹介される」としているが（伊藤 2009：56）、須山がタカクラを訪れた時期は、「信南自由大学開設前」で、「別所温泉に居住する」タカクラを訪ねているとすれば、23年の11月初旬頃と考えられるが、その頃にはまだ上小農民組合連合会は設立されておらず、設立されたのは1928年4月である。またタカクラが山本宣治を講師として紹介したとあるが、その出典は示されていない。

- (13) 田嶋一は、土田杏村が「近代教育学の祖ともいわれるコメニウスの教育論・学校論に注目し、

自由大学運動の意義をコメニウスにまで遡って説明していることは、きわめて興味深い」と指摘している（田嶋 2019：95-96）。相馬伸一は、土田杏村が信南自由大学「設立の趣旨」を執筆するにあたってイギリスのモーリス・キーティング訳による英語版『大教授学』から「生涯学習的論点を見いだしていた」ことを指摘している。相馬によれば、岡山大学附属図書館の杏村文庫には、辻幸三郎訳によるコメニウスの『大教授学』の翻訳『聖の世界と教育』（目黒書店、1924年）と、その底本であるキーティング訳による英語版『大教授学』（1917年再版）が所蔵されており、「土田が『大教授学』から生涯学習論的視点を見いだしたのは同書第3章の記述かと思われる」と述べ、辻訳『聖の世界と教育』21頁の「斯様に世界は吾々の保育所であり学校である。それ故にその彼方に吾々が此世界の学校を卒業し永遠の大学に送られるとき趣くべき或る場所がある。」と記されている辻訳の21頁の余白に「永遠ノ大学」と書き込みがあり、そして、キーティングによる英訳34頁の、対応する箇所にも同じく「永遠ノ大学」との書き込みがあることを指摘し、「高等教育の場が奪われていた農村に自由大学を設け、生涯が教育と学習の期間であるという理想を現実化しようとした土田にとって、『永遠ノ大学』という語には響くものがあったのかもしれない」と述べている（相馬 2022：21-22）。

(14) 山本宣治の生涯については、佐々木敏二『山本宣治』（上・下巻、汐文社、1974・76年）を参照のこと。なお、山宣と自由大学運動との関わりについては、「山本宣治と自由大学運動」（『信州白樺』第30号）で検討したことがある（山野 1978）。

(15) 山本宣治は、同志社大学予科で「自然科学概論」の授業を「人生生物学」と名づけて講義をした。政治科、経済科、文科を専門とし、生物学を専門とする学生ではなかったため、山宣は学生に分かりやすい講義をめざして、1921年9月から印刷代実費で、学生に講義資料を配付した。これをまとめたものが、のちに自由大学や京都・大阪の労働学校でのテキストとしても用いられた『人生生物学小引』である（小田切 1979：575-576）。

また、山宣は、日本における常態の性生活の現状を欧米の性生活と比較することによって、欧米の性科学を移入することの妥当性と、移入する際の適用可能な範囲を見極めようとした。その目的のもとに、「人生生物学」講義の受講者だけでなく、産児調節運動における講演会の聴講者、自由大学や労働学校の聴講者を対象として、安田徳太郎とともに、性生活調査を実施した（柴本 2005：67-68；柴本 2008：39-42）。信南自由大学では17通（配布数60通中）、魚沼自由大学では22通（配布数90通中）が回収され、1924年2月26日における回収数369通、最終的には1146通をもとに発表された論文が「若い男の性生活－現代の日本人に就いて調べた統計の研究－」（『生理学研究』第3号～第10号、1924年4月～25年2月、佐々木敏二・小田切明德編『山本宣治全集』第1巻、1979年、汐文社、に収録）である。

(16) 1924年1月12日に制定された「規約」は現在、発見されていない。

(17) 山本宣治の鼎村青年会での講演題目は『南信新聞』（1923年1月12日）では「青年男子に於け性的生活の内情」となっている。

なお、須山計一によれば、飯田から20分ほどの鼎村の須山賢逸の家には、自由大学の講師が訪ねて来て、「離れへ一泊して、記念の画帖に一筆したりした」が、「なかで変わっているのは山本宣治で、ローマ字で『万国の労働者団結せよ』とかき、その下にワケのわからぬおたまじやくしのようなものをかいていつた。あとで、それがイモリの精虫であることがわかつた」という（須山 1953：51）。別の回想では、「生家蔵の画帖の一冊には、当時、自由大学の講師としてやってきた山本宣治の次の一文がある」として次のように書いている（須山 1974：79）。

「Vita brevis, Scientia longa, 1924, 1gt, 13nt.

さらにつづけて Usinau Mono wa Kusari nomi !

Bankoku no Musan-sha yo ! DANKETSU SEYO!

と書いてある。そしてその下に奇妙な、三角形の中の精子のような小動物を配した図がかかっている。兄（注、須山賢逸のこと－引用者）の話では、これは山本宣治が学位論文をとった『いもりの精虫の研究』の画だということだった。」

- (18) 胡桃澤盛は、最終日のタカクラ・テルの講義内容については記しておらず、茶話会でタカクラから聞いた「面白い話」を書き留めている。日記には、「有島武郎<sup>マサヲ</sup>死中の前後の事。近松秋江、宇野浩二の話しや、近松の青草の話し、又講師の立場、創作をやりたい、都会に居ては不純になるからと信州へ引込んだ。そして自己を真実に見つめる為めにはなるべく人に講義なんかする事はよくないと思って居る。然し自由大学へ来た時は友と云う感じで行く。一人の人を救くう者は全部を救う、と云う事による。そして将来新しい時代を作るその単位を作るものは上から押しつける様に教えられる教育ではない。それは下から自らやらんとする、自由大学より他にないのであると考えたのだ」とある（「胡桃澤盛日記」刊行会編 2011：148）。タカクラは、有島武郎の心中があった直後、現場を訪れているが（高倉 1939：57-60）、その有島についての話、自由大学へ出講するときの心持ちや新しい時代をつくるのは自ら学ぼうとする者が集まる自由大学の教育であることなどを語ったことが知られる。

- (19) 信南自由大学が設立されたことにより、上田の信濃自由大学は上田自由大学に改称するとともに信南自由大学も伊那自由大学と改称することになった。猪坂直一やタカクラ・テルからの提案によるもので、猪坂は横田憲治に宛てた葉書の中で、「御ハカキ拝見いたしました。高倉さんと御一緒に御地へ参りたいと思ひましたが、私も山越君も仕事の都合上行かれなかったのは甚だ遺憾でした。自由大学も五十名得られれば結構ですね。余り多いよりは貴兄も緊張して経営が出来る訳です。健全なる御発展を祈ります。次に名前の件、早速御承諾を得感謝に堪へません。当方は上田自由大学としたいと思ひます。何れ他の諸君とも相談の上、決定し次第御報告いたします」と書いている（横田憲治宛猪坂直一の葉書、1924年2月2日、山野編 1973：3）。猪坂は、『回想・枯れた二枝』で「信南自由大学はその年（注、1924年－引用者）の秋の第二学期から伊那自由大学と改称することになったが、同時にわが上田の信濃自由大学は上田自由大学と改称し、今後さらに県下に自由大学が設立されるであろうことを期待した」と記しているが（猪坂 1967：57）、記憶の誤りである。

伊那自由大学会の規約は、次のような6条からなる簡単なものであった（横田編 1924：21-22）。なお、『南信新聞』（1924年2月3日）記載の規約とは条文に異なるところがある。

- 「第一条 本会を伊那自由大学会と称し、伊那自由大学の維持発展を図るを目的とす、  
第二条 本会員は伊那自由大学講座を連続聴講することを得、  
第三条 会員の会費は一ヶ年金十二円とし、一月、三月、十月の三回に分納すること、  
第四条 本会に左の役員を置く  
    理事 若干名  
    理事は会員中より選出す  
第五条 理事は伊那自由大学の経営及び本会の事務を分担するものとす、  
第六条 会員総会は随次之を開く、  
    尚右会員外であつても、伊那自由大学の講座に出席することが出来ます  
    但し一講座（五日間）に就き聴講料として金三円を申請けます、」

- (20) 新明正道の回想は、「大正十三年の十月」で、会場も「小学校」となっているが、伊那自由大学にはうろ覚えにせよ3回出講していることは記されているので、この時の回想を1924年3月のものと判断した。

- (21) 福元多世は、兄の平沢桂二が検挙され家宅搜索を受けたときのことを、「大正十三年の三月十七日早朝、サーベルをさげた村の駐在さんに案内されてどやどやと入って来た私服の刑事が兄を連れ去った後、残りの数人が家の中を探しまわりました。土蔵の中にまで這入りこみ、手当たり次第引きまわし、はては蚕室の階段裏に積んであった叔父たちの使った教科書までとり出しました。明治二十四年版の大型『言海』を「これはげんかいなだか」と言ってそれまで包んで、それぞれ大風呂敷で背負ってゆきましたが、何ともご苦労様でした。きけば山番のおまわりさんまでかり出されたそうです」と回想している。また、「刑事に連行された兄のことを知った西屋の叔父が登って来た頃から大騒ぎとなり」、飯田の三原や旅館の2階座敷を数部屋を借りて本部とし見張りをしたが、そのときのことを「大久保の未決監には差入をしてその都度情報を得て来たのですが、此の二階の窓からは裁判所へ入る後姿と、出る時の表情も手にとるように見る事が出来ました。一喜一憂する面々の中でどうしても忘れることが出来ないのは、独り子を拘留された横田のお父様の沈痛な面影です。／このお父様はそれから三ヶ月も経たない六月七日、急性肺炎がもとであっけなく逝ってしまわれました」と回想している（福元 1978：52-53）。
- (22) 土田杏村は、『文化』（第7巻第5号、1924年10月）に「自由大学とは何か」を再掲し、伊那自由大学パンフレット『伊那自由大学とは何か』を紹介したことから、横田憲治のもとに何通か送付依頼の書簡が残されている。その中には福島県磐城地方の労働運動家山代吉宗の「自由大学パンフレット『自由大学とは何か』残本ありませんか。若しあったら実費を以てお頒ちして戴きたいのです」（横田憲治宛山代吉宗の葉書、1924年11月12日、山野編 1973：32）という葉書がある。また、鳥取県八頭郡丹比村の小学校教員西尾勘治は、1917年に官製の「丹比青年会」に批判的な青年たちと「丁巳倶楽部」を創設し、24年に伊那自由大学パンフレットを入手してからは教育運動に着手することを提唱したという（蔭山 1977：72-77）。
- (23) 政治研究会下伊那支部には、伊那自由大学関係者も関わっており、11月20日の第1回支部総会で理事の木下幸一は10人の幹事の一人に選出されている（佐々木 1978：198）。また、千代村からは牧田正矩が創立準備活動に参画していたが、支部総会には榊原富男、楯一利、渡辺源逸とともに自由大学聴講者でのち伊那自由大学千代村支部の中心となる嶋岡己勝、楯操も参加している（清水米男編 1934：88）。大串隆吉によれば、横田憲治も政治研究会に参加したという（大串 1980b：114）。
- (24) LYL検挙事件の第一審判決は1924年9月30日に言い渡されたが、羽生三七、代田茂、今村邦夫、山田亮一、矢沢基司、今井敏造、林武雄の7名は禁固10ヵ月（未決通算60日）、関口光男、牧野英男ら4名は禁固8ヵ月（未決通算60日）、水野長治、桑原郡治ら5名は禁固6ヵ月（未決通算60日）、福島国男ら3名は禁固6ヵ月、執行猶予3年、他に林は新聞紙法違反で罰金80円という判決であった。今井敏造と水野長治は控訴せず服役したが、この2人と執行猶予の3人を除く14人は東京控訴院に控訴した。控訴審判決は25年2月10日にあり、羽生、代田、今村、山田、矢沢、林の6名は禁固8ヵ月（未決通算60日）、関口、牧野ら8名は禁固6ヵ月、執行猶予3年、林は別に罰金40円であった。実刑を言い渡された6名は大審院に上告したが、4月15日に上告棄却の判決があり、羽生、代田、今村、矢沢の4名は4月27日に、山田と林はその数日後に飯田刑務所へ入獄した（佐々木 1978：191-193）。
- (25) 「伊那自由大学後援会」が遅くとも1925年4月にはつくられていたことは、会計事務を担当していた林源が横田憲治に宛てた手紙の中で、「僕が飯田へ早く帰れば後援会員の方の集金はする心算です（あらかじめ話だけして置いて貰へば）／理事会の方とはとにかくとして、会計のことにつき、平沢兄と、須山兄に、後援会員の方の話だけ、して置いて願へないでしょうか」と、「後援会員」のことに触れていることから判断できる（横田憲治宛林源の手紙、1925年4月29日、山野編 1973

：46)。後援会は、自由大学が飯田から支部組織に移り、千代村支部、竜峡支部、下条支部がつけられ、機関誌『伊那自由大学』第1号が発行された1929年3月に解散になるまで存続した。後援会の解散は、峡谷の村落に自由大学支部が建設され、「昼働いて夜学ぶといふ自由大学の本質的組織が初めて可能とせられる時が来」て、「今や一本立ちになつて自分達が自我教育の正道を歩んで行かれるようにな」ったことを、その理由にあげている（林 1929：23）。伊那自由大学会計報告（自大正12年至昭和3年）によれば、収入1954円70銭のうち、「会費及聴講料」が1099円30銭で収入の56%であるのに対し、「後援会費」は467円90銭で収入の24%を占めており、大きな比重を占めていたことが知られる。解散時の後援会員には29名の名前が知られるが、発起人の横田憲治、平沢桂二、須山賢逸、理事であった代田保雄、『信濃時事』主筆の池田愛泥の他に、下伊那国民精神作興会の森本州平、大平裕郎の名前がある（『伊那自由大学』第1号）。林源によれば、後援会員は「殆ど私一人で集めた」とし、「大平裕郎は私の居た銀行（注、百十七銀行－引用者）の頭取、森本洲平は専務であった。前沢明文は伊那銀行の頭取、その他大勢の人達が寄附をしてくれたが、それは働きながら勉強をしたいという真摯な青年達の集団であったから寄附をしたのであって、思想的な立場には双方ともに余りこだわらなかった」と書いており（林 1976：6）、また、「終り頃に一口20円の後援会員を募って借金を払った。全くの淨財で、自由大学の運営に口出しをする人はなかった」としている（林 1982：2）。

なお、自由大学が赤字になれば、横田憲治や平沢桂二が借金を負担していた。横田憲治の妻千世によれば、平沢桂二の母（ぎんよ）が「憲治や桂二のする自由大学はいいことだけれども、生徒が少なきゃ借金が残るだけで、どうしようもない」と愚痴をこぼしていたとう（横田千世より聴取、1972年8月10日）。

- (26) タカクラ・テルは、横田憲治に宛てた手紙の中で、「自由大学はこれからが本舞台ですからこれから一つうんと御尽力を願ひます。（中略）それには何より講師の著書を会員に読ませるやう諸兄が努力せられる事です。今度出た出の『プラトン』や土田の『島国家』や諸兄が第一に読んで会員と研究会でも開く可きものだらうと思ひます。どうしたって自由大学だけでは雰囲気が出来ません」と書いている（横田憲治宛高倉輝の手紙、1924年10月23日、山野編 1973：29）。また、土田杏村は「会員をあつめるについては、聴講者の力に待って下さい。聴講者を消極的に任せておかないで、聴講者各自が幹部であり委員である様の気分をつくって下さい。一つの講義が終った時、昼でも夜でももう一度その聴講者を集って貰って、講義の批評や、その次の講義についての準備打合せを全員にはかるなども一法だと思ひます」と提案している（横田憲治宛土田杏村の手紙、1924年12月13日、山野編 1973：35）。

会計を担当していた林源は、熱心な聴講生の一人である大下条村の佐々木忠綱に宛てた手紙の中で、25年1月のタカクラの「文学論」を欠席したことに「さみしかったことです」と記し、2月は「政治学がなければ哲学概論がある筈です。ぜひ出ていらしゃい。まじめな若い人達を、誘って来て下さい」と、村の若者を誘って自由大学を聴講するように依頼している。その手紙の中で林は、当時の心境を、「自由大学に対するぼくらの熱情は、その（このところのそのは自由大学のです）『大いさ』の為に、会員を、もつと、確りと、作ることに、懸命です」と語っている（佐々木忠綱宛林源の手紙、1925年1月22日）。

なお、南信新聞には、プロ生「自由大学に望む」という投書があり、「各講座の終了を待ってその講演を収録したパンフレットを発行していただきたい」という要望がなされている。「自由大学の最大特長は学問の独立であり労働しつつ勉学し得る事といわれます」。しかし、「三円乃至拾円の金は吾々プロレタリアの人達には決して僅少な額ではありません、自由大学が労働しつつ勉学する事を一つのモットーとするならばその労働なる意義は徹底的でなければなりません。私が今こん

な事を言うのも無駄かも知れませんが、懸命なる諸君はすでにそうした計画をなされつゝある事とは信じます、とにかく世間には大学会の会員にも聴講者にもなり得ない人達が無数にあるのです」と、その理由を書いている（『南信新聞』1924年1月9日、清水 2008：6）。自由大学で勉強をしたいが、経済的理由でそれができない青年が、せめて自由大学の講義録の発行を要望したものである。理事者もまた働く青年たちであり、講義録を発行する余裕がないのが実情であったと思われるが、講義録発行について議論されることはなかったと考えられる。

(27) この点について羽生三七は、「われわれは自由大学を後援、協力した面が相当あった。当時の封建的、軍国主義的風潮のもとで、自由大学は一定の進歩的な役割を果たしていたと思う。／『自由大学』の諸君から協力を要請されていたばかりではなく、積極的な講師のあっせんなども行った。政研下伊那支部、郡青とはそれぞれ関連があり、自由大学へ来た講師が、郡青主催の講演の講師を勤めたこともあったと思う」と述べている（筆者宛羽生三七の手紙、1973年4月5日、羽生 1978a：5-6）。また、羽生は、別のところで、自由大学を「ブルジョワ民主主義ということで攻撃する人がいましたが、私たちはそうじゃないと思っていました。どういう機関であろうと、今の封建的な考え方から多少とも解放されて、リベラルな考え方になることはひとつの進歩の前提条件だということで、僕らは自由大学擁護の立場にまわりました」と証言している（羽生 1978b：337）。横田憲治も政研下伊那支部に加盟しており、1925年8月の支部大会で調査部員に選ばれている（佐々木 1978：268）。しかし、知られる限りでは、政治研究会下伊那支部に関わっていた青年のうち自由大学を聴講した者は多くはなかった。

(28) この間の今中次麿と新明正道の講義日程をめぐる土田杏村・猪坂直一・横田憲治の書簡のやり取りを見ていると、情報が錯綜して、今中と新明の講義日程が25年3月下旬で重複してしまったことが知られる（横田憲治宛猪坂直一の葉書、1925年2月20日、山野編 1973：40）。そこで3月下旬の講座は今中で決めて、横田から新明に対して断りの手紙が行き、新明も「御手紙拝見、夫れではこの秋に廻して頂きます」（横田憲治宛新明正道の葉書、3月11日、山野編 1973：43）と横田に返事を出している。ところが、その新明の返信があった直後に、今度は今中から都合で3月に出講できなくなったとの手紙が来たため、横田は新明に3月に出講できないか問い合わせたが、新明からは「急のことで一寸都合がつきませぬ（横田憲治宛新明正道の葉書、3月23日、山野編 1973：45）」と断りの葉書が来て、結局、今中・新明の講座は開くことができなかったのである。

なお、新理事となった中塚稲美は、この時期に3講座開講することについて、「ほんとにいい講師ばかりで取り逃がしたくはありません」が、「自由大学の財政を視るにと誠に逼迫してゐます、欠損つぐに欠損を持つてする中でこの三講座を開くには四百円以上の金をもってかゝらねばならぬ」とし、「現在三講座を開く財政的能力なしと憶測し二講座に止めたかどうかと思う」と、横田に手紙で進言している（横田憲治宛中塚稲美の手紙、1925年1月24日、小林 1936：89-90）。

(29) 農村研究会のよびかけは、1925年12月16日付の第3回会合（12月20日、会場天竜倶楽部）を通知する案内状で行われ、それには「『自分達の生活に手近い問題の研究を』と云ふ立場で本年三月農村研究会が組織せられたことは御存知のことと思ひますが、明瞭に主旨の発表をしなかった関係上、貴兄の御賛成を得なかったかと思ひます。第二回の会合に於て、会の目的、会員の資格などが決定しました。是非とも御賛成を願ひます」とあり、「此の会の目的は農村に於ける経済的、政治的、社会的及び技術的の諸問題の一般的研究及び伊那地方特殊な其等に関する諸問題の研究を行ふにあります。会の発達につれてそれら諸問題に対する運動への準備もしたと思ひます」と、研究会の目的を記している。研究会の設立を報じた南信新聞によれば、「農民自身によつて現実の農業及農村の諸問題の批判を行い、これの合理的解決を求めねばならないと信ずる吾々は、この立場より広く同志を募り現実の農村に適切せる政策を講究し農民の利益を擁護すべく農村研究会を設立し

た」とある（「農村研究会が組織を整備する」『南信新聞』1925年12月22日）。この研究会の賛成者には、原清、清水重夫（山吹）、林丑之助（河野）、平沢桂二（神稲）、代田智寿（高木<sup>ママ</sup>）、須山賢逸、北原理一（鼎）、楯富晴（千代）、横田憲治（上郷）、今村多之治、塩澤義人（松尾）、代田保雄（伊賀良）、清水清晴（竜江）、原田島村（飯田町）、牧島哲（泰阜）、平岩準一（下久堅）の名前があり、事務係は北原理一となっている。研究会の賛成者には自由大学関係者の名前とともに自由大学を批判した政研下伊那支部の北原理一の名前があるのが注目される。この研究会には『潮音』に短歌を数多く投稿し、その後『潮音』から離れ、農民自治会に関わることになる竜丘村の中田美穂も参加したが（大串 1980b：107）、研究会の詳しい状況は不明である。

- (30) 京都版『クラルテ』の創刊号の巻頭言には「社会が悩む、故に我に思考があるのだ。これが吾人の総てである。そしてこれ以上の一切は蒼空だ。現代の悩みを切離するものは悩みの源を知らねばならぬ。社会に光輝たらしめるものは、暗黒の秘緯を探らねばならぬ。『クラルテ』は暗に育まれた光である」とある。創刊号には、小牧近江の「フランスに於るクラルテの人々（クラルテ創刊に際して）」、住谷悦治「唯物史観の一角に立ちて芸術を観る」、新明正道「称名寺の住職」、波多野鼎「権力意思と協働意思（断想）」などが掲載されている。3号まで刊行された。同人14人の中には東大新人会の出身者が多いが、自由大学の講師も住谷悦治、波多野鼎、タカクラ・テル、新明正道、松沢兼人の5人を数え、反戦・平和の精神が講師の中に流れていたことが知られる。

大崎哲人は、「クラルテ運動は反戦・平和の社会運動として世界的な知識人の芸術運動における統一戦線を追求した」とし、クラルテ運動の日本版である『種蒔く人』も社会主義者や民主主義者などを含んだ「芸術運動における共同戦線を意識して社会主義の方向で進路をとっていた」という。それゆえ、「その後の日本のプロレタリア文学運動の源流となりえた」とする。そしてクラルテ運動は、日本の中で、あちこちに種を飛ばし影響を広げたが、1925年6月に住谷悦治が京都で創刊した『クラルテ』、小林多喜二が中心となって北海道小樽で24年4月に発刊した『クラルテ』などをその例としてあげている（大崎 2005：52-55）。

- (31) 谷川徹三は、自由大学に出講することについて、「非常に熱心で真剣に聴いてくれた。別に教養がなくても、高い向学心に燃えて、反応はじかに伝わってきた。そういう意味でいつでも気持ちよく話すことができた」と、回想している（谷川徹三の証言、自由大学研究会シンポジウム、1895年5月26日）。
- (32) このタカクラ・テルの手紙には、「古典文学は松本の自由大学の方へ聞き合した所、松本ではその方を希望するとの事ですから、あちらでやる事にしようと思ってをります」とある（横田憲治宛高倉輝の手紙、年月日不詳、山野編1973：60）。「松本の自由大学」というのは、松本自由大学ではなく、自由大学運動の影響を受けて長野県内各地に青年たちが「自由大学」の名称を付けて自主的に設立した学習機関の1つで、東筑摩郡塩尻村に同人会が設立した「南信自由大学」だと思われる（『信濃日報』1925年12月27日）。26年の1月か2月頃にタカクラの「文学論」が予定されていた（『信濃日報』1926年1月5日）。松本自由大学は25年4月に運営の中心であった唐澤正平が群馬県に転勤させられのち、自然消滅している。
- (33) 平沢桂二は、この手紙の中で、唯物史観について「もっと科学的に研究し、科学的に批判すべきだと思ふ、さうしなくては的なき的に射る矢であって何等の力もなく批判にもならない」とし、社会主義者（日本の多くの社会主義者と言ふ人々）が哲学も学ばず、宗教も知らず、芸術も味はらずして唯彼等仲間にもみ都合よく書かれたるこの方面の文献の読み聞きして上層建築が何だかだと言ふて哲学、宗教、芸術を批判し攻撃すると同じく、哲学者、宗教家、芸術家の多くの人々が自分の立場の固執し深く心を平静にして研究もせずしてマルキシズムや社会主義を嘲笑する。共に愚だ共に悪だ（何も知らない国粹主義者などは論外だ）」と述べている（福元 1978：60）。平沢は、

マルクス主義をきちんと研究しない社会主義者も、また反社会主義者をも批判する立場に立っていたことが知られる。

- (34) 佐竹哲雄は、1928年11月に伊那自由大学で2回目の講義を行うが、横田憲治に宛てた手紙（横田憲治宛佐竹哲雄の手紙、1928年7月30日、山野編 1973：69）の中で、「第一章実在問題（三七頁）から始めることになりました」とあり、第1回目の講義は36ページまでで終わっていることが知られる。
- (35) 横田憲治宅の火災に際して、タカクラ・テル、土田杏村、谷川徹三からの見舞い状が残されている。タカクラのを紹介すると、「唯今市田の片桐君より御家御火災の旨承知実に何ともお見舞の申し上げやうがございませぬ。さぞかしお愕きになった事と存じます。唯だ謹でお見舞い申し上げます。何より後の御疲労でお体を害されぬやう願ひ申上ります」とある（横田憲治宛高倉輝の葉書、1926年9月27日、山野編 1973：62）。
- (36) 「前橋へ参る」とは、1926年1月10日に群馬県前橋市に設立された群馬自由大学の第1回講座で谷川徹三は2月6日から「哲学史」を講義することをさしている（山野 2022a）。長島伸一は、「谷川は前橋へは講義していない」としているが（長島 2022：229）、誤りである。
- (37) その後平沢多世は、1927年4月に早稲田大学文学部史学科西洋史専攻に史学科最初の女子聴講生として向学心に燃えて入学する（大槻 2005：15-25）。多世は、24年10月に森山達二牧師により洗礼を受けているが、静岡県田方郡西豆村小下田出身で28年に東京神学社を卒業し、長野県の飯田伝道所に赴任した福元利之助と、同年10月に結婚し、東京の戸山教会で高倉徳太郎牧師の司式により結婚式を挙げている。多世は、敬虔なクリスチャンとして生涯を過ごしているが、著書にゼームズ・モファット教授著・福元多世訳『パウロ及パウロ主義』（改革社、1930年）がある。

夫の利之助は1933年、山梨教会牧師となったが、翌34年、伊藤恭治・今泉源吉・上田丈夫らと『信仰と生活』誌を刊行し、聖書の真理にもとづいた真のあるべき教会の姿を求める「公同教会運動」を起こしたことから、山梨教会長老派の島田正己・浜口永雄らと対立し、山梨教会は分裂し、34年8月、利之助らは新たに山梨公会をつくった。しかし、戦時体制が強化される社会情勢のもと、今泉源吉を中心とする数人の指導者によって雑誌『みくに』が発行されると、35年1月には山梨公会は公同運動からずれてキリスト教的な皇国主義運動である「みくに運動」に移行し、利之助の説教も、キリストの十字架にあがなわれた者は、日本人として何をなすべきかをいえば、天皇陛下に忠誠をつくすことである、と繰り返されたといわれる。利之助は、みくに運動の路線の中でキリスト教信仰を持続することの矛盾と困難に直面し、また、日曜礼拝出席者も激減し、財政的にも苦境に立たされ、38年8月には牧師辞任を表明、11月には山梨公会を解散した。山梨公会解散後は、夫人多世、家族とともに飯田に帰り、伊賀良小学校教員として子弟の教育に従事し、教え子から敬愛されたが、1951年に死去した（山梨教会百年史編纂委員会編 2009：57-83）。なお、飯田に帰った利之助は、雑誌『無花果』を発行し、随筆や「ヨハネ伝夜話」を執筆、多世も「身辺雑記」、平沢桂二も俳句を掲載している（福元多世は、『無花果』第20号～第26号について、1991年に復刻版を出版している。）また、福元利之助とみくに運動については、小室尚子『『みくに運動』におけるキリスト教土着化の問題－福元利之助にとっての『みくに運動』－』（『神学』第59号、1997年）がある。

- (38) 伊那自由大学の支部組織化は1926年1月ごろには構想として持ち上がっていたと思われ、千代村などのほか大下条村にも支部をつくる計画があった。林源が佐々木忠綱に宛てた葉書には、「手紙でいろいろと近日中にお話しますが、大下条に自由大学の支部を作りたいと思ひます。中心になって、いろいろお骨折を願ひます。今迄自由大学に関係した人々を説いて会員になつて貰つて下さい」とある（佐々木忠綱宛林源の葉書、1926年1月28日）。ただし、大下条村には支部は作られな

かった。

- (39) 林源は、当時、百十七銀行の銀行員であった。伊那自由大学には第2回目のタクラ・テル「文学論」の講座から出席し、会計事務を担当した。後援会が出来てからは後援会の仕事も担当し、支部が組織化されると、講師との交渉も林が担当した。自由大学後、百十七銀行、飯田銀行を経て1963年、八十二銀行東京支店長を定年退職、その後新潟県高田市にある有沢製作所に入社、81年副社長で退任、その間、中学卒業生のために定時制高校を、勤労青少年のために青年学級を創設している。著書に俳句と半生の記録を収録した『杜の都 雪の高田』（非売品、1981年）がある。米山光儀は、林の新潟県高田（現在の上越市）での勤労「青少年教育の実践は、自分が青年期に自由大学で学んだ経験に基づいており、自由大学の影響と考えることができる」と指摘している（米山 2022：69；米山 2024：94-103）。
- (40) 楯操は、伊那自由大学では、第1回講座、山本宣治の「人生生物学」からほとんどの講義を熱心に聴講し、筆記ノートをも3冊残している。自由大学の講義の中ではタクラ・テルの「ダンテ研究」に最も感動したという。楯は、自由青年連盟や政治研究会下伊那支部の発会式にも参加しており、社会運動にも関心を寄せていたことが知られる。1930年に「新興農民会」を組織した頃、楯は、上小農民組合連合会の井沢譲と連絡を取っており、井沢によれば、「楯操と1、2回会ったことがある」という（井沢譲より聴取、1976年7月23日）。楯は、30年1月、上田自由大学の最後の講座となった安田徳太郎「精神分析学」の講義を聴講しているが（「上田自由大学会計簿」；山野 2022b：110）が、このとき楯が上田に来たのは井沢と会うためであった可能性が高い。なお、楯は、31年9月にプロレタリア科学研究所から改組されたプロレタリア科学者同盟の千代支局で活動が続けたが、32年2月に軍隊に招集されたため小沢一が引きついだという（青木 1964：384）。自由大学後は、1931年の村の講演会で江渡狄嶺と知り合い、その弟子となる。理想社会のあり方を模索する楯は、狄嶺の農業共同体構想に注目したのである。戦後、山岸巳代蔵によって唱えられた「ヤマギシ会」のコミューン運動と出会い、1955年に「特講」を受け、入会している。楯については粟谷真寿美「農業青年・楯操の歩みー自由大学の回想よりー」（『信大史学』第44号、2019年）及び「伊那自由大学、楯操の『歩き歩いた末』ー自由大学での学びとその後ー」（大槻宏樹・片岡了・古市将樹・村田晶子・米山光儀編『民衆の感じる痛みに応えようとして生まれた自由大学ー自由大学運動100周年記念東京集会論叢ー』エイデル研究所、2024年）を参照。
- (41) 山田（今村）邦夫によれば、自由青年連盟の発会式に参加した青年のうち千代村からは、牧田正矩、楯一利、榊原富男、小沢熙、楯操、清水金藏、清水米男、北沢元夫の8名が参加をしている（山田編 1995：79-80）。このうち、楯操、清水米男の2名が自由大学関係者である。
- (42) その後、郡青と政研下伊那支部は、11月19日に予定していた軍教反対示威運動が警察の圧力で中止となり、23日に飯田町若松座で「軍教反対大演説会」を開催したが、これも演説のほとんどが中止を言い渡されたため、在郷軍人会と軍教問題について対談会を行うことを申し入れ、これを軍人会側も受け入れ、12月3日に軍教問題対談会が郡役所で開催された。討論会は、清水迪夫によれば、議論は「平行線」に終わったのではなく、「軍人会側の周到なる準備と計画によって、終始その優勢のなかに進行し」、下伊那青年運動の衰退の始まりとなったことを指摘している（清水 2009：36、45）。
- (43) この村青代表委員会が決めた方法は、支会文庫間で蔵書を定期的に交換し、利用者に豊富な情報を提供する方法で、itinerating libraries または travelling libraries（巡回文庫）と呼ばれるものであり、英国では19世紀初期に見られ、同世紀後期に大学拡張の一環として発達し、それが米国経由で日本に輸入されたといわれる（岡本 2021：45-46）。
- (44) 宮坂広作は、千代村支部「趣旨書」について、「観念的な色彩らしいものもないわけではない

が、社会変革＝新社会建設のための理論習得の必要性和、文部省的教化は勿論のこと、薄手のパンフレットの、ダイジェスト的知識にあきたりないで、本格的、系統的な科学の学習と理論の主体化を強調する点で、この趣旨書はむしろ実践と理論の統一をめざす志向で書かれたものと思われる」と述べている（宮坂 1968：474）。

- (45) 今川尚の講義は、『南信新聞』（1927年11月14日）の記事によれば、「来る十五日より期間は三十日迄」となっているが、楯操の記憶により、5日間とした（楯操より聴取、1972年8月2日）。
- (46) このときに改定された伊那自由大学会規約は全17条からなるが、特徴的な条文を示すと、「三、自由大学の精神に賛成し、其の経営発展に必要な一定の会費を負担する事を承諾したる者は何人も本会の会員となる事が出来る」「四、本会の役員は次の如くである／1 支部代表委員 若干名 其の数は会員の分布する地域に応じて是を分割し各地域の会員数に対して、按分比例を保つを原則とするも、当分は此の条項の規定に捕らはれない事とする／2 理事 若干名（其の数は必要に応じて増減し得る） 前記委員の互選を以て選ばれた者と其れ等の理事会に依り委員及講師中より推選された者を以てなる」「七、本会の経費は会費及寄附金によって支持せらる」「九、伊那自由大学の支持は各支部によって一村一名にても一支部とし現在を許す負担は会員数に按分する事」などが規定されている（山野編 1973：137-138）。
- (47) タクラ・テルは自由大学での講義の1ヵ月前、1928年11月1日・2日の2日間、大郡及び米川公会堂での千代青年会の講演会で「日本民族史」の講演をしている（清水編 1934：244）。
- (48) 北澤小太郎は、定期的に読書会をもったことについて、次のように回想している（北澤 1981b：22）。

「私の処（竜丘）では、有志と共に毎週一夜宛読書会（学習）を開くようになったのは、そんな雰囲気（注、自由大学への期待－引用者）の中で自由大学の予備勉強会みたいな気がして始めたのでありました。

最初は経済を学ぶ為に、高橋亀吉「経済学の実際知識」半年位かかりました。猪俣津南雄の「金融資本論」とか「賃労働と資本」とか段々むづかしいものに噛りつきました。（中略）

私の「グループ」は、僅か十人、多い時で十二～十三人、そして他町村の自由大学グループの代表者の会、「鼎」「飯田」等へ出かけて、連絡等結構それを楽しくやった気がします。

誰の家も生活が楽でなく、農家は肥料代が不払いとなり、教員給の支払い延期や無尽の停止、倒産の「せりもの」等、暗い世相の中で私たちはそうした社会、政治、経済の動きを自分たちの勉強の中で正しく把握したいと云うつもりでした。」

- (49) 天竜峡仙峡閣で三木清を囲んだ写真は、2022年9月に三木清の長女永積洋子が保管していた100余点の写真が永積家から兵庫県たつの市立霞城館に寄贈されたうちの1点である（『神戸新聞』2023年6月3日、筆者宛宮島光志のメール、2022年9月12日）。宮島光志（富山大学）より写真鑑定の依頼があり、調査したところ、写真前列中央の黒眼鏡をかけているのが北澤小太郎であること（北澤小太郎長男洋太郎の証言、筆者宛北澤恭子の手紙、2023年3月30日）、その北澤小太郎の左側が嶋岡潔に似ていること（嶋岡潔三男清文の証言、筆者宛嶋岡清文の手紙、2023年4月17日）、中列の煙突右側が林源に似ていること（林源長男良三夫人圭美の証言、筆者宛林圭美の葉書、2023年5月7日）がわかり、北澤小太郎の、三木清の講義の「題名は『経済学の哲学的基礎』会期は三日間、受講料は金壱円、地元の龍江青年会も共催でした。（中略）終了した三日目天竜峡の宿舎で開かれた有志参加の夕飯会に出て、私のような田舎青年が二三質問した事に、先生が非常に親切に答えてくれた事を覚えています」という回想（北澤 1981b：21）を踏まえると、この写真は、三木清が伊那自由大学に出講した際に、宿泊先の天竜峡仙峡閣で1929年2月17日に撮影されたものにほぼ間違いないことが知られる。

- (50) 小崎軍司は、タカラ・テル「耕す者は永遠である」のプリントを金井正宅で発見し、それを『信州白樺』誌で紹介しているが（小崎 1978：100-108）、『伊那自由大学』第1号掲載のものと比較すると、最後の4段落分が欠落しており、『伊那自由大学』掲載のものが全文と考えられる。
- (51) 岡本洋之は、千代村の青年たちが、イギリスのWEA（労働者教育協会）の「学問的自己教育の文化」（autodidact culture）を具体化するためには、土田杏村や自由大学の講師が「講義内容に対する問いを受講者に表明させ、その解決を期して討論や小論文作成をさせるべきであった」が、自由大学では講座での講義にとどまったとする。しかし、「千代村の青年たちは、指導者を超え自力で、英国流学問的自己教育の文化を具体化する一歩手前にまでせまったことは、教育発展史の一里塚として記憶に留められるべきであろう」と評価している（岡本 2021：47）。
- (52) この1930年2月の三木清の講座は、『長野県史』近代史料編第8巻1（1987年）に収録された「昭和五年二月 下伊那郡中部青年会等主催自由大学講座開講案内並会計報告」によって明らかになったものである。清水迪夫は、「開講には疑問をもっている」としていたが（清水 2008：5）、その後の論文では開講されたかたちで講座一覧を掲載している（清水 2017：118）。その後、自由大学運動100周年記念集会での報告「伊那自由大学とは何か」では再び、「主催団体である千代青年会発刊の『千代青年会々史』には何の記載もない」とことと「千代村支部の中心人物楯操が『その時（1929年2月の三木清の講義）文学論について講義をもつことを約束されたが、農村経済を支えていた養蚕業の不振は再びその声咳にふれることを奪ってしまった』（『自由大学研究』第五号68頁）」と書いてあることを根拠に、「1930年2月、三木清の二回目の講座が行われたかについては疑問をもっている」と主張された（清水 2022：31；清水 2024：55-56）。しかし、千代青年会の中心メンバーが自由大学に関わってはいたが、千代青年会は自由大学の主催団体ではなく、中部青年会が共催団体であること、楯操の回想は記憶違いもあり得ること、『三木清全集』第19巻（1968年）「年譜」には1930年の項目に「二月十四―十六日の三日にわたり長野県伊那において講演をおこなった」とあり、また、「御地滞在中はいろいろお世話になりました。今朝無事帰京しました。皆さまによろしく。御発展を祈ります」という30年2月17日付の仙峡閣宛の三木清の礼状があり（鎌倉 2018）、竜峡支部の清沢清之も三木清の講義は、1回目は大願寺で、2回目は竜江小学校の裁縫室で行ったと語っており（吉沢清之より聴取、1976年8月17日）、『長野県史』に収録された北澤小太郎所蔵の文書が捏造でないかぎり、三木が来ていることは確実だと考えられる。なお、鎌倉貞男は、30年2月の三木の講演は伊那富小学校での「唯物弁証法について」だとしているが（鎌倉 2018）、その根拠としている『上伊那教育会沿革誌』の「沿革年表」には「昭和5年」の項に「第三部教員会」の講演として木村素衛「ヘーゲル弁証法につきて」と三木清「唯物弁証法について」が行われたことの記載はあるが、日付は記されておらず（小松編 1977：115）、また、会場の伊那富小学校（上伊那郡伊那富村、現・辰野町）と宿泊先の天竜峡とはかなり距離があり、3日間往復したとは考えにくい。したがって従来、1929年12月のタカラ・テル「日本民族史続講」が伊那自由大学の最後の講座と考えられてきたが、この三木の講座が最後であったことになる。

なお、林源によれば、「三木清が天竜峡へ自由大学会館を建設することを私に熱心にすすめてくれた」という。三木は「自分も東京で学者仲間や同志から資金の半分位を集めてやるからと言ってくれた。しかし、飯田、下伊那であとの半分は集める自信がなく、遂に実現しなかった。このことは実現して居たらと今も残念に思うことである」と林は回想している（林 1976：7）。

- (53) 伊那自由大学千代村支部の講座を聴講した嶋岡潔は、1927年度の千代青年会北部支会図書貸出簿によれば、『資本主義のからくり』『青年読本』『農村問題』『無産農民』『近代の恋愛観』『欺かざるの記』『第二の接吻』『文学に志す人に』『浪六傑作集』『罪と罰』などを、また、嶋岡太郎は『資本主義のからくり』『青年読本』『農村問題』『無産農民』『ゴータ綱領批判』『西郷南州』『浪

六傑作集』『欺かざるの記』『文学に志す人に』『性の闘争と人間苦』などを借りて読んでおり、社会科学、文学、人生論書とオールラウンドに読んでいることが知られる（大串 1980b：118-119）。このタイプの青年たちが青年会で活躍し、とくに嶋岡潔は1927年の会員演説会で「××××」を、31年の青処合同雄弁会で「ブルジョア意識揚棄に就て」と題する演説をしていて（清水編 1934：115、162）、その関心がマルクス主義に向かったことを示している。大串隆吉によれば、二人とも自由大学では今川尚「経済学原論」、三木清「経済学の哲学的基礎」、タカクラ・テル「日本民族史研究続講」の講座を聴講し、また、27年11月の青年会主催講習会で山本宣治「人生生物学」を聴講したという。青年たちがマルクス主義ないし社会科学の学習に向かった理由について、嶋岡潔は、「毎日の生活がきびしかったもので、そこから逃げというあせりがあった。冬は冬で何かせねばならなかった。小作と養蚕をしていたが、かいこを買っても、桑畑の小作にとられる。毎日の生活をみておやじの生活がきびしいとわかっているので正義感があった。何かをぬけだそうという気持が多分にあった」と、言っていたという。家族労働の中で親と一緒に働くことによって、たえず親を見ながらその貧しさを体験していたという事実に応じた発想をしていた。そして、小作農として貧しい現状を打開したいという気持ちが、社会科学の学習に向かわせたのである。伊那自由大学千代村支部の設立は、このような小作農の青年たちの希望に応えようとしたものであったことが知られる（大串 1980b：119）。

- (54) 吉沢敏二は、竜峡支部の中心となった吉沢清之とは従兄弟同士であった。清之によれば、「竜丘小に勤めていたが、自由大学に行き、しゃべることが革新的であった」という（吉沢清之より聴取、1976年8月17日）。竜丘小学校訓導であった敏二は1933年の二・四事件で検挙されたが、処分は不問で終わっている（二・四事件記録刊行会編 1969：243）。34年に竜丘小に赴任して以来吉沢と親交のあった矢沢千里によれば、吉沢は「専攻している哲学や倫理の問題について、中央の学者と質疑通信をしていたというだけの理由で、二・四事件に関係した嫌疑を受けた」という。そして、矢沢が竜丘小に「赴任して間もない職員会の折り、前からいた吉沢君に向って、M（注、両角米平—引用者）校長はあからさまな非難をあげた」が、吉沢は「唯黙々としていた」という。なぜ黙っていたのか、その理由を聞くと、「校長は俺が何を読んでいるか、何を考えているか、監督しているんだ。そして報告しているんだ。俺はいつもお布施と思って聞いてやることにしているんだ」と、吉沢は答えたという。戦後、1949年に富草小学校長に抜擢されたが、矢沢は、「時流に流されず、権勢におもねず、学問と思索に深く、正しい判断と、実践の要と、このように出来た人物は、近年稀と言ってもよい」と、その人柄を評価している。吉沢は、4人の子どものみな先立たれたあと、56年に自死した（矢沢 1956：27-32）。

- (55) 佐々木忠綱は、大下条村の養蚕農家の長男として生まれ、高等小学校卒業後、親に内緒で上伊那農業学校を受験し合格するが、父親は進学を許さなかった。その後も2度受験し合格するが、父親は進学を許さず、断念させられた。1916年、18歳のとき1年間の条件で上田の小県蚕業学校別科に在籍している。伊那自由大学には同じ村の友人松下重光とともに参加した。講師では特に谷川徹三と親しくしていた。筆記ノートを1冊残している。村政には1933年から関係し、助役、村会議員を経て、37年5月～40年7月、43年1月～12月の2期、村長となっている。38年5月に下伊那郡下の村長や県会議員など40人とともに満洲農業移民視察団の一員として現地視察をしたが、「日本人が非常に威張っている」とことと「満人の土地を略奪してどんどんやっていく」やり方に「非常に疑問」をもって、帰ってくる。郡下では「満洲」への分村移民が強力に推し進められたが、佐々木は、分村をおさえたいために、壮年団の役員が非常に怒ったが、分村を進めなかった（座談会 1979：23-24）。佐々木は、自由大学運動60周年記念集会で、次のように語っている（自由大学研究会編 1983：28）。

「長野県は満州開拓を非常に強力に進めましたが、私は絶対にいかんと、県で進めるのはいいけれど、満州開拓を村で進めるのはいかんと。ある時は壮年団が全部寄ってきて、『村長なんだ、分村すべきじゃないか。各村が全て分村しているのに、なぜ分村せんのか』と詰め寄られたことがあります。他の村長と満洲を視察して、どうしても満洲移民を出すべきではないと考えまして、分村を拒否しました。いま考えて、もしあの時に分村しておったならば、大勢の犠牲者を出し、自分も生きておられなかったのではないかなと思うぐらいですが、とにかく自由大学の当時の感激というのが本日まで、間断することなく続いて生きているわけです。」

佐々木は、満洲分村移民を拒否しただけでなく、戦時下にもかかわらず、村民の命と暮らしに直結する教育や医療の問題にも力を入れた。教育問題では中等学校、高等女学校の設立は実現を見なかったが、戦後阿南高校として実現し、医療問題では1939年に郡下ではいち早く国民健康保険組合を設立している。

この佐々木忠綱の生涯と、とくに満洲分村移民を拒否することを貫いた経緯については、米山光儀「自由大学の影響に関する一考察－長野県下伊那郡大下条村の場合－」（『慶應義塾大学教職課程センター年報』第2号、1987年）、大日方悦夫『満洲分村移民を拒否した村長－佐々木忠綱の生き方と信念－』（信濃毎日新聞社、2018年）に詳しい。

- (56) 河野村の胡桃澤盛は、信南自由大学が設立されると期待を寄せ、1924年1月の山本宣治、タカラ・テル、3月の新明正道、12月の谷川徹三の講義を受講している。25年1月に『自由大学雑誌』が刊行されると定期購読をし、日記に『『自由大学雑誌』を読む。これこそ真の大学だ。自由大学こそは真の職業教育、生活の方口（注、途カー引用者）の為ではない心の学究だ。人間は死ぬまで学ばなければならぬ筈だ。自己の職業に携わる傍ら学んでいくのが真の勉強である。自由大学は宣伝ではない。国家主義の宣伝でも、資本主義制度の忠実な思想を人間に持たしめんとする為の学究所でもなければ、共産主義の宣伝所でもない」と記している（1925年2月7日条、「胡桃澤盛日記」刊行会編 2011：291）。胡桃澤は、土田杏村のプロレットカルト論にもとづく自由大学の理念に共鳴していたことが知られる。しかし、これ以後、自由大学を受講することはなく、日記にも5月27日に「自由大学雑誌が来た。倫理を読む。とても無数解しいりろんだ。／つまらん事を考えて居ずに勉強しなければいかんとつくづく感じた。文学論を見た」と書き記して以後（1925年5月27日条、「胡桃澤盛日記」刊行会編 2011：333）、自由大学について記すことはなくなる。胡桃澤は、自由青年連盟、政治研究会下伊那支部の会員にもなっていたが、1926年に下伊那郡青年会から上飯田、上郷、座光寺、竜丘など6村の青年会などが脱退すると、郡青脱退論の立場に立つようになり、青年運動から離脱していった。

胡桃澤は、1930年代になると、昭和恐慌下の1933年に村会議員として村政担当層に加わり、日中戦争下の39年には村助役となり、40年には村長となった。太平洋戦争末期の44年には、村長として満洲分村移民を実施する決断を下した。その河野分村移民は敗戦直後にソ連の侵攻の中で集団自決を遂げた。この無惨な集団自決を知った胡桃澤は、村長辞職後の1946年7月に42歳で自死した（田中 2020：252）。同じ自由大学の受講者であったが、満洲分村移民に対しては、分村を拒否した大下条村の佐々木忠綱とは対照的な立場に立った。自死したことについて、手塚孝典は、「死によって罪を償おうとしたのではない。開拓団を送り出した責任、植民地支配の一端を担わせた責任、集団自決を招いた責任、現地の住民の生活を踏みじった責任……。自らの責任を痛いほど感じていたからこそ、誠実に生きようとすればするほど、受け止められなくなっていったのではないだろうか。生きる「よすが」を失ったのだ」と、孫の伸の思いに託して、記している（手塚 2021：192）。

なお、胡桃澤が伊那自由大学に関わっていた時期の日記を分析したものに清水迪夫「胡桃澤盛と

山本宣治－『胡桃澤盛日記』から－」（大槻宏樹・長島伸一・村田晶子編『自由大学運動の遺産と継承－90周年記念集会の報告－』前野書店、2012年）、胡桃澤盛の戦間期の養蚕農村に生きた民衆の歴史的経験とその社会意識の変容過程を検討したものに田中雅孝「戦間期・農村指導者の主体形成－長野県下伊那郡河野村・胡桃澤盛の事例－」（長野県近代史研究会編『長野県近現代史論集』龍鳳書房）がある。

- (57) 伊那自由大学と自由青年連盟や政治研究会下伊那支部など社会主義青年運動との関係については、自由大学研究の中では論点の1つとなっている。伊那自由大学について最初に検討した宮坂広作は、自由青年連盟の機関紙『第一線』が自由大学擁護を明らかにした一方、LYL検挙事件後、自由大学側は『伊那自由大学とは何か』というパンフレットを発行して社会主義青年運動との関係を意識的に避けた点や、下伊那郡青年会が教育活動の面では基礎的な学習を自由大学に任せる方針をとったが、竜丘・下条村の青年会は郡青の脱退村で、自由大学の基盤には反LYL的傾向がある点で、両者の関係には「すっきりしない点が多い」として結論を保留した（宮坂 1968：473-475）。上木敏郎は、伊那自由大学はLYL・自由青年連盟を脱退した横田憲治・平沢桂二が結成した点や、土田杏村の文化主義を思想的支柱としていることを批判し、自由大学運動を「反動教育運動」として罵倒したことを指摘し（上木 1982：165）、中野光も自由青年連盟は自由大学を「反動教育運動」として批判したことを指摘している（中野 1990：179）。佐々木敏二は、社会主義運動の側から自由大学に触れて、自由大学は創立にあたってはプロレットカルトを標榜したが、LYL検挙事件後は右展開し、社会主義青年運動の側が自由大学に何らかの期待をもったのは1925年3月頃までであったと指摘している（佐々木 1978：175-183）。伊那自由大学について数多くの論文を発表している清水迪夫は、社会主義青年運動の側は、北原亀二のように自由大学に懐疑を示した者と、羽生三七のように理解を示した者とに分かれたが、理解を示していた羽生にしても自由大学を聴講した回数は少なく、メンバーで自由大学を聴講した青年たちは少なかったことなどから、上木・中野の見解に近いことを明らかにしている（清水 2014：28-30；清水 2015：14-16）。私は、これまで明らかにしてきたように、社会主義青年運動に関わった青年たちの中で自由大学を聴講した者は少なかったが、自由大学と社会主義青年運動との間には一定の協力関係があったと考えている。

## 引用・参考文献

- 青木恵一郎 1964 『長野県社会運動史』改訂増補版、巖南堂書店。
- 青木孝寿・上條宏之 1983 『長野県の百年』山川出版社。
- 青山榛三郎 1921 「『潮音』八詠の人々（批評）」（『潮音』第7巻第1号、1921年1月）。
- 栗谷真寿美 2019 「農業青年・楯操－自由大学の回想より－」（『信大史学』第44号）。
- 栗谷真寿美 2024 「伊那自由大学、楯操の『歩き歩いた末』－自由大学での学びとその後－」（大槻宏樹・片岡了・古市将樹・村田晶子・米山光儀編『民衆の感じる痛みに応えようとして生まれた自由大学－自由大学運動100周年記念東京集会論叢－』エイデル研究所）。
- 猪坂直一 1967 『回想・枯れた二枝－信濃黎明会と上田自由大学－』上田市民文化懇話会。
- 石川真澄 1982 『ある社会主義者－羽生三七の歩いた道－』朝日新聞社。
- 伊藤収一 1985 『彼の時彼の人』おさひめ書房。
- 伊藤友久 2001a 「須山賢逸の関連史料－信南自由大学発起人と画家石井柏亭との接点－」（『信濃』第53巻第2号、2001年2月）。
- 伊藤友久 2001b 「須山賢逸の関連史料（二）－信南自由大学の創立と理念－」（『信濃』第53巻第

- 9号、2001年9月)。
- 伊藤友久 2003 「須山賢逸の関連史料(三)ー郡青から信南自由大学へ、そして信濃自由大学との係わりー」(『信濃』第55巻第7号、2003年7月)。
- 伊藤友久 2009 「山本宣治から小林多喜二へー二人のプロレタリア運動家をつなぐある兄弟の人物史ー」(『信濃』第61巻第10号、2009年10月)。
- 今村良夫・今村真直編 1979 『天竜峡ー歴史と叙情ー』(信濃路)。
- 上田市史編さん委員会 1970 『上田近代史』上田市。
- 大串潤児 1999 「戦後改革期、下伊那地域における村政民主化ー長野県下伊那郡上郷村政民主化運動を事例にしてー」(『人民の歴史学』第142号)。
- 大串隆吉 1978 「長野県下伊那郡旧千代村役場青年教育関係資料と解説ー青年会自主化から産業組合青年連盟までー」(『人文学報』第130号)。
- 大串隆吉 1980a 「大正自由教育と青年会自主化運動(上)ー下伊那郡竜丘・千代村の場合を中心にー」(『教育』第30巻第7号、1980年7月、のち『青年団と国際交流の歴史』有信堂高文社、1999年、に収録)。
- 大串隆吉 1980b 「大正自由教育と青年会自主化運動(中)ー下伊那郡竜丘・千代村の場合を中心にー」(『教育』第30巻第8号、1980年8月、のち『青年団と国際交流の歴史』有信堂高文社、1999年、に収録)。
- 大串隆吉 1982 「昭和大恐慌と青年会自主化運動ー下伊那郡竜丘村・千代村を中心にー」(東京都立大学『人文学報』第155号、のち『青年団と国際交流の歴史』有信堂高文社、1999年、に収録)。
- 大崎哲人 2005 「クラルテ運動と小牧近江」(『種蒔く人』『文芸戦線』を読む会編『フロンティアの文学ー雑誌「種蒔く人」の再検討ー』論創社)。
- 大槻宏樹 2005 「学問の磁気と臨界ー福元多世の自由大学と早稲田大学ー」(『早稲田大学史紀要』第37巻[通巻第41号])。
- 大槻宏樹・片岡了・古市将樹・村田晶子・米山光儀編 2024 『民衆の感じる痛みに応えようとして生まれた自由大学ー自由大学運動100周年記念東京集会論叢ー』エイデル研究所。
- 岡本洋之 2021 「土田杏村の彼方に青年たちが見た『学問的自己教育の文化』ー英日比較教育史のなかの自由大学運動と長野県千代村の人々ー」(『日英教育研究フォーラム』第25号)。
- 小黒浩司 2003 「『優良図書館』の誕生ー長野県下伊那郡千代村立千代図書館の歴史ー」(『図書館界』第55巻第5号)。
- 小沢一 1982 「自由大学関係者の証言3 小沢一氏に聞く」(『自由大学研究』第7号)。
- 小田切明德 1979 「解説」(『山本宣治全集』第1巻、汐文社)。
- 大日方悦夫 2018 『満洲分村移民を拒否した村長ー佐々木忠綱の生き方と信念ー』信濃毎日新聞社。
- 蔭山雅博 1977 「大正デモクラシー下の青年団活動についてー鳥取県八頭郡丹比郷青年団の活動を中心にして その一ー」(『响沫集』増井経夫先生・三上次男先生記念、响沫集発行世話人)。
- 鎌倉貞男 2018 「一枚の写真から⑤ 三木清の天竜峡来遊」(『南信州新聞』2018年3月4日)。
- 上木敏郎 1969 「若き日の土田杏村(三)」(『成蹊論叢』第8号)。
- 上木敏郎 1982 『土田杏村と自由大学運動ー教育者としての生涯と業績ー』誠文堂新光社。
- 北澤小太郎 1980 「大正デモクラシーと『龍丘の自由画教育』一」(『伊那』第28巻第9号)。
- 北澤小太郎 1981a 「大正デモクラシーと下伊那の青年たち」(信州の民権百年実行委員会編『信州民権運動史』銀河書房)。
- 北澤小太郎 1981b 「自由大学の想出」(『自由大学研究』別冊2、自由大学運動60周年記念誌)。

- 木下紫水 1921 「ふみさんの絵と歌」(『芸術自由教育』第1巻第7号、1921年7月号)。
- 木下栄治 1982 「私の青春時代と講座」(『伊那自由大学運動60周年記念の集い』)。
- 北原和子編 1982 『北原理一遺稿集』興文社。
- 「胡桃澤盛日記」刊行会編 2011 『胡桃澤盛日記』一、「胡桃澤盛日記」刊行会。
- 「胡桃澤盛日記」刊行会編 2012 『胡桃澤盛日記』二、「胡桃澤盛日記」刊行会。
- 小崎軍司 1978 「高倉輝が農民に語りかけた〈ことば〉－講演資料の紹介－」(『信州白樺』第30号)。
- 小林茂富編 1926 『跡』中塚稲美遺稿刊行会。
- 小松雅喜編 1977 『上伊那教育会沿革誌』増補改訂版、上伊那教育会。
- 斉藤泰雄 2019 「義務教育修了後の青少年のための教育機会の拡充－日本の経験－」(『国際教育協力論集』第22巻第1号)。
- 佐々木敏二 1974 『山本宣治』上巻、汐文社。
- 佐々木敏二 1976 『山本宣治』下巻、汐文社。
- 佐々木敏二 1978 『長野県下伊那社会主義運動史』信州白樺社。
- 佐々木敏二・小田切明徳編 1979 『山本宣治全集』第7巻、汐文社。
- 座談会 1979 『自由大学研究』(別冊1、伊那自由大学の記録)。
- 柴本枝美 2005 「1920年代日本における山本宣治の性教育論－『人生生物学』講義に着目して－」(『教育目標・評価学会紀要』第15号)。
- 柴本枝美 2008 「山本宣治の性教育論における性生活調査の位置づけと役割」(『創発 大阪健康福祉短期大学紀要』第7号)。
- 嶋岡潔 1981 「当時を懐古して」(『自由大学研究』別冊2、自由大学運動60周年記念誌)。
- 嶋岡潔 1983 「自由大学に学ぶ」(「千代風土記」編集委員会編『千代風土記』千代公民館)。
- 清水迪夫 2007 「山本宣治と下伊那の青年たち」(『伊那』第55巻第11号、2007年11月)。
- 清水迪夫 2008 「伊那自由大学と『南信新聞』」(『伊那』第56巻第10号、2008年11月)。
- 清水迪夫 2009 「『軍教問題対談会記事』を読む」(『伊那』第57巻第10号、2009年11月)。
- 清水迪夫 2012a 「胡桃澤盛と山本宣治－『胡桃澤盛日記』から－」(大槻宏樹・長島伸一・村田晶子編『自由大学運動の遺産と継承－90周年記念集会の報告－』前野書店)。
- 清水迪夫 2012b 「下伊那の青年たちが招いた講師－大正後期から昭和初期(一)－」(『伊那』第60巻第12号、2012年12月)。
- 清水迪夫 2013a 「下伊那の青年たちが招いた講師－大正後期から昭和初期(二)－」(『伊那』第61巻第2号、2013年2月)。
- 清水迪夫 2013b 「下伊那の青年たちが招いた講師－大正後期から昭和初期(三)－」(『伊那』第61巻第12号、2013年12月)。
- 清水迪夫 2014 「伊那自由大学と下伊那の青年たち(1)」(『伊那』第62巻第11号、2014年11月)。
- 清水迪夫 2015 「伊那自由大学と下伊那の青年たち(2)」(『伊那』第63巻第3号、2015年3月)。
- 清水迪夫 2017 「伊那自由大学受講生の社会階層」(『飯田歴史研究所年報』第15号)。
- 清水迪夫 2019 「歌誌『夕樺』と下伊那青年運動(1)」(『伊那』第67巻第9号、2019年9月)。
- 清水迪夫 2022 「伊那自由大学とは何か」(自由大学運動100周年記念集会東京集会実行委員会編『自由大学運動100周年記念集会東京集会発表資料集・文献目録』東京集会実行委員会)。
- 清水迪夫 2024 「伊那自由大学とは何か」(大槻宏樹・片岡了・古市将樹・村田晶子・米山光儀編『民衆の感じる痛みに応えようとして生まれた自由大学－自由大学運動100周年記念東京集会論叢－』エイデル研究所)。

- 清水米男編 1934 『千代青年会々史』千代青年会。
- 須崎慎一 1998 『日本ファシズムとその時代－天皇制・軍部・戦争・民衆－』大月書店。
- 下伊那教育会史編集委員会編 1987 『下伊那教育会史 百周年記念』下伊那教育会。
- 自由大学研究会編 1983 『自由大学運動と現代』（自由大学運動60周年集会報告集、信州白樺社）。
- 代田保雄 1923 「昨年度の青年会を顧みて」（『とも』第2年第1号）。
- 代田保雄 1978 「自由大学関係者の証言 1 代田保雄氏に聞く」（『自由大学研究』第5号）。
- 新村出 1951 「ダンテ回想」（『ダンテ学会誌』第1巻）。
- 新明正道 1968 「信濃自由大学の思い出」（上木敏郎編『土田杏村とその時代』第7・8合併号）。
- 須山計一 1953 「感傷と憧憬と――画家の自伝（二）――」（『信州及信州人』第37巻第11号、1953年11月）。
- 須山計一 1974 「信南自由大学のころ」（『信州白樺』第13号）。
- 相馬伸一 2022 「戦前日本におけるコメニウス言説再考 4」（『仏教大学教育学部論集』第33号）。
- 高倉輝 1929 「耕す者は永遠である（農村問題私見）」（『伊那自由大学』第1号）。
- 高倉テル 1939 『ミソクソその他』厚生閣。
- タカラ・テル 1973 「自由大学かんけいの書簡集」（山野晴雄編『伊那自由大学関係書簡（横田家所蔵）』自由大学研究会）。
- タカラ・テル 1981 「自由大学がわたしを変えた」（『自由大学研究』別冊2、自由大学運動60周年記念誌）。
- 田嶋一 2019 「近代日本の青年の自立と教育文化(1)－1920年代における青年たちの自立への希求と自由大学運動－」（「青年の自立と教育文化」研究部会『青年の自立と教育文化』野間教育研究所紀要第61集、野間教育研究所）。
- 楯章 1929 「自由大学とは何か」（『伊那自由大学』第1号）。
- 楯操 1978 「伊那自由大学のこと」（『自由大学研究』第5号）。
- 楯操 1979 「楯操、福元多世両氏を囲んで」（『自由大学研究』別冊1、伊那自由大学の記録）。
- 楯操 1981 「自由大学運動60周年を記念して」（『自由大学研究』別冊2、自由大学運動60周年記念誌）。
- 楯操 1983 「自由大学と私の過ぎ越し方」（「千代風土記」編集委員会編『千代風土記』千代公民館）。
- 田中雅孝 2012 「両大戦間期・下伊那地方の組合生氏と地域経済－小県と下伊那の比較検討－」（『農業史研究』第46号）。
- 田中雅孝 2017 「大正十三年一月の『松下千尋日記』」（『飯田市歴史研究所年報』第15号）。
- 田中雅孝 2020 「戦間期・農村指導者の主体形成－長野県下伊那郡河野村・胡桃澤盛の事例－」（長野県近代史研究会編『長野県近現代史論集』龍鳳書房）。
- 土田杏村 1924a 「自由大学とは何か」（横田憲治編『伊那自由大学とは何か』）。
- 土田杏村 1924b 「自由大学とは何か」（『文化』第7巻第5号、1924年10月）。
- 手塚孝典 2021 『幻の村－哀史・満蒙開拓－』早稲田新書、早稲田大学出版部。
- 東京控訴院検事局 1929 『秘 東京控訴院管内社会運動情勢調査（浦和、千葉、水戸、宇都宮、前橋、静岡、甲府、長野、新潟）』。
- 東京市社会局編 1925 『我国に於ける労働学校 労働学校に関する調査一』東京市。
- 長尾宗次 1981 「伊那自由大学と私」（『自由大学研究』別冊2、自由大学運動60周年記念誌）。
- 中野光 1990 『大正デモクラシーと教育』改訂増補、新評論。
- 長野県編 1972 『長野県政史』第2巻、長野県。

- 長野県下伊那郡青年団史編纂委員会編 1960 『下伊那青年運動史』国土社。
- 長野県特別高等警察課 1931 『県下ニ於ケル社会運動概要』第二輯（青年運動）。
- 二・四事件記録刊行会編 1969 『抵抗の歴史－戦時下長野県における教育労働者の闘い－』労働旬報社。
- 波多野鼎 1968 「自由大学の想出」（上木敏郎編『土田杏村とその時代』第7・8合併号）。
- 羽生白葉 1920 「寂しき道」（『潮音』第6巻第12号、1920年12月）。
- 羽生三七 1977 「ある社会主義者の歩み 第1回 伊那谷にともした灯」（『月刊社会党』第245号、1977年4月）。
- 羽生三七 1978a 「羽生三七氏の証言」（『伊那自由大学復刻版月報』）。
- 羽生三七 1978b 「下伊那青年運動史の証言」（『季刊現代史』第9号）。
- 林源 1929 「後援会解散に就て」（『伊那自由大学』第1号）。
- 林源 1976 「伊那自由大学について－断章」（『伊那自由大学の回想』）。
- 林源 1978 「『伊那自由大学』第一号について」（『伊那自由大学復刻版月報』）。
- 林源 1982 「自由大学あれこれ」（『伊那自由大学運動60周年記念の集い』自由大学研究会・飯田歴史大学・市立飯田図書館）。
- 平沢桂二 1921 「青年会の使命に対する一考察」（『天竜公論』第3年第2号）。
- 平沢徹編 1991 『青嵐の譜－平沢桂二 人と思ひ出－』平沢滋。
- 福元多世 1978 「自由大学と二人の兄－義兄・横田憲治と兄・平沢桂二－」（『自由大学研究』第5号）。
- 宮坂広作 1968 『近代日本社会教育史の研究』法政大学出版会。
- 矢沢千里 1956 「吉沢敏二君を憶う」（『下伊那教育』第33号、1956年9月）。
- 山口和宏 1994 「自由大学運動における『教養主義』再考」（『日本社会教育学会紀要』第30号）。
- 山田邦夫 1974 「『夕樺』の創刊と『潮音』について」（『ぬかご』第7号）。
- 山田旦編 1995 『道－山田邦夫遺稿集－』非売品。
- 山梨教会百年史編纂委員会編 2009 『日本基督教団 山梨教会百年史』日本基督教団山梨教会。
- 山野晴雄編 1973 『伊那自由大学関係書簡（横田家所蔵）』自由大学研究会。
- 山野晴雄 1975 「伊那自由大学の歴史」（『月刊社会教育』第19巻第9号、1975年9月）。
- 山野晴雄 1978 「山本宣治と自由大学運動」（『信州白樺』第30号、1978年12月）。
- 山野晴雄 1979 「藤田喜作の色紙」（『自由大学研究通信』第2号）。
- 山野晴雄 2022a 「唐澤正平と自由大学運動－松本自由大学と群馬自由大学－」（『大正デモクラシーと地域民衆の自己教育運動－自由大学運動の研究－』自由大学研究・資料室、2023年、所収）。
- 山野晴雄 2022b 『上田自由大学の歴史』自由大学研究・資料室。
- 山野晴雄 2023 『大正デモクラシーと地域民衆の自己教育運動－自由大学運動の研究－』自由大学研究・資料室。
- 山本宣治 1925 「自由教育の二潮流」（『自由大学雑誌』耐1巻第2号、1925年2月）。
- 山本宣治 1979 「若い男の性生活－現代の日本人に就いて調べた統計の研究－」（佐々木敏二・小田切明德編『山本宣治全集』第1巻、汐文社）。
- 横田憲治 1923 「雑詠集」（『国民文学』第101号、1923年1月）。
- 横田憲治編 1924 『自由大学とは何か』非売品。
- 吉沢清之 1929 「自由大学運動の精神を語る（一）－抱擁性に就て－」（『伊那自由大学』第1号）。
- 米山光儀 1986 「伊那自由大学とタカクラ・テル」（『慶應義塾大学教職課程センター年報』第1号）。
- 米山光儀 1987 「自由大学の影響に関する一考察－長野県下伊那郡大下条村の場合－」（『慶應義

塾大学教職課程センター年報』第2号)。

米山光儀 2006 「タカクラ・テルと自由大学」(長野大学編『上田自由大学とその周辺』郷土出版社)。

米山光儀 2022 「自由大学の影響を考える－林源と勤労青少年教育－」(自由大学運動100周年記念集会東京集会実行委員会編『自由大学運動100周年記念集会東京集会発表資料集・文献目録』東京集会実行委員会)。

米山光儀 2024 「自由大学の影響を考える－林源と勤労青少年教育－」(大槻宏樹・片岡了・古市将樹・村田晶子・米山光儀編『民衆の感じる痛みに応えようとして生まれた自由大学－自由大学運動100周年記念東京集会論叢－』エイデル研究所)。

\* 本稿は、拙稿「伊那自由大学の成立と経過」(山野晴雄編『伊那自由大学関係書簡(横田家所蔵)』自由大学研究会、1973年)及び「伊那自由大学の歴史」(『月刊社会教育』第19巻第9号、1975年9月)をもとに大幅に加筆・修正したものである。なお、拙著『大正デモクラシーと地域民衆の自己教育運動－自由大学運動の研究－』(自由大学研究・資料室、2023年)所収論文を一部加筆・修正をした。